

特 216

917

郷土史

岡山縣總社高等女學校



始



はしがき

夫れ吉備の地たる發祥殊に古く、我が建國の昔より現代に至るまで常に郷土の歴史は國史の一部分を成し聯關最も深く、恰も吉備史は大日本史縮寫の如き感あり。我等は終始生徒と共に近郷の舊跡を訪ねては往古を懐ひ、先哲の事歴を物語つては其遺徳を偲ぶ、眞に亦興多きものあり。今一小冊子郷土史を録して課外教授の資にせんことを欲し第一篇に郷土史の一般を述べ第二篇に地方著名史實の概要を摘記し第三篇に於て國史に織り込まるべき地方史の項目を載せたり。

昭和七年十二月

福 武 辰 衛 識 す

郷土史目次

第一編 総説

吉備兒島	.....	一
吉備民族	.....	一
神武天皇	.....	二
吉備津彦命	.....	二
系圖	.....	二
吉備の政治	.....	四
奈良時代	..... (報恩大師。吉備真備。和氣清麻呂).....	四
平安時代	..... (藤原保期。源平の頃。藤原成親。水島戰。佐々木盛綱).....	六
鎌倉時代	..... (僧源空。僧榮西。吉備劍工。頼仁親王。兒島高德。有元佐弘。大井田氏經).....	九
吉野朝及室町時代	..... (安國寺。大覺大僧正。圓應大師。僧雪舟).....	一三
戰國時代	..... (赤松氏。浦上氏。福岡合戰。宇喜多氏。後藤氏。三浦氏。尼子氏。毛利氏。三村氏。猿掛戰。明善寺戰。幸山城。經山城。山中鹿之助。足利義昭。三村氏亡ぶ。秀吉の中興經營。上月城。高松城。宇喜多秀家。小早川秀秋).....	一五
江戸時代	..... (岡山城。鶴山城。松山城。諸藩(岡山。鴨方。生坂。津山。松山。足守。勝山。岡田。淺尾。成羽。新見。鶴田)..... 旗本(高松。撫川。井原。等)..... 天領(倉敷。笠岡。久世。等)..... 名君賢士(池田光政。松平康哉。板倉勝靜。木下公定。池田政香。伊東長詮。蒔田廣孝。戸川安清。池田長發。井戸平左衛門。早川八郎右衛門。岸本武太夫。池田綱政).....	二二

福谷	岩田	日近	大井	足守	阿曾	富山	水内	下倉	日美	大和	池田	新本	山代	久田	秦	穗	吳	箭	蘭	岡	二
村	村	村	村	町	村	村	村	村	村	村	村	村	村	村	村	村	村	村	村	村	村
.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....
七〇	六九	六九	六九	六八	六七	六七	六六	六六	六六	六五	六四	六四	六三	六三	六二	六二	六一	六〇	六〇	五九	五九

川神	清音	常在	庄盤	加茂	山手	三須	庭瀬	眞金	高松	生石	服部	總社	現
邊	在	音	盤	茂	手	須	瀬	金	松	石	部	社	
村	村	村	村	村	村	村	町	町	町	村	村	町	
.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	
五八	五八	五七	五六	五六	五五	五五	五三	五二	五二	五一	五一	四九	四六

第一編 地方誌

偉人傑士 (小松原英太郎。西穀一。花房義實。津田眞道。菊地大麓。有松英義。犬養毅。黑瀬義門。岡玄卿。原田一道。大藏平三。藤井較一。鳩山和夫。櫻井熊太郎。杉山岩三郎。馬越恭平。久原躬弦。大西祝。綱島榮一郎。川田剛。三島毅。岸田吟香。磯崎眠龜。雲照律師。石井十次。兒島虎次郎) 三九

森 忠政。松平齊民。小堀政一。水谷勝隆。木下勝俊。熊澤蕃山。津田永忠。石川成一。熊田洽。山田方谷。室 鳩巢。古川古松軒。西山拙齋。阪谷朗廬。藤井高尙。緒方洪庵。宇田川玄隨。箕作阮甫。川上忠晶。黑住宗忠。金光大陣。釋 日生。藤本鐵石。關藤々蔭。牧野權六郎) 二

第三編 國史科と郷土

神代皇基遼遠……………七一  
 神武天皇……………七一  
 崇神天皇・垂仁天皇……………七二  
 日本武尊……………七四  
 三韓任那及三國・神功皇后・文物の傳來……………七五  
 仁徳天皇……………七九  
 大陸との交通・朝鮮半島の變遷……………八〇  
 佛教の傳來・蘇我・物部二氏の爭……………八〇  
 聖德太子・支那へ使節派遣……………八〇  
 佛教の興隆・美術工藝の進歩……………八一  
 蘇我氏の無道……………八一  
 大化の改新……………八二  
 蝦夷の服屬・朝鮮半島の變遷……………八三  
 奈良奠都・隼人及西南諸島の服屬……………八三  
 聖武天皇・奈良時代の佛教文物……………八三  
 和氣清麿及廣虫……………八四  
 平安奠都・蝦夷の鎮定……………八五  
 朝鮮半島の變遷・渤海の入貢・佛教新宗派……………八五  
 攝政關白……………八六  
 菅原道真……………八六  
 地方の情況・承平天慶の亂……………八八

平安時代の文物……………八八  
 刀伊の入寇・前九年・後三年の役……………八九  
 後三條天皇・僧兵……………八九  
 源平二氏の隆替・平氏の滅亡……………九〇  
 源頼朝・鎌倉幕府……………九一  
 鎌倉時代の文物……………九一  
 蒙古と高麗・元寇……………九二  
 北條氏亡ぶ……………九三  
 建武中興・足利尊氏の叛・楠木正成・新田義貞等の勤王……………九三  
 吉野朝廷……………九四  
 室町幕府……………九五  
 關東管領……………九五  
 應仁の亂……………九五  
 室町時代の佛教文物……………九六  
 群雄割據……………九七  
 明との交通・高麗と朝鮮・歐羅巴人の來航……………九九  
 織田信長……………九九  
 豊臣秀吉……………九九  
 朝鮮征伐……………九九  
 徳川家康・關ヶ原戰・豊臣氏の滅亡……………一〇〇  
 江戸幕府・徳川家光……………一〇三  
 海外諸國との交通・天主教の禁・島原の亂……………一〇四

德川綱吉……德川吉宗……………	一〇四
江戸時代の佛教文物……西洋學術の傳來……………	一〇五
諸藩の治……………	一〇九
國史古典の研究……………	一一〇
露人の來航……海防論……蝦夷地の開拓……………	一一一
米使節の來朝……開港攘夷の論……和親條約……………	一一一
安政の大獄……幕府の衰頹……………	一一一
長州征伐……………	一一一
大政奉還……………	一一一
鳥羽伏見の戰……明治戊辰の役……………	一一一
現代一般……………	一一三

郷土史目次終り

# 郷土史

## 第一篇 總説

吉備兒島

吉備民族

吉備（美作・備前・備中・備後）の總稱の地名は、遠く神代の昔からあつて古事記に伊邪那岐命、伊邪那美命といふ御二方が吉備の兒島を生ませ給ふたこあるが如く上古から傳へられて居て昔から我が國の重要な地域である。此の地方は南は瀬戸内海に臨み北は中國山脉に境せられて氣候は暖く、地味は肥え、而も水陸交通の便がよくて早くから民族の發展に適し、文化の最も進んだ地方であつた。

學者の研究によると太古からの住民は (一)石器時代の民族 (二)大山祇派の民族 (三)出雲派の民族 (四)高千穂派の民族なきであつて稍々降つて (五)歸化系民族が加はつて今日の地方民即ち岡山縣民が出來たといふ事である。石器時代の民族の遺跡を傳へられる貝塚が邑久郡豊原村、都窪郡菅生村、淺口郡大島村あたりに見られるが何れも當時使用の石器や土器なきも發掘されて居り、此吉備郡地方にも石斧や石鏃が各地で發見されて居るから、太古石器時代の民族が住まつて居たこいふことがよく判る譯である。次に大山祇派民族は又海部といつて筑紫を本據とした海神族の植民で、それが古史に屢々吉備海部の名を以て著はれ海上生活をなした漁民がそれである。次は出雲派民族との關係であるが何分地勢上背合せのこゝではあり我が國でも最も早く文化の優れた出雲地方の事であつたのであるから自ら吉備の地も其勢力範圍に屬したこゝと思はれる。殊に素盞鳴尊斷蛇の御劍を赤磐郡布都美村に奉安した事や其他各地に出雲民族の神を多く齋き祭つてある事などに徴しても此派の民族の繁衍が合點出来る。次に天孫降臨族即高千穂民族の此吉備の地に直接關係を持つ様になつたのは神武天皇の御東征や、大吉備津彦命の御西征、又和氣氏の備前領有などによつて生じたもので、殊に吉備津彦命の土着によつて其裔孫吉備氏が一大發展をなして高千穂派民族を以て全吉備を被ふたこいふてよい位である。そして其處へ朝鮮などから豪族の歸化もあり、わけて

神武天皇

吉備津彦命

應神天皇の頃なるに支那の名族 秦の始皇帝の後である融通王弓月君(後の秦氏)が多く、民と共に歸化して日本の各地に蕃衍したが此吉備の地へも今も其名残りとして秦村・蟠多村・或は土田といふ地名を存して居り、又同じ頃後漢の靈帝の裔である阿知使主父子などもやつて来たもので、之に因む淺口郡及倉敷市の阿知町又は吉備・上道・邑久の諸郡に於ける阿知・可知の地名は正に其名残りであり、此外或は吳妹といひ服部といひ或は西郡(錦織)といひ随分支那・朝鮮から入り込んだ相當賢い歸化系種族も混つて居る譯である。かくて之等を統一したのが大吉備津彦命の率ゐられた吉備氏なのである。

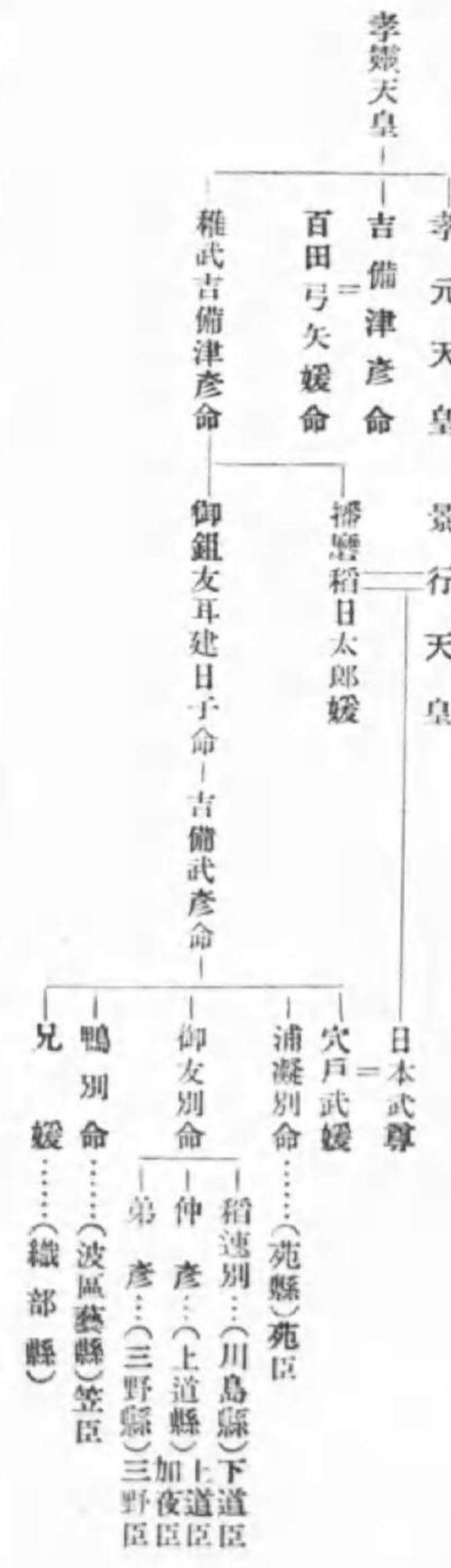
初め神武天皇が舟師を進めて日向から御東征遊ばされた際、安藝の埃宮から此吉備に入らせられ行宮を高島に建てられて東進の御用意をなさつたが其御滞留三年(古事記には八年)如何に吉備の文化が進んで戦備を整へさせられるに都合がよかつたかを強く物語つて居る譯である。今高島の地名を残すものに、小田郡神島外村・兒島郡甲浦村・上道郡龍口山麓等があつて何れも遺跡が保存されて居る。

次に吉備津彦命は何故西道吉備へ成らせられたかといへば、人皇第一代神武天皇の大和橿原宮御即位から御九代の間大和地方は全く皇化に浴したが猶更に四方に天恩の及ばぬ地方があるからといふので第十代崇神天皇の時、大倭朝廷の基礎が鞏固になるに共、四道に將軍を遣はされたもので、當時此吉備の地方には随分出雲族の勢力が盛んで我儘な振舞も多く、又朝鮮から来たと傳へられる豪族温羅(百濟王族)吉備郡阿曾村鬼城に居て吉備冠者(稱した)といふ海賊の親分や、蟹島帥(阿哲郡石蟹に居を構へて備中北部から伯耆の方へ亘つて勢力を有した)などいふ悪者が居たので之等を鎮撫の爲に四道將軍の一人として西に向はれたのが大吉備津彦命である。かくて吉備の元兇全く誅に伏して平定され愈々御一族土着所謂吉備氏繁衍の源を茲に發した譯で、我等は忝くも正に其後裔に當るのであつて、吉備の人達が吉備津神社を大氏神と稱へ奉る所以である。命の裔孫は又畏くも皇室に御縁戚深く且つ忠勤を擧んでられ、中にも命の御弟稚武吉備津彦命の御女播磨稻日太郎媛が景行天皇の皇后に立たせられて名高い日本武尊を生み奉り、又尊の御妃として吉備武彦の御女穴戸武媛が配せられ給ふたこと及び其御妹媛が應神天皇の御妃にならせられた事などは最も著しい御關係で、當時應神天皇は兄媛の里方である葉田莊(土田)葦森宮(足守)へ天

皇の二十二年九月行幸になつたものである。其時は吉備氏の本宗は眞金村中山の地から足守町大神谷の地に遷されてゐて媛の兄御友別命は一族と共に奉饗の至誠を捧けたが愾感斜ならず、其子弟に夫々地を賜ふた。(序でに申すに次の仁徳天皇も吉備海部直の女黒媛の都から暇を賜はつて歸つて居たのを訪ね給ふて都窪郡山方へ成らせられたと傳へられて居る、今も土地の人は三須の蝙蝠塚を此黒媛の塚ではあるまいかといふて居る) 又吉備武彦命が日本武尊に隨つて蝦夷征伐に功を立てられたり、鴨別命が仲哀・應神二朝に仕へ特に神功皇后新羅御征伐の砌り別に命を受けて熊襲平定に當つた如きは名高い事であつて、常に皇業を翼賛し奉つたもので、其流れを汲む吉備氏も自ら繁榮を來したものである。然るに第二十一代雄略天皇の時、吉備上道臣田狭が朝鮮の任那に叛したり、同じく下道臣前津屋が悪戯を演じたりした事は大きな失敗であつて、盛んであつた吉備氏をして慥に下り坂に向けたこと共に吉備史に汚點を留めた譯である。

○吉備津彦命は一名彦五十狹芹彦命と申し孝靈天皇の第三皇子で御母は倭國會媛である。四道將軍の一人として崇神天皇の十年西道に向はれたが、發するに當つて武埴安彦及妻吾田媛の叛亂を平定されて西下された御弟稚武彦命と共に吉備國を綏撫されて勳功を立てられ遂に其地で薨せられた(御壽二百八十一歳と傳ふ) 今官幣中社吉備津神社に齋き祀り御陵は馬頭陵と申上げ所謂吉備中山(茶臼山又は鯉山)の頂に在る。

吉備氏略系



吉備の政治

吉備の地名、寸箴と記し又神武天皇御東征の時、高島宮の庭中に大蔵生じたこと黄薇といふれきも木國（紀伊）粟國（安房・阿波）より察すれば吉備は黍穀の國であらう。上古南方は島海であつたが陸地の隆起と河川の堆積とで平野をなしたもので、貝塚の有様、海神を祭つて居る模様又は地名に例へば尾崎・江崎・福崎・赤濱・庭瀬・早島・松島等の名を存するのを見ても、又吉備穴海なごの古名なごから察しても其昔の状態が想像出来る。そして之等の地域に海部の集團もあれば出雲族の部落もあつて夫々散在して居たであらうが、漸く統一的政治を見るに至つたのは吉備津彦命が鎮撫された以後の事に屬するものと思はれる。即ち國郡政治の端は茲に發した譯であるが當時はまだ其國といひ郡といひ縣といふも別に大差があつたのではない。第十代崇神天皇から後次第に置かれた國郡に中縣・加夜・上道・下道・太伯の諸國造、川島・苑・織部・石无等の諸縣があつたが其多くは吉備氏の一族を以て官に配せられた。吉備分國の事が判然としたのは第三十六代孝德天皇の御代即ち大化改新の時の事で、備前・備中・備後の三國に分れ、更に第四十三代元明天皇の和銅六年に備前を割いて美作を増置された。國府に國司（守・介・掾・目）郡に郡司（大領・少領・主政・主帳）を置いて庶政を總べしめられた。國廳の位置は多少の變遷はあつたが大休備前は上道郡高島村國府市場、備中は吉備郡服部村金井戸、美作は苦田郡西苦田村總社に在つたのである。

奈良時代

（報恩大師）

奈良時代に至つて佛教が非常に興隆して聖武天皇の如き諸國に國分寺を設けられて天下泰平を祈らせ給ふたが之亦其遺跡を今に傳へて居る。寺は國分寺（金光明四天王護國寺）并に國分尼寺（法華滅罪寺）であるが備中のは都窪郡三須村に、備前のは赤磐郡西高月村に、美作のは勝田郡河邊村に夫々今も其跡を傳へて居る。此時代に郷土の産んだ名僧に御津郡馬屋下村芳賀から出た報恩大師がある。報恩は稱徳・桓武二帝の歸依を受けて大和に兒島寺を、備前に四十八箇寺及御津郡の金山寺、邑久郡の弘法寺、上道郡に西大寺を、備中に都窪郡の日差寺・福山寺、吉備郡の鏡善寺等而建て更に和氣郡熊山に戒壇を創建した人である。猶當時の吉備から出た偉才に吉備眞備と和氣清麿がある。眞備は下道氏の出で大吉備津彦命の裔である。遺唐留學すること十九年で才學共に秀でて居た爲に職位正二位右大臣の高きに昇つて國政に與つた。

（吉備眞備）

（和氣清麿）

今吉備郡箭田に吉備公の墓があり、附近に平地佛教の名残りであつて吉備公に因縁深い吉備寺がある。清麿は垂仁天皇の皇子鐸石別命から出て曾孫の弟彦王に至つて神功皇后に仕へて功があり爲に磐梨縣を賜はつて世々備前に住んで居たもので、其裔孫に清麿及姉の廣虫が出て、共に孝謙天皇に仕へて恩寵を蒙つた。偶々僧道鏡が非望を抱くに及んで朝命を奉じて九州宇佐に使用して神託を拜し復命して以て其無道を叱し、道鏡を斥けて國家の安泰を圖つたことはよく人の知る所であるが其誠忠は實に千古に貫いて朽ちない譯である。清麿は此事ばかりでなく更に平安奠都を奏請して一千有余年の帝都たらしめたといふ功を重ねた人である。今京都御所の前に清麿公を祀つて別格官幣社護王神社と稱へまつるが誠に故なきにあらずと思ふ。

○報恩は芳賀の人、十五歳で家を出て修業し三十歳の時、吉野山に入つて觀世音の咒を修め四五年の間に早くも靈感を得たものである。天平勝寶四年孝謙天皇の不豫を加持し奉つて驗があり恩之より沙彌となり名を報恩と勅賜された。爾來益々勸修大いに努めたが、時に桓武天皇御病あり恩召によつて宮に入り日を閉ぢて根本咒を持すること五十回、帝の病瘥れた。上、恩に給賞される事甚だ遅く且つ興を賜はつたが辭して徒歩のまま歸つた。報恩初め天平勝寶四年大和國高市郡に子島寺を興し郷土にも亦多くの伽藍を設けたが延暦十四年寂した。

○吉備眞備は吉備郡箭田の人、其先は吉備津彦命で世々吉備に居り御友別の子稻連別川島縣を食み子孫下道臣を以て姓とした、眞備は此裔に當り自ら姓を吉備に改めたもので父は下道朝臣右衛門少尉國勝である。第四十四代元正天皇の靈龜二年遺唐留學生となつたが時に年二十四歳であつた。彼の地で親しく經史を研究し傍ら樂藝を修めたが當時の留學生で名を唐土に成したものは眞備及阿部仲磨の二人であつた。仲磨は唐に客死し、眞備は在唐十九年の後歸朝し正六位下大學助から累遷して第四十八代稱徳天皇の天平神護二年從二位右大臣に擢んでられ尋いで帝其筆に幸せられて正二位を授けられるに至つた。實に異數の出世振りである。當時大化改新の功勞者であつた大職冠鎌足の孫達が朝廷に仕へて居たが何れも出色の人物といふでもなく比較的早く病死して藤原氏退潮の時であつたので橋諸見や眞備の如き才學ある者が登用されたといふ譯である。眞備は後に天武天皇の皇孫文室淳三又は其弟大市を立てんとしたが藤原百川は從兄左大臣永手等と相談して光仁天皇を擁立したので眞備は啞然としたが如何ともする事が出来ず遂に上書して職を辭し後寶龜六年八十三歳で薨じた。子伊豫守泉弘仁中參議に任ぜられ左衛門督を兼ね正四位上に昇つたが弘仁



五年享年七十二で卒した。

○和氣清府は垂仁天皇の御子鐸石別命から出たもので和氣郡藤野の人である。命の曾孫弟彦王は應神天皇の御代軍功を以て吉備磐梨の縣を賜はつた爲世々此處に住まつて居た。清府舊姓は磐梨別公、後に藤野別真人と改めた。初め右兵衛少尉、更に近衛將監に進んだ。然るに僧道鏡當時孝謙天皇の恩寵を蒙り偶々大宰主神中臣習宜阿曾磨八幡宮の神教と稱し道鏡をして帝位に即かしめ様としたが天皇は清府に神威を聽かしめられた。そこで清府は路豊永に決死を誓つて宇佐に赴き復奏して「開闢以來君臣の分定まれり、天日嗣には必ず皇緒を立てよ、無道の者は速に除くべし」との神勅である。四邊懼らず申述べた爲、道鏡の怒に觸れ別部稚麻呂改められて大隅へ流された。參議藤原百川は其忠烈を慕んで備後の封二十戸を割いて與へた。尋いで光仁天皇踐祚され道鏡は下野藥師寺別當に貶せられ清府は召還されて本官に復し累進正四位上に進み姓を和氣朝臣と賜はり平安寛都の功により從三位に叙せられた。延暦十八年病んで薨じた年六十七、今正一位を追贈され別格官幣社に列し護王神社に祭られて居る。姉廣虫葛木戸主に嫁して居たが後孝謙天皇の寵を蒙り天皇の寵愛に從ふて之より法均尼と稱した。藤原仲麻呂の亂に滅利を奏請し飢饉の時粟兒八十三名を育て實に慈悲の心が深かつた。清府の事に連坐して備後に流されたが後召還され典蔵となつた。延暦十七年七十で歿し正三位を贈られた。今和氣郡に此姉弟を祀つた靈社藤野神社がある。

奈良七代七堂伽藍八重櫻の如く遣唐使往來につれて大陸文明は輸入され空前の隆盛期を現出したが中にも其中心をなすものは佛教文化であつた。然し盛んなるもの必ず弊害を伴ふもので加ふるに民心漸く頹廢して遷都の必要を感じる様になり第五十代桓武天皇は延暦三年山城國乙訓郡長岡の地を選定されて造宮經營を命ぜられたが十年を経て功成らなかつた。そこで天皇は和氣清府の建議を用ひられて更に葛野郡宇太の地をトせられて大いに新都を營ませられ延暦十三年に遷都あせられた。之が今の京都の地の事で平安の京といふのである。是から明治天皇の御代まで一千七十餘年間の帝都が奠められた譯で清府の功又大なるものがある。さて奈良時代は平地佛教の餘弊救ひ難いものがあつたので此時代に入つて僧侶の生活を俗界から離れしめて清らかなものにしよといふので所謂山上伽藍の建設を見るに至つたが最澄の比叡山延曆寺、空海の高野山金剛峯寺、然も其施を示したものは實に我が報恩大師である。平安京時代和氣氏、吉備氏共に餘り顯れず、都に於ては漸次藤原氏獨り榮え、後には皇族の方々といへども中央に志を得させ給

### 平安時代

### (藤原保則)

はず姓氏を賜はつて地方官に任ぜられた位であるから我郷土の人々で盛名を謳はれたといふ様な者は無い譯である。然し當時地方官として吉備の地へ赴任した、良官明府は比較的數多く、自ら京鄙の聯絡開發に資したるものも尠くなかつた。例へば第五十六代清和天皇の貞觀八年備中權介に任ぜられた藤原保則の如き備北の民をよく綏撫して名吏の譽高く、後備前守に轉じて治績大いに見るべきものがあつて領民は慈父の如く高德を慕ふた。其他三善清行あり、大江匡房あり、令名一世に高い良國司の人々も擧げ難い程である。一体大化改新當時から鎌倉幕府創設まで作州二備に來任した國司は其數一千三百餘名、之等の人々によつて、國府を中心として地方文化は開發され、任滿ちて都へ歸れば地方情勢を慮つて爲政の資とし前後治民教化に力を盡すことが少くなかつたのである。此外中世以後大嘗祭神饌の主基田を丹波三備中三交互に定めさせられ其度毎に主基地方風俗歌を併せ奉つて郷土の誇を雲上に聞え上げたものである。

敬神の念の厚いのは我が國古來の美風であるが第五十八代光孝天皇の仁和年間主要神社の等級といふ意味で諸國一の宮を定められ第六十代醍醐天皇の時、延喜神名式を制定されて神祇官及國司から夫々一宮の社人に通告布達されてから愈々の宮二の宮といふ様に定まつたものである。備前の吉備津彦神社、備中の吉備津神社、美作の中山神社が即ちそれである。(今は國幣中社として更に邑久郡に阿仁神社がある)猶國司の巡拜、朔幣の便利の爲に管内諸社を國廳附近に合祀した總社といふのが各一つあつて國司所祭の宮として崇敬したものである。

### (源平の頃) (藤原成親)

由來備作の地は東西交通の要路に當つていたので海賊なごも非常に變つて居た。平氏は西方の海賊を平けて勢力を加へたのであるが第七十五代崇徳天皇の頃備前守であつた平忠盛は勅を奉じて之等を平定して平家繁榮の基を開いた。然るに嬌る平氏久しからず、平清盛の横暴振りが募つて來るに後白河法皇の寵臣である大納言藤原成親等が之を減そうと計つて同志の者と共に京都の鹿ヶ谷に會したが、事顯れて成親は備前に流された。やがて備中有木の別所(眞金村)に移されて此處で殺された。まだ清盛の爲に流されたものに關白藤原基房があるが此人は上道郡湯迫(高島村)に居たので今も關白屋敷の名残を留めて居る。當時平家方の部將に備中板倉の人で妹尾莊を食んで居た妹尾太郎兼康といふものが居た。湛井十二箇郷の

(水島戦)

(佐々木盛綱)

用水路を鑿いて民利に意を注いだ。後には木曾義仲の部将今井兼平と戦ふて討死した。其頃同じく平家方に御津郡一宮の社人に難波次郎経遠があつて見俊定、弟経房なきに清盛に仕へて功があつたものである。治承四年高倉天皇の庶兄以仁王が旨を傳へられて諸國の源氏が起つたが、中でも木曾義仲は平家の軍を俱利伽羅谷に追落して都に迫つた。平家方は之を恐れて清盛の子宗盛は第八十一代安徳天皇を奉じて一族と共に一度西海に走つたが後屋島に戻つて行宮を定め義仲の叔父行家が備前守として國府に居たのを討たうとして平教盛、田口成良等が押寄せ形勢であつたが義仲の部下である信濃の人矢田義清、海野行廣等が進んで之等の勢を備中水島(玉島町柏島)に會戦したが源氏方は水戰に不得手で敗れた。之は壽永二年のことである。又頼朝の命によつて西に向ふた源氏方の軍勢は壽永三年二月、一の谷の戰に平家方を破り九郎義経は之を逐ふて讃岐の屋島に迫り、蒲冠者範頼は山陽道を進んで西下した。時に兒島の粒江の城に左馬頭平行盛が二千餘騎を従へて陣取つて居るのを範頼の部将佐々木三郎盛綱が藤戸の淺海を馬で渡つて平軍を破つた。之が有名な藤戸合戦で、一の谷の戰のあつた年の暮から翌年一月にかけての事である。盛綱は宇治川先陣で世に知られて居る四郎高綱の兄であるが、やがて頼朝から馬で海を渡ること稀代の勝事である。戰功を賞せられて兒島を賜はつた。今も邑久郡上寺山北島八幡宮に盛綱の奉納した甲冑が保存されて居る。

○妹尾兼康は備中板倉の人、其先は武内宿禰の後といふ、兼康の祖父兼門は平治の亂に義朝に味方したが兼康に至つて清盛に順ひ妹尾莊を食んだ。壽永中平維盛に従ふて木曾義仲を討ち安宅渡に敗れて倉光成澄の爲に捕へられ義仲の命で成澄の弟成氏に屬せしめられた。兼康不本意ながら心を屈して之に従ひ成氏に勸めて妹尾の郷土の肥沃軍備を整ふに便なるを説いて與に備中に向つたが播磨の國府に至つて兼康の弟宗康も來り迎へて三石驛に酒を置いて大いに會飲し成氏も醉臥した。時に兼康之を刺して兵二千騎を集めて篠ヶ道城(岡山市津島)に據り板倉の壘をも修めて義仲の軍を支へようとしたが義仲大いに怒つて部将今井兼平をして攻めさせた。兼平の軍は雲佐の渡(赤磐郡西高月)を越へて不意に間道から攻め寄せたので兼康等は敗れて西に走つたが、ついで板倉の壘も陥つて宗康父子は戦死した。墓は眞金村に在り又兼康は瀬井壘の功を稱へて井神社に祀られて居る。

鎌倉時代

頼朝が平氏を討滅して鎌倉に幕府を開いたが大江廣元の議を用ひて、不仲になつた義経、行家、其他謀叛人搜索の事に託して文治元年奏請の上鎌倉の家人を配つて國衙莊園に守護地頭を置いた。之から天下の實權は頼朝の手に歸して所謂武家幕府政治が創まつた。守護は軍事警察の事を掌り、地頭は兵糧米の徵收に當つたのであるが、時に一人で之を兼ね、或は數ヶ國兼職の場合もあつた。兎に角之から國司、郡司は全く無用の長物になつた譯である。かくて最初に吉備の地の守護に任せられたものは第八十二代後鳥羽天皇の元暦元年二月命を受けた土肥實平梶原景時(播磨・美作・備前・備中・備後の五箇國守護)の兩名である。

佛教は平安朝以來の舊佛教が生命を喪ふて萎微振はないのに乘じて此時代に潑刺たる生氣を持つた愈々日本的な新佛教が起つて來た。恰も政治の上に實力ある武家が華奢文弱に流れた公家を壓倒したが如くに極めて簡易に而も實際に適する當時の氣風其儘に新派が生れたものである。中にも念佛宗を確立した僧源空と臨濟宗を宋から將來した榮西とは共に當時の新宗教界の重鎮であつて何れも我が岡山縣の産んだ碩徳である。源空は久米郡誕生寺の地に育ち叔父觀覺を始め各地の名僧智識を尋ねて佛法を研究し遂に高倉天皇の安元二年佛教の本意を極め淨土宗を開いて常に佛を信じて南無阿彌陀佛の六字の名號を唱へて居れば男女貴賤を問はず極樂淨土往生疑ひなしと説いた。時に年四十三歳、之から入寂まで三十八年間教化に努めて遂に一大宗教となつたが此の高僧に對して歴代崇敬を賜はる事特に厚く今は圓光大師外六つの大師號を追諡されて居る。そして弟子の親鸞は又一向宗即ち淨土眞宗を創めた。榮西は吉備郡眞金村の人で幼い時日近村安養寺で僧となり十四歳で叡山の戒壇に上り研究を重ねて居たが第七十九代六條天皇の仁安三年商船に乗つて宋に渡り天台山上つて研究を遂げて歸朝したが、後間もなく再び支那へ渡り印度に入らうとして果さず第八十二代後鳥羽天皇の建久二年歸國して始めて臨濟宗を傳へた。歿くなつた時は年七十五、諡して千光國師といふのである。(弟子道元又入宋して同じく曹洞宗を傳へた) 榮西は支那から歸る時茶を齎した人で日本の茶祖といはれて居る。弟に良祐といふ高僧があつたが此人は一切經書寫に専念した榮西の興禪護國の論は大いに吉備の郷土に影響して山上佛教天台宗の名残りである井山の如きですら寶福

護國禪寺と化した位であつた。

○僧源空は久米郡稻岡村の人で父は漆間時國、母は秦氏で長承二年四月七日に生れた。幼名は勢至丸といひ第七十六代近衛天皇の久安五年年十五歳で叙父觀覺に從ふて菩提寺に教を受け後、比叡山に登つて西塔持實坊源光に、天台の教觀を學び更に功德院皇國阿闍梨に師事し次に黒谷に至り慧眼房觀空を訪ひ眞言の教を受け法然房源空の號を興へられた。爾來修行日に進み八宗の教義に通じ碩徳次第に顯はれた。第八十代高倉天皇の安元元年四十三歳の時、惠心僧都の住生要集を見て大に感じ所習を棄て、専ら淨土專念の教を唱へたので僧侶皆之に靡いた。高倉天皇は詔して大内に迎へ戒を説かしめ給ひ、後白河・後鳥羽・土御門の諸帝亦崇信淺からず關白藤原兼實も教法を聽いた。かく上下の尊信厚きを以て南都北嶺の嫉視を買ひ遂に讃岐に流された。居ること五年、建暦元年赦されて京都に歸つたが翌年正月大谷寺で入寂した、年八十歳であつた。門弟頗る多く、中にも一向宗を始めた親鸞(見眞大師)東大寺再興に當つた俊乗坊重源などは最も名高く、一の谷戰の勇士熊谷直實の蓮生もあつた。今朝廷から賜はつた大師號を記して法然上人源空の高徳を偲ぶ。後鳥羽天皇より慧光菩薩。四條天皇より華頂尊者。後嵯峨天皇より通明國師。後柏原天皇より光照大士。東山天皇の圓光大師。中御門天皇の東漸大師。桃園天皇の惠成大師。光格天皇の弘覺大師。孝明天皇の慈教大師。大正天皇の明照大師。等の號を頂いて居る。今京都東山の龍華頂山智恩院に廟がある。

○榮西は吉備郡眞金村の人で、號は明庵、諡は千光國師、姓は加陽氏である。永治元年四月二十日の生れで曾祖父は薩摩守貞政といひ世々吉備津の社人である。榮西は幼名を竹千代丸といひ八歳の時父貞遠と共に俱舎の頌を讀み聽敏常に群兒と異る所があつた。十一歳の時安養寺の靜心に師事し十四歳の時叡山の戒壇に上り十八歳で虚空藏求聞持の法を受け益々精進を重ね翌年叡山の右辯に從ふて台教を學び仁安三年商船に乗つて入宋し會々重源と遇ひ相携へて天台山の上つて修業し經卷を齋して一度歸朝し又大志を抱いて支那に渡り印度に進もうとしたが達せず遂に萬年寺に至り虛庵禪師に就て親しく臨濟の正宗を受けて後鳥羽天皇の建久二年歸朝し頼りに佛心宗を唱へたが衆僧之を疑ふた。然るに榮西、興禪護國論を著はすに及んで論者を風靡した。翌三年九州に至り建久報恩寺を建て北九州の地に臨濟禪を弘めた。建久六年齋した天台寺の菩提樹を東大寺に栽ゑ建仁二年源頼家より建仁寺を賜はり翌年朝廷に台密禪の三宗を置かれ、ついで勅して紫衣を賜はつた。建保元年僧正となり翌年相模の龜谷にあつて鎌倉壽福寺を創建した。建保三年七月五日此寺に寂した、年七十五。嗣法長樂寺榮朝等十人あり榮西著書亦多し。

(吉備劔工)

鎌倉時代特記するに足るものは劔の名工が現れた事である。之は一面時代の要求の然らしめる所ではあるが他面此吉備の地が眞金ふくの稱もあり素盞鳴尊斬蛇龜正の名劔以來劔に因縁淺からぬ爲である。

(頼仁親王)

(兒島高德)

備前の正恒及則宗は邑久郡福岡一文字鍛冶の祖であり、同流に赤磐郡吉岡一文字又邑久郡に長船鍛冶がある備中では都窪郡菅生子位庄の刀工安次を祖とする青江の刀劔が名高く殊に後鳥羽天皇常に討幕の御企があつて遂に承久の亂を惹き起された位であるが特に刀劔製作に深く興味を持たせられて院中に月番の名匠十二人を召して劔を鍛へさせられた。之を御番鍛冶といふのである。そして此光榮ある名工として出仕したのが備前七人(則宗・延房等)備中三人(貞次・恒次等)及京都粟田口國安等二人、其多くは吉備の人である。後に長船長光が現れ、稍々後れて都に粟田口吉光、鎌倉に岡崎正宗が出て何れも當代の巨匠として謳はれたものである。後鳥羽上皇承久の亂に御失敗あらせられると上皇の第四皇子冷泉宮頼仁親王は備前に流され給ふて兒島郡郷内村に謫居され此地に薨せられたが裔孫は今に傳つて居る。下つて北條高時が朝命を奉ぜず元弘の亂を起すに及んで此宮の後といはれる兒島高德が邑久郡から勤王の軍を起し後醍醐天皇の隱岐遷幸を舟坂山に待受けして車駕を奪ひ奉らうとしたが志を得ず御通路變更、播磨の今宿から杉坂を経て院庄に御着になつた事聞いて後を慕ひまらせて闇夜に紛れて行在所の庭に忍び入つて櫻を削り、「天莫空勾踐、時非無范蠡」の十字の詩を記し叡慮を慰め奉つたといふことは人のよく知る所である。高德は後に名和長年が天皇を船上に奉じて義兵を擧げた時、備作勤王軍を起して一早く之に應じた。當時官軍方として王事に盡した人々に備前から、和田・兒島・射越・藤井・中西・今木・大富・石生・和氣の諸氏。備中から新見・成合・那須・三村・小坂・河村・莊・眞壁の諸氏。美作からは菅家一族の勝田郡河内山城主有元佐弘をはじめ其の一門七家といふ風に我が郷土から勤王諸軍を出したが、やがて之等の士の活躍空しからず、世は建武中興への大業成就となつた。然るに足利尊氏幕府創業の野心の爲め叛旗を翻すに及んで再び天下は闇雲に被はれ諸國の武士も多くは尊氏方に歸した中に高德は父範長と共に和氣郡熊山に義兵を擧げ新田氏を援け舟坂山の賊軍を討破つたが間もなく延元々年五月福山戰後二日で父範長は戦死し高德は重傷を蒙つたが之から備作の官軍は振はなくなつた。今院庄に作樂神社があつて後醍醐天皇と併

(有元佐弘)

(大井田氏經)

せて高德を齎き祀つてある。初め尊氏建武二年十月鎌倉に叛し十二月箱根竹下の戦に官軍新田勢を破つて入京し翌延元々々年正月京都に敗れ二月兵庫へ出て續いて西九州へ走つた。三月多々良濱の戦で菊地氏を破るに聞くや九州の豪族皆之に靡いた。依つて四月東上の途に就き備後の輜に着いて軍議を定め尊氏は矢張り海路より東上を續け直義は陸軍を指揮して並び進んだ。此時遺憾ながら中國の諸將も多くは風を望んで尊氏方に應じた。中に新田義貞の武將大江田式部大輔氏經(越後中魚郡大井田郷の人)獨り進んで備中福山城に立籠り雲霞を押し寄する直義方二十万騎を向ふに廻し死を決して之に當つた。氏經の方は漸く一千五百騎、五月十六七八の三日間の戦に部下五百騎を守兵に留め自ら手勢一千を率ゐて北方山下に敵兵數万騎を追落し更に東方山下に直義を追撃して其二万餘を殲滅したが然し衆寡の勢敵し難く、會々城中火を失して守兵五百も皆戦死し一山十二坊の山上伽藍も烏有に歸した譯である。氏經は殘兵を纏めて足利方の急進撃を遮つて巧妙な反撃を二十六度も加へつつ東へ歸つたが殘存僅かに百餘騎といはれて居る。之ぞ足利氏東上の第一戦で正成戦死で名高い兵庫湊川戦の前戦である。

○兒島高德本姓は三宅氏で備後三郎と稱し頼仁親王の後ともいはれて居る(頼仁親王は承久元年七月二十五日備前に流され守護佐々木信實の監護する所となり兒島郡那内村福岡に居らせ給ひ此處で薨せられた其裔は上着して尊龍院を相續して宮家氏を稱して今に傳はる)高德は範長の子で元弘の際勤王の兵を擧げ後醍醐天皇隠岐に向はせられた時御後を慕ひて院庄に十字の詩を記して親慮を慰め奉り、其船上山御還幸の時父と共に一族を率ゐて馳せ加はり源忠顯に屬して六波羅を攻めた延元元年新田義貞が三石城を攻めた時、高德義兵を熊山城に揚げて之に應じ相共に之を攻め播磨の間に活動したが父範長は赤松則村と戦つて戦死し自らも一時重傷を負ふた、三年義貞の北國經營に越前に從軍し義貞陣歿の後後義助と共に伊豫に行き後兒島に歸り更に脇屋義治を奉じて京都に入り軍破れて義治と共に信濃に走つた正平七年後村上天皇は男山に出陣せられ京都恢復を企てられ給ふた、其時高德詔を奉じて東國に赴いて新田義宗・宇都宮公綱等を誘ふたが男山が陥つたので果さなかつた後剃髮して志純と號したが終る所は詳でない。

○有元佐弘は菅原道真十世の孫頼頼の後で菅四郎と稱して勝田郡河内山城に居つて美作菅家・有元・源戸・福光・植月原田・鷹取・江見諸氏の宗家である。元弘三年天皇隠岐還幸あらせられたと大山の祠に詣つて承はり急ぎ歸つて同族

吉野朝及  
室町時代

(安國寺)

(大覺大僧正)

(圓應大師)

三百餘人を率ゐて船上山に向ひ行在所守護に任じた。やがて官軍六波羅を攻むるや佐弘命を奉じて京都に至り則村の配下となつて其先鋒を承はつて奮戦し四條猪熊に於て賊將武田兵庫助氏顯の千餘騎に當り二弟佐光佐吉と馬首を並べて突進し、一族植月彦五郎・鷹取彦二郎・福光彦二郎・原田彦三郎等二十餘人と共に皆戦死した。

第九十六代後醍醐天皇は足利尊氏の横暴によつて難を吉野に避け給ふたので世は吉野朝廷時代となつた。やがて天皇は延元四年八月行宮に崩御あらせられ次の帝村上天皇の御代となつた。尊氏は此間に擅に光明院を擁立して天皇と稱し奉つたが何だか心ならず殊に後醍醐天皇の喪なられたことは一層悲哀を感じたものらしく嘗て蒙つた恩遇をも思はで唯征夷大將軍ならうとする自らの野望の爲に抗敵し奉つた過去に恐懼し哀悼に堪へず盛んに法會を營み更に御菩提を弔ひ奉る爲に、夢想國師の議によつて嵯峨に天龍寺を造營して只管御冥福を御祈り申した。惡逆無道の尊氏にも猶日本民族としての血が通ふて居たといふべきである。猶足利直義は僧妙超の勧めによつて光嚴上皇に請ふて曆應元年(延元三年)佛舍利を頒ち六十六ヶ國に安國利生塔を建てさせたが之が所謂安國寺であつて國土靜穩を祈つたものである。備前に上道郡古都村、美作に院庄、備中に高梁といふ様に在つたが今は備中だけ残つて頼久寺といふ永正の頃上野頼久の再興によるからである。兎に角之が尊氏兄弟の心である。鎌倉時代法然の念佛宗と共に新興の佛教に法華宗があつたが開祖日蓮の弟子に鎌倉妙本寺の日朗があり日朗の弟子に日像がある。日像は勅命によつて京都に妙顯寺を建立したが此人が吉備の地に法華宗弘通の端を開いたものさ見えて岡山蓮昌寺に日像の書いた大曼荼羅がある。此日像の弟子が妙實であつて妙顯寺第二世で、世にいふ大覺様の事である。後醍醐天皇から大覺の二字を書いて賜はり大僧正に擢んでられた。吉備の地に日蓮宗を來り弘めた當時御津郡金川に居を構へた松田左近將監等が忽ち眞言宗を棄て、歸依したといふのである。今伊島村津島に大覺屋敷といふのがあり、御津郡辛川、都窪郡輕部なきに大僧正の筆になる南無妙法蓮華經のお題目石を残して居る。又村上天皇の頃眞庭郡から出た僧寂室は壯年の頃支那の元に渡つて禪理を究め歸朝の後處々を遍歴して晩年近江國に永源寺を開いて此處に寂した高僧で、應安二年光明院から諡を圓應大師と賜はつた人であ

る。次に室町中紀の繪畫の巨匠は都窪郡三須村赤濱から出た小田雪舟である。雪舟は實に郷土の産んだ誇りすべき畫聖である。幼い時に井山寶福寺に入つて僧となつたが天性畫を好んで經卷を讀まないで師の僧が之を叱責してお堂の柱に縛り附けた。然るに雪舟は落つる涙で足の拇指を動かして鼠を描いた。後、師僧は繩を解かうとしたが其時膝下の鼠が眞に迫るものがあつたので之より繪の積古を咎めなかつたといふことは人口に膾炙する所である。雪舟は屢々豪傑の寫生なきて大いに技を磨いた、其雅號の備溪齋は之から取つたものである。後に京都に上つて相國寺の洪徳禪師の弟子となり、鎌倉建長寺の玉隠永瑛にも従ふて修業し傍ら周文如拙の畫を模倣して居たが第百二代後花園天皇の寛正年中明に渡り四明山に上つて天童禪寺第一座となり、明帝の命によつて禮部院の壁畫を描いた。在明中繪畫の方も師と仰ぐに足るものがなくて専ら寫生をして歸朝した位である。其後周防國山口の雲谷寺に住したが嘗て大内義興が明廷に畫を求めて雪舟に示した、然るに雪舟は自らの筆を答へたので義興は怒つて雪舟を逐ふた、後誤つて繪絹を汚したので洗つたが雪舟の署名が隠かに見はれたので義興は愧ぢて雪舟を召し還した、其繪の支那に於てすら重んぜられること此の如し實に古今獨歩の大畫家である。

○寂室名は元光、俗性は藤原氏、眞庭郡の人で正應三年五月生れた。幼にして京都に入り東福寺の無爲元禪師に従ふて修業し十五歳の時剃髮して佛門に入り諸國を遊歴して觀行を積み近江の約翁和尚に教を受け名を元光と改め加賀の慧雲律師に學び更に鎌倉の東明・一山・東里等の三大老に參謁し後醍醐天皇の元應二年三十一の時、元の天目山中峯和尚の學徳を慕ふて可翁・鈍庵等と海に航して支那に渡り修業して歸朝した。之から備後の永福寺を創めて其處に居り後各地に遷り近江の佐々木氏頼に請ぜられて同國に永源寺を創建して之に住した。寂室學徳高く各方面より迎へられるも動かす貞治六年九月年七十一才にして遷化した。溢を圓應禪師といふ。

○雪舟は俗姓は小田氏、備後赤濱、米元山主、漁樵齋、雲谷軒等の號がある。都窪郡赤濱の生れで年十二三の頃井山寶福寺に入つて僧となつた。性繪を好んで禪法に勤めず爲に師僧の叱責を受けた後京都の相國寺洪徳、鎌倉建長寺の玉隠永瑛に従ふて修業した。常に如拙周文の繪を模して彩筆を磨いて居たが後支那に入り四明山に上つて天童禪寺第一座となり又能畫を求めて師としようとしたが更に無く専ら山水を跋渉して風景を寫した。明主雪舟の技に感じ禮部院に

戰國時代

壁畫を描かした。在明五年歸朝の後、山口の雲谷寺に住し更に石見の大喜庵に居つたが第百四代後柏原天皇の永正三年二月石見國に歿した年八十七。雪舟の創めた畫風を雲谷派といふ、門人多く傑出したのは秋月・雪村等である。應仁の亂後所謂天下麻の如くに亂れて足利氏の威令は行はれず約百年間は群雄が各地に割據して弱肉強食戰國爭亂の世となつた。此時代の備作の形勢は備前に赤松・山名・浦上・松田・宇喜多の諸氏、備中に細川・大内・尼子・莊・三村及び毛利の勢力、作州に赤松・山名・浦上・後藤の諸氏といふ風に何れも陣を構へて下剋上其儘に互に爭奪を事としたが恰も群がる子供が闇の中に喧嘩をする様なものであつた。抑々應仁の亂は唯單に京都に於ける争でなく漸次其争亂が地方に及んだものであつて備作の地に於ても山名、細川兩系統の戰亂が展開された。元々亂因の主要なるものに嘉吉の亂に衰頹した赤松家再興の問題があつたので其赤松氏が此播備の天地に勢力を張つたのであるから吉備の地では大内赤松氏を通して細川方が優勢であつたといひ得る譯である。其後備前は赤松氏の臣浦上氏之に代り更に其臣宇喜多氏の手で勢力が移つて行つたが遂に備中の勢力を纏めて權力の有つた三村氏をも毛利氏と聯合して攻略し更に山名・赤松乃至尼子諸氏の争奪地であつた美作も大半自分の勢力範圍に入れて愈々宇喜多氏の勢力は安藝の毛利氏と相對する様になつた。後宇喜多氏の背後に織田氏の勢力が伸び來つたが遂に信長が天下統一未完成の儘斃れた後を受けて豊臣秀吉が海内平定の業を成就するに至つて中國地方も其配下に屬して安穩になつた譯である。

赤松氏

福岡戰

○戰亂時代——播磨の赤松氏の臣に和氣郡三石から起つた浦上氏がある。實は浦上則宗が赤松政則を輔けて赤松家再興に當つたものであつて其政則が細川勝元の命を受けて播備の經營に任じ山名氏の勢力に當つたといふ譯である。政則は後に京都守護職をも兼ねて勢甚だ盛んであつたが嗣義村及義村の子晴政と家來の則宗の子村宗と不仲になり遂に村宗の子政宗并に宗景に至つて晴政の子政村等を攻めて白旗城を陥れたので赤松氏は滅んだ。之から浦上氏が赤松氏に替り宗景は和氣郡天神山城に移つて勢愈々盛んになつた。之より先、赤松氏の部將で西備前を管領して居た御津郡金川臥龍山城の松田元成は備中勢及備後山名系を背景に叛いて政則の將、浦上則國の守つて居る邑久郡福岡城を攻めた、則國は止むなく退城したが之から赤松氏は統一を缺ぐ様になつた、即ち前に記した浦上宗景が獨り勢を得るに至

(宇喜多氏)  
(後藤氏)  
(三浦氏)

つた。宇喜多氏は兒島高徳の後で宇喜多和泉守直家は浦上宗景に属して邑久郡乙子城及砥石城から崛起して中山備中守信正の據つて居る上道郡沼城を奪つて之に移り勢益々盛んとなつた。美作は大體に於て菅家一統と聯絡を取つて手を伸して居た赤松氏の勢が衰へて愈尼子氏の勢力の下に轉じ其代官副久盛が英田郡倉敷城(林野)に駐在して積々統一の状態であつた。然るに尼子氏が毛利氏に壓迫されて勢を失ふ頃になると土豪が互に相攻伐して爭奪戦が演ぜられたが其中に膽拳の強いものは勝田郡三星城の後藤氏と眞庭郡高田城(勝山)の三浦氏とであつた。又金川の松田氏は一時勢盛んであつたが僅て聯盟の尼子氏が衰へた爲め昔日の勢がなくなつた。茲に於て直家が斡旋して元赤松氏の配下で作州の勢力である三星城主後藤攝津守勝元と共に松田元勝を自分の主家の浦上宗景に從はせた。かくて備作の地は全く浦上氏に歸し内實は宇喜多氏が左右するに至つた。後に直家は金川を奪つて松田氏を併し(永祿十一年)天神山を襲ふて主家を亡ぼした(天正五年)直家の勢が此の如く漸次強大になるにつれて、西は備中三村勢と戦ひ、北は播美に出雲尼子(宇多源氏)治部大輔高秀の三男高久が近江國犬上郡尼子に住んで姓を改めた子持久出雲守護となり孫清久の時驥谷氏に一時國を奪はれた、文明十八年清久の子經久舊臣と共に富田城を復し大いに周防の大内に當つた。經久の曾孫義久に至つて永祿九年毛利氏に攻められて安藝の長田に移された、永祿十二年其支族勝久は隱岐に兵を擧げて出雲に入り上居城に居つた、次で織田氏と結んで播磨の上月城を守つたが天正六年毛利氏に圍まれて尼子氏亡んだ)勢を削り、遂かに安藝の毛利氏(大江匡房の曾孫廣元から出たもので戰國の頃に元就があつて初め尼子氏に屬し後大内氏に從ひ大内義隆の仇、陶治賢を駿島に破つてから驍名を謳はれ、ついで其遺領を受けた。代々吉田城に住んで居たが元就は次子元春を吉川氏に、三子隆景を小早川氏に養子に遣つた、何れも名族で之を兩川といつた)と結んで盛名三備を壓する感があつた。初め大内氏及尼子氏は中國の雄であつたが毛利氏が尼子氏を去つて大内氏に屬してから形勢は變つて來たものである。毛利・尼子の兩氏は之から連年備後を争ひ殊に尼子氏の勢力は備中に及んで居た。茲に備中成羽の城主に三村宗親といふものがあつたが三村氏は後柏原天皇の永正年中信州狭江から移つて來たもので文明・明應の頃、大内氏の配下となつて近隣を蠶食して其名が漸く著れた。其子紀伊守家親は頗る勇略の氣に富んで居て莊及穂井田等と争を續けて居たが偶々毛利氏の強大なるを怖れて特使を發して款を納れ應援によつて穂井田を攻略すれば細川・石川・伊勢の一族共は忽ち降り備中一圓御配下となるべしと通じて元就の許容を得、其力を借つて一方に尼子の勢力を驅逐し、一方に小田郡猿掛城に莊實近(莊氏は鎌倉の家人であつて莊太郎家長は武州七黨の一、兒玉黨の旗頭である、一谷戦に功あつて陸奥室地莊を賜はり平家滅亡後備中を宛行はれた、子孫爲實に至つて上

(猿掛戦)

(三村氏)

(毛利氏)

(尼子氏)

(明善寺戦)

野頼久に代つて松山城に居り實近は其弟で高資は爲資の子である。然し猿掛城に居るものは毎に地名を取つて姓を穂井田といふ)を攻めたが功なく、兩度の戦に和睦が成り立ち家親の子元祐を實近が養子として二家は一となつた。かくて備中尼子方は次第に毛利氏に轉じ唯松山城の莊高資のみ尼子氏加番の部將吉田左京と共に立籠つて孤立の姿であつたが永祿二年三月家親に攻め亡ぼされて備中全土毛利氏に附隨して其旗頭が三村氏といふ事になつた。之で備前方の宇喜多氏、備中勢の三村軍との衝突は避けられぬ形勢となつた。永祿六年家親は機先を制して岡山に進み城主金光興次郎宗高を降し餘威を以て作州に進み三星城に迫つた。直家は時に從士馬場次郎四郎を遣はして後藤氏を援けさせた。永祿九年春再び家親は作州に攻入り久米郡興禪寺に陣したが直家の刺客遠藤又次郎の爲に銃殺されて三村勢は備中に引揚げた。松山城主三村元親父の仇を復せんものと永祿十年直家が三村勢に備へる爲に築いた上道郡明善寺城を奪つて配下の根矢興七郎及藥師寺彌五郎等に命じて守らせた。そこで所謂備前備中の大合戦が始まつた。直家は兵五千を指揮して沼城を發し元親軍二方の兵に當つた。先づ明善寺城を奪ひ返し三村勢莊元祐(元親の兄猿掛城主)を操山附近に破つて戦死せしめ石川久智(元親の妹舅、幸山城主)を原尾島附近に討死させたので備中勢は前、中軍共に潰れた。本軍元親は中島大炊介を先導として直家の本據沼城を衝かうしたが成らず三村方恨を呑んで敗退した。此役戦死一万八千といはれ如何に激戦であつたかが想像出来る。直家名臣多く戸川秀安父子(庭瀬・撫川・早島等の戸川氏祖)岡利勝父子、長船越中(虎倉の城主なり子紀伊守は倭人)花房職之(後に備中高松城主)延原土佐(鍛冶山城主)馬場職家等あり何れも百戦の功ある人々即ち宇喜多氏の強大を見た所以である。直家永祿十二年穂井田元清(元就の子猿掛城主)と戦ひ元龜元年金光氏を亡して岡山城を取り(直家天正元年岡山城に移る。今の城は同年直家が岡平内を奉行として築いたものであり、天主閣は秀家が安土城を模して造つたもので慶長二年の竣工である)更に勢力が四國に迄及んだ。之より先毛利氏は既に尼子氏を逐ひ其威力が山陽・山陰に振ひ、餘力を九州に伸して居た。永祿十一年立花氏を援けて大友氏に當り備中の侍大將等九州に出征した。其留守中尼子勢が押寄せた。即ち經久の孫晴久(義久の父)の部下尼子吏部・同判部・大賀駿河守等六千騎計り備中に向ひ庄高資(松山城主)植木下總守(上房郡齋田城主)などを降し細川下野守(淺口郡杉山城主)高橋玄蕃(都窪郡酒津城主)等を破つて都窪郡幸山城に迫つた城主石川源左衛門久式(三村元親妹婿)は九州へ發向し留守城代彌屋七郎兵衛・友野石見守・日幡六郎兵衛・生石中務・上山兵庫・坪加助右衛門等農民共を加へて輕部淺原峠から攻め上る尼子勢を引受けて福山古城を背景に三日二夜

(幸山城)

戦つたが後和解成り幸山城は尼子方へ味方すべき内約が出来た。續いて尼子勢は經山城主へ隨身を勸誘に及んだが中島大炊介元行は内心頑として之に應じないが何しろ敵は降將を加へて其勢約一万といふ數であるから二百騎ばかりの小勢では所詮防ぎ難い。よつて表面幕下に加はる如く装ふて降參の由を大賀駿河守に届けた、尼子勢は漸く軍勢を引退けた。城内に於ては時日を遷延させて九州へ飛脚を立て小早川隆景に救援を訴へると共に戦備を整へ窟蛇穴毘沙門堂の地續の寺屋敷に頼宮次郎左衛門・中島與兵衛等、鬼城構に阿部左衛門次郎・中島彌兵衛等を配り、經山の林間に紙旗を押立て中島右京・荒木新兵衛等楯籠り、妙現山續きへ中島刑部・荻野新藏等を配し、小寺村要害の所へ水堀を作り所々に落穴を設けなごして種々防備を施して國中の一味に密使を馳せて後詰催促に及んだ。茲に於て尼子勢は再び押寄せたが大炊介謀を以て寄手を憐ました。然る所へ清水備後守、總社宮より尼子勢の後から突いて掛れば雲州勢は三輪・輕部及び尖栗の方へ引退つた。城内では中島加賀守後室の如き自ら長刀を取つて二十餘名の女軍を召連れて戦に加はり籠城堅固意氣盛んである。其中に大炊介は總社明神のあたりまで夜討をしかけ更に輕部の陣屋へも火を附け散々に敵を苦しめ元行勇み進んで下知すれば尼子勢大いに萎み、中には鍋坂から瀧井川へ雪崩れ落ちて死ぬるものもあり出雲勢遂に上房郡齋田の城へ引上げた。折柄藝州勢も押寄せ穴戸備前守等猿掛まで着陣に及んで輝元よりは大炊介に感狀を賜はり庄・植木の知行は其儘扶持せしめた。元龜二年元就が卒し嫡孫輝元が嗣いだ。吉川元春は山中鹿之助幸盛が其主勝久を奉じて尼子氏恢復を圖つたのを出雲に破つた。幸盛等一旦京師に走り織田信長の援けを得て播磨上月城に據つたが天正五年の事である。然るに翌年毛利氏に圍まれて勝久は自殺し幸盛は後圖を策して輝元に降り安藝に赴く途中毛利の臣天野五郎右衛門の爲に備中目羽を過ぎて阿部の渡にかつた時不意に殺された。今川上郡落合村に幸盛の墓がある。足利十三代將軍義昭の軍職に就き得られたのは全く織田信長の力である。そのに信長の勢威を思ひて義昭は武田・上杉・淺井・朝倉と結び西毛利氏を通じて宇治の横島に據つて信長を除かうと計つて失敗し遂に天正元年河内に移されて官爵を奪はれた。そこで毛利氏を頼つて備後の鞆に行つて恢復を圖つた。此時義昭の命によつて輝元・直家は一時和睦した。然るに三村修理亮元親は直家を討つて父兄の仇を報じようと思つて三好氏及尼子氏と結び毛利氏に對して援を乞ふたが要領を得ず、偶々信長の密使に接し備中・備後を與へる由を聞き、之によつて宇喜多氏に當らうと決心し毛利氏と絶つた。一族成羽の三村親成之に反對して用ひられず走つて毛利氏に告げた。天正二年十一月足利義昭の下知により毛利勢は笠岡に集り進んで川上郡國吉城(三村政親)猿掛城(三村兵部)上房

(山中鹿之助)

(足利義昭)

(三村氏七郎)

郡齊田城(三村左京)成羽鶴首城(三村左馬允)を陥れ天正三年正月小早川隆景成羽を本營として新見扛城(三村元範)吉備郡山田鬼身城(上田實親)元親の弟)同秦荒平城(河西之秀)同美袋大渡城(三村忠秀)都窪郡幸山城(石川久式)元親妹婿)等を陥れて毛利・宇喜多の二氏相携へて松山城總攻撃に移つた。三村軍は支城の守將多くは松山城(臥牛山城)に籠つて防ぎ戦つたが支へる事叶はず五月城遂に陥り後元親は松蓮寺に自殺し石川久式は遁れ出た。六月隆景は兒島の瑜珈山に陣して常山城(上野隆徳)元親妹婿)を攻めて陥れた。(翌年此城へ直家の臣戸川肥後守秀安が入城した)かくて備中の守護三村氏に亡び、愈々宇喜多・毛利二氏は境を接する様になつた。織田信長は石山本願寺(信長が大坂石山を攻めた時、毛利勢は海路糧食を送つて本願寺方を援けた)及び足利義昭後援の關係から自然中國の雄毛利氏を敵とする様になつた。正親町天皇の天正五年羽柴秀吉は其命を受けて中國征伐に進發したが先づ姫路城を根據地として但馬の諸城を降し轉じて播磨上月城を圍んだ。城は宇喜多直家の屬城であつて上月景利が守つて居た。然るに直家の援軍は秀吉に破られ城兵は景利を斬つて降つたので秀吉は毛利氏に逐はれた尼子勝久を此城に置いたが又直家に奪回された。かくて争奪再三に及んだが天正六年秀吉は勝久を上月に居らせ播磨の三木城を攻めたが直家は之に乗じて上月城を取戻さんものと毛利氏に援を乞ふた。即ち輝元五万直家一万五千(直家病と稱して自らは進まず)上月城に迫つた。秀吉は之を救ふべく三木城へは別將を當らせ親ら四方の兵を率ゐ、信長の援軍八方は信雄等指揮して上月城へ進んだが間に合はず勝久は自及し、幸盛は降つて殺された。此頃から直家漸く兩端を持し翌七年遂に織田氏と和して毛利勢と作州に戦ひ又隆景の軍を御津郡幸川に逸へ撃つて勝を得た。戸川達安十三歳初陣の功は此時である。秀吉は天正八年三木城を陥れて山陰に出て吉川經家を鳥取城に攻落し更に淡路をも征して天正十年備中に向つた。即ち三月兵二万を率ゐて姫路を發し四月岡山に宇喜多氏(直家此年正月卒し八郎秀家嗣いだ年八歳)の兵一万を合して進んで高松城に迫つた。有名な高松城水攻は之から始まつた。城將清水長左衛門宗治は總社町清水の人で幸山城配下に屬して居た。妻の父吉備郡高松城主石川左衛門佐久孝が死んだ後を受けて高松城に入つて其主となつた。時に毛利氏が中國に指揮し宗治も亦隆景の部下として或は松山役に或は上月役に従ふて勳功があり寵遇を蒙つて居た。今秀吉の勢迫るに及んで宗治死守を決意した。時に秀吉の部將蜂須賀政勝・黒田孝高來つて宗治に備中を與へん退かに降れとの勸告を以てしたが宗治は辭して斷然之を却けた。城は西軍防備の宮地(乃美元信)冠(林重眞)加茂(桂廣重)日幡(日幡景親)松島(梨羽中務丞)庭瀬(井上有景)高松の七聯城の中心をなし、東に鼓・石

秀臣の(中國經營)

(上月城)

(高松城)

井の連山、北に龍王山、西に八幡山と殆んど三方山を繞らし平地を抜くこと十二尺、圍むに大沼を以てし僅かに細道によつて之に通じ人馬を進める術もない始末、加ふるに城兵死守の五千人（宗治の兵三千、毛利の援軍末近左衛門信賀の兵二千）甚だ攻め難い状態にあつた。秀吉は龍王山から俯瞰して作戦を定め、兵を分つて宮路山城・冠山城を陥れて高松城に押寄せたが（龍王山に秀吉陣し一万五千、平山に秀勝居り五千、八幡山に宇喜多忠家陣す一万）大きな割合に案外難攻不落の城である。即ち地理を察し孝高の策を容れて敵の長を逆を利用して水攻の計に決した。早速東、蛙ヶ鼻から原古才を経て西、門前に達する二十六町餘、高さ四間、基脚十二間、頂上六間の堤防を築いて（五月八日起工全十九日竣工）足守川の水を引いて之に灌いだ。時に恰も梅雨期に入り河水が増して刻々に浸水して堤内百八十八町歩は化して一大湖水となり城地は全く濁水に没した。五月二十一日毛利の援軍到着（頼元猿掛城に來り隆景は日差山に陣し元春は伯耆から來て岩崎山に陣取つた。兩將の兵合せて三万餘）したが救出の方法も無く使者、轉小四郎を封に城中に遣はして宗治に暫く東軍に降り再舉を計るべきを勧めたが宗治聞かず、寵命を奉ずる能はず唯死あるのみと答へた。毛利の三將焦れども詮なし。秀吉も亦豫て毛利の大軍が上ると聞いて信長の來援を求めたが、毛利方は之を聞いて和するに如かず安國寺惠瓊（安藝の人、京都南禪寺に居つて紫衣を賜り安藝の安國寺に住んで居た辯才もあり武事を嗜み頼元に愛せられた）を遣して備中・備後・美作・因幡・伯耆の五箇國を割き城内將士の助命を乞ふ旨を以てしたが秀吉は應ぜなかつた。此時偶々六月二日日本能寺に於て信長は臣明智光秀の爲に害せられて三日變報が秀吉の許に達した。秀吉大いに愕いたが深く之を秘し即ち惠瓊を招いて今日和を結べば五ヶ國割讓を減じ伯耆矢橋川・備中河邊川を以て境とし城兵の助命は宗治の首級を以て代うべしと告げた。惠瓊城中に至り之を宗治に傳へた。宗治は主家並に城兵の爲に死は豫て決する所と請ひ和直ちに成つた。四日宗治は兄月清入道と末近左衛門及難波傳兵衛等と舟中に最後の酒宴を催して起つて誓願寺の曲を舞ひ靜かに辭世の句「浮世なば今こそ渡れ武士の名を高松の苔に残して」と口吟んで蛙ヶ鼻の秀吉の陣營前に至つて自盡した。時に秀吉は堀尾吉晴をして之を檢視せしめ更に堤を決し城中の人を縦たしめた。城は秀吉方の杉原家次に守らせて即日宇喜多の兵を歸らせ秀吉自らは翌五日夜中から東歸した。四日日本能寺の變報毛利氏の耳にも入つたが元春・隆景は義を重んじて後を追はず秀吉は七日姫路に入り十一日尼ヶ崎に出て十三日には早、山崎天王山に光秀を破つた。機敏な大將である。此高松役後に於ける宇喜多氏の領域は河邊川以東となつて矢張り毛利氏と境を接した。宗治の室及び家臣等は川邊に退去したが後に子景治（幼名

（宇喜多秀家）

源三郎）が長じて信濃守と稱し隆景に仕へた。今城址に跡誌の碑及宗治の首塚、妙玄寺位牌堂中に高松院殿清鏡宗心大居士の法名。又蛙ヶ鼻に築堤の一部、其他遺跡が深山ある。秀吉天下統一統の後我が備作の地で其寵を一身に蒐めたものは秀家である。其偏諱の「秀」を賜はり征戰の度毎に功を立て山崎役・賤ヶ岳戦・小牧山役、さては征韓役の如く何れも從軍したが特に朝鮮征伐の時年十九歳で元帥に擧げられ全軍指揮に任じた。後、從三位中納言に昇り、家康・利家・輝元・景勝と共に豊家五大老の列に加はつた。然し盛なるもの必ず衰ふの譬の如く、慶長三年八月秀吉薨じ同五年關ヶ原戦が起り石田三成方に味方して、其謀主となつたが西軍大敗の爲め薩摩に遁れた。島津家久、秀家の爲に家康に助命を乞ひ同十一年四月死を減ざられて八丈島に流され明暦元年八十三歳で薨じた。初め秀家後臣である長船紀伊守綱直を信任して國政が正しく行れず家中漸く混亂の兆があつた。朝鮮役在陣の際家臣の岡越前守が重病に罹り秀家を諫めて紀伊守を除くことを直言したが秀家を之を用ひずして益々寵愛した。故を以て岡・戸川・宇喜多（左京亮）花房等遂に岡山を立退いた。後關ヶ原戦が起るに及んで此四人は何れも東軍に應じて夫々知行を與へられた。中にも花房志摩守職之の如きは備中高松七千石に封ぜられたが毎年舊主秀家へ白米二十俵宛を送つた。又秀家の臣に明石掃部介守重といふ人があつたが關ヶ原戦に其先鋒となつて奮戦したが偶々西軍不利の爲秀家は戦死を思ふたが守重は強ひて歸國再舉を勧めて其途に就いた。然るに留守中紀伊守専恣の行が多く且つ秀家敗北と聞いて城を落ちて遁れた。土寇は之に乗じて城内の資糧を奪ふた。秀家守重主從等歸るも詮なく秀家は九州に下り守重は暫く足守に潛み後原田幸村と謀り大阪方に屬し大いに東軍に當つた。秀家の後に岡山城主となつたものは朝鮮再度役の元帥となつた小早川秀秋であつた。秀秋は秀吉の妻（北政所、高台院夫人）の兄、杉原家定の第五子で足守木下藩祖利房の弟である。幼時北政所に養はれ後小早川隆景の養子となつた。文祿元年從三位權中納言に陞り金吾中納言と稱した。朝鮮役に、身は元帥でありながら深く敵陣に入り十三人を手づから斬つた。石田三成が其輕怒を讒したので秀吉は其功を賞せず慶長三年四月朝鮮から歸つて伏見に秀吉に謁したが輕舉を叱せられて越前へ轉封され様としたが家康が其間に立つて請ふて本領安堵を得た。同五年關ヶ原戦が起ると陽に石田氏に味方し戦半で東軍に應じた、西軍之が爲に潰亂大敗した、家康は戦後秀秋の功を思ふて備前・備中・美作七十二万石に封じた、然るに秀秋慶長七年十月二十三歳で病んで薨じ嗣なくして家が絶れた。墓は岡山市三番町瑞雲寺に在る。此外關ヶ原戦後岡山縣下に大名であつたものに庭瀬に戸川達安（二万九千石）淺尾に蒔田廣定（一万石）足守に木下家定（二万五千石）等があつて、西の毛利氏領

（小早川秀秋）



江戸時代

(岡山城)

豊臣秀吉の薨後、秀頼は幼弱で天下の大勢は自ら徳川家康の手に移つて行つた。慶長八年家康が征夷大將軍に任ぜられてから二百六十餘年間は三葉葵の紋所輝く江戸時代である。關ヶ原戦のあつた後、一國一城の令が出て備前では岡山、美作では津山、備中では松山といふ風に定められて其他の諸城は廢毀された。

(鶴山城)

○岡山城は第九十七代後村上天皇の正平年中山名氏の一族上神太郎兵衛高直が居城を築いたのに創まり、それから幾變遷して第百四代後柏原天皇の大永年中金光宗高・松田氏に屬して據守し後宇喜多氏之に代り大いに城廓を整へて小早川氏に及んだが秀秋薨するに及んで慶長八年池田輝政が播・備・淡・八十九万石を領して姫路の城に居り弟忠繼が備前に封ぜられた。然るに元和元年忠繼が卒して弟忠雄が淡路から入つて岡山に居つたが其子光仲が領地を鳥取に移されてから光政が代つて鳥取から來て備前一國及備中一部を併せて三十一万五千二百石に封ぜられたが實に寛永九年の事である。以下其子孫が繼承して光政から九世の孫茂政に至つて御一新に及んだ。鶴山城は室町の頃から山名氏が作州の守護に任じ其族山名忠政が築いたに始まる。戰國時代は尼子・毛利・宇喜多の諸氏の争奪に任せ、天正の頃に至つて愈々宇喜多氏のものとなり慶長五年小早川秀秋の有に歸したが同八年秀秋が薨じてから森忠政(森蘭丸の弟)が信濃川中島から十八万六千五百石の殿様として入部し舊壘を修築して經營十三年元和二年に竣工(明治三年廢城となり同六年公賣されたが代金千二百二十五圓であつた)したもので森氏相承くるこゝ四代元祿十年嗣がなくて國を除かれ翌年越前家から松平宣富(長矩)が封十萬石を以て入城して明治に及び九世慶倫の時が御一新の際であつた。

(松山城)

松山城は臥牛山上に在つて鎌倉の頃第八十七代四條天皇の仁治元年秋庭三郎重信が築城したので始で秋庭氏累世之に居たが第九十六代後醍醐天皇の元弘元年高橋氏が備中守護として來つて之に代り以下足利室町の頃高氏、秋庭氏、莊氏、三村氏が次々に此處に據り續いて宇喜多氏、小早川氏之を領し一時徳川氏の直轄となり小堀氏代官となり正次・政一父子が此處に治した。元和三年池田長幸(輝政の弟長吉の子)六万五千石として鳥取から來て領したが子長常に嗣がなく除封され寛永十六年水谷勝隆が封ぜられたが其孫に及んで又子がなくて除かれ元祿八年安藤重博(陸奥安倍氏の裔で前封は上州高崎であつた)が來り治めたが子重行が美濃に轉封されたので其後へ石川總慶(源義家の裔で前封は山城の淀城)が來たが後伊勢の龜山に移り第百十五代櫻町天皇の延享元年板倉勝澄が五万石に封ぜられて子孫相承けて明治維新に及んだ七代勝靜の時であつた(維新廢藩と共に廢城となり今は僅に櫓を殘して居るのみである)

(諸藩)

封建制度は武家政治時代に於ける重要な社會組織であつて殊に其地方的覇權を握つて居た大名達の施政如何は直接領民の幸不幸の岐れる所であつた。兵農全く其分を分つた當時の事であるから慨して治者壓制の弊が多かつたが中には名君賢臣があつて政治に心を留めた者もあつた。

○岡山藩池田氏は源頼光五世の孫、右馬允泰政の裔である、紀伊守恒利を以て中興の祖とする、子信輝亦紀伊守と稱し薙髮して勝入齋といふたが織田信秀に仕へて元龜中尾張國犬山一万石の城主となつた。嗣紀伊守之助、信長に仕へて天正六年荒木村重を討つて功があつたので攝津の有岡・尼崎・花隈の三城を領したが後豊臣氏に附いてから信輝は大垣城へ、之助は岐阜城に居つたが長久手の戦に共に戦死した。次子三左衛門輝政が秀吉に從ひ三河吉田城十五万石に移つた。關ヶ原戦に徳川氏に屬して播州姫路に三十六万八千石を授けられた。池田氏は由來徳川氏と縁戚深く爲に後更に備前及淡路を加封されて合計八十九万九千石となつた。慶長十八年長子利隆に播州五十二万石を、次子忠繼に備前三十一万五千石を、三子忠雄に淡路六万三千石を與へて退隱した。元和三年に至り利隆の嗣新太郎少將光政が封を因伯二州に轉じて鳥取城に居つた。寛永九年光政の從弟光仲の封岡山と換へ之から光政が岡山城に入つた。光政二子に封を分けて鴨方及生坂藩を建てた。

○鴨方藩は岡山の支藩で寛文十二年池田光政の第二子信濃守政言が樂田二万五千石を分食して鴨方に治し九代政詮に至つて明治となつた。

○生坂藩も亦岡山の支藩で池田光政の第三子丹後守輝祿が新田一万五千石を分與されたもので八代政禮に及んで明治維新となつた。

池田氏は大藩で國老に邑久郡史明に居た伊木氏三万石、兒島郡天城に居た池田氏三万石、赤磐郡周匠に居つた池田氏二万二千石、御津郡金川日置氏の一萬六千石、同建部池田氏の一萬石、赤磐郡佐伯土倉氏の一萬石等があつて何れも斷然大名の如く現今裔孫は華族に列し男爵を授けられて居る。

早世して除かれ富の甥長熙嗣立して五万石を賜はり養子長孝の子康哉、康哉の子康孝に至つて十萬石に復し裔慶倫に至つて御一新に及んだ。

○松山藩及庭瀨藩板倉氏は清和源氏の後、足利泰氏から出て、勝重を以て中興の祖とする。宗家は高梁の板倉氏で支庶六家中諸侯に列したものが三家ある。勝重・重宗父子は徳川氏の忠臣で共に京都所司代の重職に居つた、重宗五世の孫の勝澄が延享元年松山藩主となり七世勝静に至つて明治に及んだ。又重宗の次子重形の子孫は上野安中藩、重宗の弟重昌は鳥原の亂に戦死したが此重昌の支孫重高が元禄十二年庭瀨二万石に封ぜられ十一世勝弘に至つて明治に及んだ。又三河重原藩は重昌の孫重種の後である。

○足守藩木下氏は本姓平氏で後、杉原氏を稱し、秀吉の室高台院夫人の兄杉原家定が木下氏より羽柴氏に變つた秀吉の後を承けて木下氏を冒して姓とした。家定は關ヶ原役の時北政所を守つて兩端を持し長子勝俊(長嘯子)は西軍に屬して若狭九万石を削られた。次子利房が宮内少輔に任ぜられたが之が足守藩祖である。利房は初め若狭高濱に於て三万石に封ぜられたが大坂冬の陣に豊臣方となつて領地を失ひ、夏の陣には徳川氏を援けて元和元年足守二万五千石を授けられた。十一世利恭に至つて明治に及んだ。利房の弟延俊は豊後日出藩祖、次の弟は小早川秀秋である。

○勝山藩三浦氏は其遠祖は源平時代の武將、三浦大介義明である。志摩守正次を以て中興の祖とす。正次の父正重三河に住んで徳川氏に仕へ土井利勝の妹を娶つて正次を生んだ。正次慶長十二年慶米三百石を賜はつたが爾來累進して三千石小姓番頭となり寛永十年一万四千石を授けられて侯籍に列し若年寄となつた。此の正次五世の孫明次が明和元年眞島(勝山)二万三千石となり九世の孫顯次に至つて明治に及んだ。

○岡田藩伊東氏は丹後守長實に始まる。其先は藤原氏で伊東祐親から出たもので建久の孝子曾我兄弟も遠祖である。長實は秀吉及秀頼に仕へて慶長の大坂役には七番組頭となつて電光石火の驍勇を顯はれたものである。元和元年大坂が落城し長實は高野山に入つて自殺し様としたが本多正純によつて家康に許され關ヶ原の戦功を思ふて備中岡田外一万三百石を賜はつて入部し十世長壽に至つて明治維新に及んだ。家紋、庵木爪は曾我兄弟を偲げ、丸に折入れは大坂陣電光石火の勳を物語るものである。

○淺尾藩蒔田氏は藤原南家右大臣是公の後であつて木工助爲憲の孫遠江守維兼が後三年の役の軍功によつて奥州須賀川を賜はつたが其子孫民部少輔維昌に及んで同國蒔田に住んで因つて氏とした。後に子孫尾張に移り世々斯波氏に屬し

たが廣定に至つて更に豊臣氏に仕へて万石の列に加へられた。廣定は實に中興の祖であつて同時に淺尾藩祖である。

關ヶ原戦の時石田氏に従ひ封を除かれ後淺野幸長によつて徳川氏に罪を謝し遂に本領一万石を備中に賜はつて八田部村井手に來たが時は慶長十年である。後淺尾村に陣屋を構へた寛永十三年廣定は長子定正に七千石を與へ、次子長廣に三千石を授けて三須村に分居させた。依つて定正は之から旗本の列に入り交代寄合衆となつた。文久三年廣定十一世の廣孝に至つて御軍役精勵の功により一万石の封額を賜はり再び侯籍に列し叙爵して相模守に任じ廢藩に及んだ。

○成羽藩山崎氏は近江佐々木氏の流れて鎌倉時代初世の武將秀義の曾孫六郎靈家が同國山崎の地頭となつてから子孫山崎氏を稱するに至つた。永祿十二年志摩守行家に至つて宗家佐々木氏と隙を生じ織田氏に仕へ又豊臣氏に及んだ。子左馬允家盛が天正十一年攝津三田城二万石に封ぜられたが慶長・元和の頃は徳川氏に味方して元和三年家盛の子家治が成羽に封ぜられたが孫の治頼に至つて嗣がなく除かれ叔父家治に五千石を授けられた。萬治元年豊治交替旗本として成羽に治め明治元年治正に至つて侯籍に加へられ一万二千石を賜はつた。

○新見藩關氏は清和源氏の後といふ美濃の武儀郡關村に因むもので即ち山崎氏の子氏昌が關氏を稱した。氏昌八世の孫關十郎右衛門成重、北畠氏に仕へたが其宰士井織部に思まれて去つて織田信長に従ふた。子成政美濃の鷺山に至り又齋藤氏に頼つて隣接の諸氏を亡ぼして之を領したが同國金山の森可成の女を娶つて又織田氏に屬した。長久手の役に成政は池田信輝等と共に奮戦して死んだ。子成次は京に至つたが後徳川家康に駿府で謁見した。然るに森可成の孫忠政が津山城に移つたので成次を迎へて女を之に妻はした。成次は二人の子があつたが長子長繼は忠政に子がなかつたので其嗣となり、次子の長政は兄長繼から樂田一万八千石を分與されたが之が新見關氏の祖である。長政の子長治元禄十年新見に移り爾來九世長克に至つて御一新の時となつた。

○鶴田藩松平氏は徳川氏の支族である。右近將監清武を以て祖とする。清武は甲府宰相綱重の二男であつて六代將軍家宣の弟である。寛永四年上野館林城を賜はり享保十三年其孫右近將監武元奥州棚倉に轉じ後又館林に戻り、武元の孫齊厚に至つて石見濱田城六万石に移つたが子がなくて世々嗣を養ふた。子武揚、孫武成、曾孫武聰、皆養子である。武聰は水戸齊昭の子であるが慶應二年征長の役に毛利軍の逆撃に遇ふて濱田藩の防戦も叶はず遂に武聰は城を燒いて出雲萩に逃れたが同三年作州の鶴田に移つて城地を整へ様としたが未だ成らぬ中に御一新に及んだ。

(以上の大名の中で備前池田は國主、津山松平は准國主、備中板倉は城主、其他は領主である。又池田・木下の如き

(旗本)

ば外様であり、松平は親藩、板倉の如きは譜代の大名である。維新後、池田氏は侯爵其他は子爵、山崎氏だけが男爵を授かった。

○戸川氏は元伊豫の越智氏、河野通信の後胤稻葉通弘が四代富川正實が兒島に宇喜多能家に仕へて寵せられたが子定安孫秀安は共に直家に仕へて功があつた。秀安は常山城に居り天正十三年豊太閤によつて肥後守に叙任された。子達安繼いで秀家に仕へて主を諫めて用ひられずして放逐された。關ヶ原の戦に功を立て、備中庭瀬二万九千石に封ぜられたが曾孫安風に至つて嗣なくて所領を改められた。延寶七年の事である。庶流五家あり早島・帯江・妹尾・撫川・中庄等何れも旗本である。今常山の麓に秀安の墓、庭瀬不遷院に達安の墓がある。

○花房氏は清和源氏足利泰氏の八男義辨から出たもので其子職通が常陸久慈郡花房の地名を取つて氏とした。十二世の裔職之、宇喜多直家に仕へて功多く秀吉から秀家の家老たるべき特別の沙汰を拜した。後長船紀伊守の讒によつて秀家から死に處せられようとしたが豊太閤によつて常陸の佐竹義宣に預けられた。關ヶ原戦後備中高松八千二百二十石を授けられ旗本の列に加はつた。次男職直元和三年都窪郡加茂村津寺に千石を賜はり後二千石に、又職之の祖父職治の弟正定の孫正成は猿掛治行所を授かり小田・後月の中采地五千石を給せられた。又都窪郡新庄知行所は職之四世職豊が分家したものである。今高松町妙支寺に職之の墓がある。

○此外都窪郡庄村日吉に長谷川氏の知行所があつたが長谷川氏は藤原秀郷の裔左衛門尉宗重に至つて長谷川を稱して世々大和に住んで居たもので十五代の孫宗茂は足利義政に仕へ之から五世の孫守勝に至つて攝津及備中の地に三千石を賜はつたものである。小田郡里山田知行所は元、森氏であつたが後豊太閤の命によつて毛利氏に改めたもので毛利重次三百石の采地である。後月郡木ノ子知行所は相模土肥氏の後裔である高山盛聰千石の領所であり。同郡東江原知行所は慶長の頃松山城在番の小堀遠江守政一の弟正行三千石の采地であり。同郡井原知行所は元和の頃松山城主であつた池田備中守長幸の三男長信が慶長十九年賜はつた千石の采地であるが明暦の頃長信は又次男利重に三百石を分け與へた。次に川上郡富家村知行所は元禄年中松山城主となつた水谷勝隆の子勝宗が三男勝時に三千石を授けられて寄合に列せられたに創まり。阿智郡小坂部知行所は水谷勝隆の二男勝能二千石の治所である。

○將軍直轄地は一に天領と稱したが、之を支配する爲に置いた代官所に倉敷・笠岡・倉敷(今は林野)・久世等があつた。倉敷代官所は元松山城を一時幕府の直轄として小堀正次・政一等に在番せしめたに始まり寛永十九年倉敷に移し

(天領)

米倉平太夫を代官に任じたのが起源である。笠岡代官所は備後福山城主水野勝岑が早世して元禄十一年城地を收められ其半分即ち五万石を直轄地とし代官山本與惣左衛門をして笠岡に治せしめたに始まる。作州代官所は元禄十年森氏國除かれ其中五万石を直轄地として竹村總左衛門等に代官せしめた事に起り。久世代官所は津山松平富家嗣がなかつたが宗親の故を以て其族長照をして繼がせたが封土を減じ享保十二年窪島作左衛門をして直轄地を管領せしめたに始まるのである。

江戸時代を通じて良藩主として池田光政あり松平康哉あり板倉勝靜・木下會定・池田政香・伊東長詮等がある。名爲政者に戸川安清・池田長發・井戸平左衛門・早川八郎右衛門・岸本武太夫等あり。偉人傑士として森忠政・池田治政・松平齊民・小堀政一・水谷勝隆・木下利當・蒔田廣孝等の稍常人と異なる藩主もあり。熊澤蕃山・津田永忠・石川誠一・關藤藤蔭・熊田治・丸川松蔭・山田方谷等の賢臣もある。又文化の普及につれて室鳩巢・古川古松軒(地理學者)・西山拙齋・阪谷朗庵・藤井高尙(國學者)・緒方洪庵(蘭學者)・宇田川玄隨(蘭學者)・箕作阮甫(洋學者)・川上忠昂等の學者も出で又黒住宗忠・金光大陣・釋日生等の宗教家も現はれた。更に勤王の志士に藤本真金・牧野權六郎・安東鐵馬・津田馬之介なきの人もあつた。

○池田光政、初名は幸隆、三代將軍家光の偏諱を受けて光政と改めた。寛永三年左近衛少將に任ぜられて通稱の松平新太郎から世に新太郎少將光政といはれて居る、幼い時分から國政に意を用ひて居たが長ずるに及んで勵精益々加はつて熊澤蕃山・津田永忠・石川成一等の人材を登用して諸制度を改良すると共に諫誼を設けて善行を表彰したり、淫祠を毀つて、社寺を整理崇敬したり學校(岡山藩學及和氣郡岡谷學校等)を興したり、百間川を設け植林を施して水難を防いだり新に堀田を開き、池溝を整つて民業を勤めたりなど又自ら勤儉の範を垂れて忠孝文武を勤めたので士風自ら改まつて領民も亦其堵に安んじた實に模範的名君で、盛名風に天下に知られて居る。第百十二代寛元天皇の天和二年に薨じた諡を芳烈公といふのである。

○松平康哉は津山藩主長孝の子であつて徳川九代將軍家重の頃(寶曆十二年)封を襲いで津山五万石の領主となつた。天資聰明で仁厚民を慈しみ、文武士を勵まして舊政を改革した、儒士に大村庄助・山下官彌・飯室武中等、武道に槍

(名君賢士)

術の坂井善右衛門馬術の尼子大造、軍學に正木兵馬、醫術に宇田川支隨といふ様に名臣が多く、或は税法を輕めて民力の休養を計り、或は給養法を定めて鰥寡孤獨を救恤し、又育兒法を設けて墮胎棄兒を禁じ、更に孝子節婦を表彰して善政を施した。又藩校を興して、士の能否を試み人材擢用に資するなど藩臣の氣風面目を改め封内富み榮に其徳を稱へないものはない位であつた。康哉常に米澤の鷹山公、熊本の銀臺公等と交はり治民の得失を語つて居た。寛政六年歿し顯徳公と諡した。

○板倉勝靜は松山藩主で幕末老中となつて倒れかけた江戸幕府を背負ふて善處した人である。幼名は察八郎又は萬之進といひ後に伊賀守に任じた。資性溫良恭謙で力を治民に竭し藩祖勝重、外祖松平樂翁公の遺風を振作して藩内文武共に興り、政績亦著れた。鉅儒山田方谷を民間から抜擢して藩學有終館を起し川田剛・三島毅等輩出して皆要路の人となつた。慶應元年老中に進んだが時に勸主佐幕の志士は横行し議論は猶止まなかつた。幕吏中には佛國の兵を借つて鎮撫しようといふ者もあつたが勝靜は國體を辱しむとなして之を斥けた。明治戊辰鳥羽伏見の役に前將軍慶喜に従ふて大阪より海路江戸に下つたが勝靜は之より日光に退き徳川氏の宗廟を守つた。板倉氏は累世徳川氏に恩縁があるのて又止むを得ぬ事である。後恭順を表して臣節を失はず老職熊田治等此間に處して過たず節に殉じた。後勝靜敎されて東照宮の祠官となつて世を終つた。

○木下公定は足守藩主で從五位肥後守に任ぜられた。延寶七年藩學追琢館を興して文政を奨励した。ついで丹後宮津の城番となり、元祿十四年には赤穂城受取の役を勤めた。第百十三代東山天皇の寶永五年仙洞御所造營の御普請を承はつて功があつた。又詩書に巧て桑華蒙求其他の著流がある。曾孫利彪も亦好學追琢館の外に三餘舎を設けて民間の子弟を集めて教化に盡した。

○池田政香は鴨方藩主で祖政言の曾孫である。人となり嚴毅方正で篤く聖學を信じて異端に迷はず能く規諫を納れて、身を持つること淡泊であつた。常に玄祖光政の徳業を慕ふて一言一行聞く毎に拳々服膺して群臣百姓に臨んだので世に備前の小烈公といふた。明和五年二十八歳で卒したが時の人皆其早世を痛く惜んだ。

○伊東長詮は岡田藩七代の主である。第百十七代後櫻町天皇の寶曆十三年父長丘の後を繼いで立ち伊豆守に任ぜられた性溫厚篤實で仁慈の心が深く十二三歳の頃既に江戸にあつて参觀の家人に必ず封内の豊凶を尋ねて居た。明和七年大旱で領民大いに賑んだが長詮は自ら粗衣粗食して日夜邸内の稻荷社に雨を祈り且つ救恤米を與へたので領民皆感泣し

た。翌年豊作で百姓達は皆前年に感謝して冥加米を献じた。後長詮が病に罹つたが領民は之を憂ふて近江の多賀社、讀岐の琴平宮、其他に詣でて只管平癒を祈つた。牧童樵兒も神佛に祈願した甲斐あつて一時病癒れたが安永七年再發して永眠した。領民等は父母を喪ふたが如く哀悼の赤誠を表した。

○蒔田廣孝は淺尾藩最後の領主である。名は鏘太郎又權佐といひ後、相模守に任ぜられた。實は八郎左衛門廣勝の子で先代廣運の養子となつたものである。文久三年軍役の功によつて一萬石に進められ、元治の變に禁裡を守衛して功があつたので觀賞を蒙つた。慶應二年廣孝が在京の時に、周防岩城の奇兵隊九十餘名を率ゐた立石孫一郎等に淺尾陣屋を急に襲はれ遂に焼打にせられた。明治維新後藩知事となりついで華族に列し子爵を授けられた。後に總社町長をも勤めた人である。

○戸川安清は中庄の旗本筑前守安論の子である。十一代將軍家齊に擢んでられて小納戸となり累遷して目付となり播磨守に任ぜられた。文化十三年勘定奉行に轉じて冗費を省き急務に埋めて治績多く又十四代家茂將軍の時は大阪留守居を命ぜられ文久元年和宮親子内親王を二條邸に迎へた。此時持明院基政に書法を學んだ。安清殊に文事を嗜み書に巧であつた、嘗て論語を屏風に書して家茂に献じた事があつた。慶應四年八十二で歿した。

○池田長發は筑後守と稱して井原知行所の旗本池田長博の子である。資性頗悟昌平覺に修業中才學群を抜いて居つた。身を小普請組から起して次第に進んで外國奉行にまでなつた。文久三年長藩が下關に米艦を撃ち、又鹿兒島藩が英艦と戦ひ、七卿は長州に走り、大和には義兵が起り益々尊攘の國論が沸騰する時に當つて幕府は一時を糊塗せんため遂に筑後守を起して歐州各國に遣して領國の事を談せしめた。一行三十四人、長發は其正使であつた。其年十二月佛艦リモンス號に乗つて翌元治元年三月巴里に着いた。皇帝奈翁三世に謁し次いで外務大臣とも交渉したが領國の談判は全く功がなかつた。即ち他の國々との折衝は之を止め遂に七月横濱に歸つた。長發佛國の文物を觀て開港の要を説いて大いに朝議を動かす積りであつたが幕府は朝廷を憚つて長發に整居を命じた。慶應二年赦されて勝安房と共に軍艦奉行となり維新に及んだ。之から長發健康を害して又世事に關係せず明治十二年四十三歳で卒した。

○井戸平左衛門正明は備中・備後・石見の幕領を支配した名代官で八代將軍吉宗の頃笠岡に居た人である。正明は至誠寛厚の人で世人は皆其風采に接するのを希ふ位であつた。常に領内を巡視し民の貧窮を恤ひ仁政に心を傾けた。享保十七年石見に大飢饉があつたので平左衛門は早速官倉を開いて米麥を施し租税を免じた、又甘藷を薩摩から取寄せて

栽植させ内胤に備へたので世に諸代官様といつた後専断に官米を給與した情を具申したが幕府から何等の沙汰がなかつたので全く誣責を蒙るものと信じて、自責の念と武士の面目との爲に翌十八年居服して死んだ。今笠岡の威徳寺に其墓がある。

○早川八郎右衛門正紀は十一代將軍家齊の初世松平定信輔佐の頃幕命を受けて久世の代官となつた人である。當時地方民は教育なく道義は頼れ常に倫常に戻る行が多かつたが正紀は多くの陋習を除き殊に棄兒を禁じ郷校を興して典學館と稱し忠孝禮儀の道を訓へ勤儉を奨め農蠶を勵まし久世條教を頒ちなごして専ら指導啓蒙に努めたので郷民は其徳を仰いで慈父に接する様であつた。後笠岡に轉じて又敬業館を興して小寺清光を延いて師とし地方教化に任する事前の如くであつた。享和元年關東地廻役代官に榮轉したが地方舊治民は借別の情に堪へないで道に雲集して涙を以て送つたといふことである。

○岸本武太夫就美は苦田郡押入に生れた人で久世代官藤本甚助に仕へ後甚助に隨伴して江戸に行き幕吏となつた。天明元年佐渡に勤め治水の功を奏し領民悦服した。寛政五年進んで代官に任ぜられ下總・下野二國の幕邑六万七千石の地を治めた。武太夫常に政務に精勵し勤儉農桑を勸め、育兒法を設けて人口の増殖を計り、牛馬飼育法を定めて資金を貸與し畜産を奨め任に在るこゝ十八年、戸口は増し荒蕪地は開かれ、領民は就美を慈父の如く敬慕した。文化八年致仕して子、文之進莊美をして襲がしたが頗る父に似て民皆其徳に化した。今下總香掛稻荷境内に一大石碑を建て其功徳を傳へて居る。

○池田綱政は光政の子で寛文十二年家督を襲ぎ天資聰明で温良而も恭謙、父母に事へて頗る孝行厚く常に心を政事に用ひ、力めて神社佛閣を興して敬神の念を養ふたので士民其徳に懐いた。天下の三公國と稱せられる後樂園は第百十二代靈元天皇の貞享年間に此綱政が造つたものである。綱政の孫宗政、寶曆二年父綱政の封を襲ぎ文武を練り仁政を施し、父に事へて至孝士民範と仰ぐに足るものがあつた。故を以て將軍も數々之を賞賜した。宗政の子治政、亦孝心深く父を失つた時哀悼の様、人を動かしたいといふ事である。明和二年封を繼ぎ性聰明で剛毅果斷、只曾祖先の遺風を紹述して時人の聲に迷はず信する所に進んだ。當時老中松平越中守定信が頼りは弊政を改めて居たが治政は徒らに之に従はなかつた。里諺に「越中が越されぬ山が二つある。京で中山(中山愛親卿)備前岡山」と唱へられた。寛政六年致仕して江戸大崎に隱栖し文化七年國に就く時の句に「富士さらば又繪で會はう國隱居」其豪爽の風概を察する事

が出来る。九代茂政子なく鴨方藩邸が岡山天神山(今の縣廳舎の地)に在つたが其主、章政が入つて宗家を繼ぎ備前池田十代の主となつた。實に明治元年である。章政に名臣頗る多く、何れも維新の際、内外の衝に當つた。明治三十八年從一位勳一等に叙せられたが、ついで薨じた。

○森忠政は津山藩主である。森氏は源義家の六男義隆が相模森の庄に住んで森冠者と稱し其十八世の孫三左衛門可成が美濃の金山城に居り齊藤氏に従つたが後、信長に仕へた、長男は武藏守長一で長久手役に戦死し、三男の蘭丸が信長に用ひられて岩村三万石の地に封ぜられたが之も天正十年本能寺の變に殉死した。季子が即ち忠政であるが兄長一の家督を繼いで、やがて秀吉に仕へて川中島十二万石に封ぜられた。慶長五年關ヶ原の戦には眞田幸村に備へたが其功によつて同八年作州津山十八万石に封ぜられた。元和二年には津山城の工竣つて移つて之に據つた。忠政は特に意を水利に用ひ津山川の堤防を築いて流水の安全を圖り其他池濇を設けて民福の爲に盡した、又免狀典引米を以て貧民を救助したが何れも領民が其恩恵に感謝した。嗣皆其志を繼いで農桑を奨め神佛を崇ひ風俗を改善したが四代九十五年で森氏は絶れた。

○松平齊民は津山松平八代の主で水戸公齊明の第十六子である前藩主齊孝に養はれて天保二年家を襲いだ。人となり謹嚴温雅で常に意を治民に用ひた。城下に教諭所を設けて町人に書數及道徳を授け、督業場を置いて怠惰無頼の者を感化し、勸農所を設けて風教并に耕耘を導き治績最も多かつた。天保六年正四位下左近衛中將に進んだ。幕末多事の場合よく藩論を定めて勤王の赤誠を表はした。明治元年には靜寛院宮守衛を命ぜられ併せて徳川家達の後見人となつた嗣、慶倫は實は齊孝の子で義兄齊民の後を襲ふたが夙に尊皇の心が厚かつた。慶藩の時知藩事となり文武の道を勵ました故を以て人材真に多く藩士より現れた。慶倫又父齊孝の志を繼いで作樂神社を建てた。

○小堀政一、本姓は藤原氏、光道の時近江國坂田郡小堀村に住して氏とした光道六代の孫正次豊臣秀吉に仕へて五千石を賜はり關ヶ原の戦に東軍に屬し一万石を授けられて備前松山城に在番した。其子遠江守政一父について松山城を預り、遠州流と稱する茶道及插花の祖として世に知られて居る。之より前に茶道の名人として珠光あり武野紹鷗あり千利休あり吉田重能あり、政一は重能の高足である。政一は又造庭術にも秀でて居た。松山在番中楮の栽培を奨勵し檀紙の製造に力を注いだ、之から煎瀨、柳井氏の漉く引合紙が益々改良せられた。又阿曾郡に法會焼を創めたのも政一である。政一は茶道に於ける將軍家光の師範役であつた。

○水谷勝隆は松山藩主である。藤原秀郷の後で秀郷十一世の孫、田村重輔に至つて常陸の國石城郡水谷に住んで取つて氏とした。其裔勝隆同閣下館三万二千石から寛永十六年成羽及松山に於て五万石を賜はつて來り治めた。勝隆民政に意を用ひ、徳川四代將軍家綱の頃即ち萬治年間大森元直を擧げて淺口郡の海岸を開拓して水田を造つた、其周りに堤塘を築いて海波を防ぎ、高梁川の支流を導いて運糧灌漑に用ひた。玉島の今日あるのは全く此人の力である。

○木下勝俊は二位法印家定の長子で若狭八万五千石從四位下少將に上つた。關ヶ原戰の時秀頼の命で伏見城を守つたが、戰後封を著はれて京都東山に潜居し長嘯子と稱し風月を友として樂しんだ。其著に舉白集などがある。淡路守利當は勝俊の弟足守藩祖利房の子であつて天性槍を好み其技藝に神に通じて一家を成し木下流槍術を創めた人である。嘗て此人は三代將軍家光の前に槍の構へを試みたが今も當時家光より賞詞を賜はつた岩通しの槍が木下家に傳はつて居る。末裔 利玄は明治時代の人で廢藩當時の藩主利恭の嗣となつた貴族中新派の歌人として知られて居る。歌集に銀、紅玉、立春等がある。

○熊澤蕃山は名は伯鸞、通稱は次郎八、又、助右衛門といひ後に息遊軒、世に蕃山先生といふ。父は尾張の人、野尻一利といふて加藤嘉明に仕へた人である。蕃山は元和五年京都に生れて外祖父守久に養はれて其姓を冒したものである。寛永十一年十六歳で池田光政に仕へ日夜武技を習ふたが年二十歳の時去つて近江の桐原に行き、ついで學徳共が高い高島村の中江藤樹の門下にならうと訪れたが許されず簷下に臥する二晝夜に及んだ。藤樹の母が之を憐んで共に研究すべき事を藤樹に諭したので之より内に入れた。蕃山大いに喜んで刻苦精勵、研鑽(陽明學)最も努めたので學徳共に著しく進んだ。やがて桐原に歸つたが父一利は江戸に仕を求め、母は多くの妹と共に蕃山を頼つた。蕃山は貧苦の中にも孝養頗る深かつた。備前侯光政時に蕃山の逸材であるのを思ふて之を招いた。初め隊伍士長祿三百石となつたが名聲日に顯れて遂に年三十二にして擢んで大夫となり國政に參與し祿三千石を賜はつた。蕃山、性温良寛仁で威儀正しく王侯も此人を見ると容を改め又笑へば兒女も之と語るといふ風であつた。藩政に心を盡したが殊に水利に留意して水源涵養の爲、牟田山に植林し百間川を開いて城下の水害を除いた。又明暦元年飢饉の際領内餓死するもの九萬人といはれた時蕃山は藩主に勸めて藩の倉廩を開いて大いに救恤につとめたが若しも行渡らぬ事はなからうかま自ら國中を巡視した。後、狩に出て誤つて足を傷め致仕して、食邑蕃山村に退いたが之より蕃山了介といふた。職に在るこゝ十八年治績頗る多く光政の善政であつて蕃山の與らないものはない位である。隱退の後も藩主の敬禮厚く

大事には猶必ず參畫した、後芳野に居り明石に遷り遂に元祿四年古河に歿した。

○津田永忠は重次郎と稱し後、左源太と改めた。父を永貞といひ世々池田侯に仕へた。永忠寛永十七年岡山に生れ年十四歳の時光政の側兒小姓として仕へたが其才幹を愛せられて眷遇頗る涯かつた。常に寸暇を惜んで讀書し將來大いに赤誠を國君に捧げ様と思つた。蕃山が引退した時は永忠は十八歳であつた。寛文四年大横目に補せられて評定席に列つた。或は城内に假學館を或は各郡に郷學習字所を又は更に閑谷堂を設けるなど皆永忠の與る所である。永忠又封内を巡り小民救恤に意を注ぎ社倉の法を創めた、其他池澤河川を修築し農桑の業を奨勵し更に真享の頃後樂園經營に當り神田新田を拓きなど功績擧げて數へ難い位である。後、閑谷に隱退して世を終へた。

○石川誠一、通稱は善右衛門といふて池田光政に仕へた人である。承應三年早魃が續いたが兒島郡は特に其被害が甚しかつたので光政は成一を遣して賑恤せしめた。成一は詳かに山川地相を視察して今後の爲に池溝を修築したが兩來十年間三百有餘の池を作つた。光政は態々兒島に行つて成一の功績を備さに視察して賞を賜ふた。寛文九年歿したが郡民は哀惜して親を喪ふた如くであつたといふ。

○熊田治は松山藩士である。幼少の頃藩の有終館に學び文武の道に勵んだ。後伊豫宇和島に行き研究三年其蘊奥を極めて歸り藩内に劍法を教へた。治は初め身を近習から起して後、藩の執政となつた。慶應三年大阪に赴いたが翌明治元年伏見鳥羽の戰があつて藩侯勝靜は前將軍に侍して大阪より海路江戸に歸り治は君命によつて在阪の藩兵百五十人を率ゐて海路玉島に向つた。然るに朝廷では松山藩を朝敵と目し岡山藩に命じて松山に向はしめた。藩内擧つて恭順の意を表したが偶々治等が玉島上陸と聞いて備前藩が又之に備へた。時に治は士卒を鎮撫して、恭順より他意なきを示した。一方松山藩の有司は使を遣つて藩論を傳へ治に自裁して衆命を請ふべきことを以てした。即ち治は從容として自及し事なきを得た。今、熊田神社に祭られて居る。

○山田方谷、名は球、字は琳卿、安五郎といふ。文化二年上房郡中井村西方に生れた。幼年の頃より聰明で三四歳の頃書物を讀み且つ之を書した。五歳より新見藩の儒丸川松蔭の門に入り程朱の學を修め十六歳の時、家を繼いだ。方谷餘暇あれば讀書するに感じて藩主勝職其篤學を賞して二口糧を給ふた。後京都に遊び寺島俊平に學んだ。文政十二年苗字帯刀を許され松山藩有終館會長に任ぜられた後再び京都に上つて廣く名士と交り三十歳の頃江戸に遷つて佐藤一齋の門に入つて佐久間象山・鹽谷宏陰等とも交際した。弘化元年勝靜封を襲いで藩主なるに及んで侍講となり近習後

を兼れた。方谷から藩政に與り財政を整へ郷校を設け、貯倉を置き、道路を拓き、池溝を通じ、藩士に洋式訓練を施し、又郷兵を組織して不慮に備へる、といふ調子に整革すること十年面目大いに改まつた。勝靜藩府の重職に居る時の如き方谷は病を力めて東行して顧問となつて獻替する所が多かつた。後宿病の爲に郷に歸つたが元治元年征長の役に留守居に任じ又御一新の前後藩主に勤むる事が多かつたが何れも正鵠を逸せず藩論をして正しからしめた。晩年阿哲郡小坂部に居り備前の閑谷覺にも講を督した門人に河合繼之助・三島毅等がある。

○室鳩巢の名は直清、字は師禮、別號を滄浪といふた。上房郡中津井の人である。幼い時から書、史を讀む事を好んだが年十五の時加賀侯に仕へ、藩主の爲に大學を講じて英才であることを知られた。後江戸に出て木下順庵の門に學んで學大いに進んだ。新井白石の勤めで正徳元年幕府に仕へて侍講となり屢々政事の得失を述べて翼賛する所が多かつた。鳩巢固く朱子學を奉じて名教を維持することを以て任として荻生徂徠、及其他に當つて居た。嘗て將軍吉宗の爲に六論行義を作り、外に又、驗義雜話・赤穂義人錄等著はす所が多かつた。

○古川古松軒は吉備郡新本村の人で名は平次兵衛といふて享保十一年に生れた。偶鶯で大志があり學は師承さては無く特に地理學に通じて觀測を善くした。常に周遊を好んで其、山川・港灣・神社・佛宇・郡邑・城郭・交通・物産・風俗等研究せぬものはないといふことである。天明三年中國を経て九州に行つたが之によつて西遊雜記を著はし同八年には江戸から奥羽巡檢使に隨つて陸奥に行き東遊雜記を著はし歸途中仙道過ぎて歸郷して信濃縣を記した。寛政中松平定信、天下の人材を集めため古松軒を召した。之から平次兵衛は幕府の諸問に答へ、命によつて江戸附近の地理踏査を終へた。後、老ひたるの故を以て仕を止めて歸つたが岡田藩主伊東侯から二字帶刀を許されて二人糧を給せられた。當時の探險家近藤重藏でさへ懸々書を寄せて其東遊雜記の正確さを賞揚した位である。古松軒地誌地圖の著書多く文化四年八十二才で歿した。母は池田氏勝子、新本村の産で和歌及書に巧であつた。

○西山拙齋は淺口郡鴨方の人で享保二十年の生れである。名は正、字は士雅、別號を至樂居といふ。父は醫を業としてゐた。拙齋十六歳の時大阪に行つて醫術を學び儒學を播磨の岡田駒に受けた。後京都に移り、和歌を紀美領及僧澄月に學び名聲が高かつた。やがて朝鮮から使者が江戸幕府へ來た時其從士南玉・重舉に接して問答してから愈々古文辭學を捨て宋學を奉ずる様になつた。後に拙齋を招くべく阿波侯・加賀侯等が禮を厚うしたが何れも仕進の意なしと應ぜなかつた。拙齋漸く老境に入るに及んで備前池田侯は拙齋の嗣、愼に三人糧を給して孝養せしめた。其著に詩

文集、和歌集、其他がある。寛政十年六十四歳で歿した。

○阪谷朗庵は文政五年川上郡日里村に生れ名は素、字は子絢、素三郎と稱し後、希八郎と改めた。文政中父の良哉が幕府の代官屬吏となつて大阪に居つたので奥野小山に頼んで朗庵を導いて貰つたが遲鈍で學業に堪へぬ者とした。又大鹽中齋の門人等も朗庵を愚弄したが中齋は獨り他日大成すべき人物だといつて居つた。其言の如く昌谷精溪が懇ろに導く様になつてから學業日々に進んだ。更に古賀洞庵の門に入つたが洞庵は遂に朗庵の文章に及ばぬと稱揚した。朗庵暇あれば旅行をなし、よく紀行文を記した。後、母の疾を歸り養ふた。當時諸藩から招かれたが皆辭した。偶々一橋家の役人が地方民に朗庵の巨儒であることを語つたので西江原村寺戸に學舎を設けて地方民が朗庵を迎へ主としたのが今の興讓館中學校の起りである。廣島侯は賓師として米三百石を給し徳川慶喜も亦朗庵を召して五日糧を賞賜されたが之を館費に充てた。御一新後文部・司法二省に仕へて明治十四年歿した。

○藤井高尙は國學者であつて、吉備津神社の祠官但馬守高久の子として明和元年に生れた。幼少の頃神島天神の祠官小寺清先に學んだが後伊勢松坂の本居宣長に従ふて刻苦精勵して學業大いに進んだ、留ること七年、歸つて父祖の職を襲いだ、號を松の屋といひ名聲高く贊を取るものが頗る多かつた。常に諸生に研學の指針を示して懇切に導いた爲め門弟中名を成すものが多かつた。高尙は最も中古の和文に長じて造詣深かつた。天保六年京都の吉田家から三寸鏡蝦神の名を受けたが生前に神號を授かるといふのは又異數の事である。今、宮内に其邸址がある。吉備津の官司は其社領を治める官人であるから高尙も亦寛政十一年從五位下に叙し長門守に任ぜられて居た。高尙七十七歳を以て天保十一年に卒した。

○緒方洪庵は蘭學者で足守藩士である、名は章、字は公裁、三平と稱し洪庵と改めた。十五歳の時、父惟因に従ふて大阪の藩邸に居たが中天遊に就て洋醫學を修め二十二歳の時に江戸に行き坪井信道の門に入り蘭書を研究した。洪庵は家が貧しくて學資がなかつた、依つて先づ人に書を授け其謝金によつて自らも學んだ。常に弊衣を纏ふて居たので師の信道は氣の毒と思つて着物を與へたが洪庵の丈が長くて裾が膝を露はすといふ調子であつたが少しも構はず勉學大いに努めた。後宇田川玄眞に従ふて長崎に行き蘭人に就て學んだ。天保九年大阪に開業し傍ら私塾を起したが其門に集るもの前後三千人もあつた。又西國參觀の諸侯で病あるものは皆診察を請ふた。木下侯は洪庵の學識を愛つて侍醫とした後、幕府の招きに接し初めは之を固辭して居たが遂に侍醫となつた。文久三年五十四歳で歿した。洪庵親に事

へて至孝、師に對して尊敬厚く、教を受けた恩師の忌辰には必ず影像を掲げて祭つて居た。門人中名高いものに佐野常民・福澤諭吉・橋本左内・大村益次郎等がある。

○宇田川玄隨は津山藩醫道紀の義子で名は管、字は明卿、槐園と號した。五歳の時父を喪ひ叔父に交事して居た。才學人に勝れ、詩文を善くし、醫書といふ醫書は皆研めた。杉田玄白・桂川甫周・前野良深等と共に蘭學を攻究し天明元年侍醫に擧げられた。公務忙しくも手に西書を放さず勉學怠らなかつたが博覽強記に加ふるに此の努力、業大いに進み西説内科選要十八卷を著はしたが我が國に於ける和蘭内科譯書の濫觴である。玄隨人となり温純而も剛毅、母に孝養篤く嘗て人々長短を争ふた事もなく門人皆悦服して居た。寛政五年致仕し同九年に歿したが嗣なく門人安岡玄眞(榛齋)襲いで宇田川氏を冒した。

○箕作阮甫、名は虔儒、字は萍西、紫川と號した。津山藩士丈庵の子である。少年の頃永田桐陰に就いて學び後、京都に遊學して醫學を研究して文政五年侍醫となつた。藩主の出府に従ふて江戸に下り宇田川榛齋に就いて洋學を修めた。天保十年幕命によつて司天臺の譯員となり嘉永六年露國の使節來朝するに當つて筒井・川路等と長崎に行つて之と接見し、ついで洋學調所の教授職を命ぜられ幕吏として盡し安政二年には將軍家定に謁した。阮甫前に門人佐々木省吾を養ふて、自分の女を配したが一子麟祥を残して早世した。麟祥は明治の初、開成所御用掛、文部大教授、元老院議員、法典續纂委員、貴族院議員となり男爵を授けられた人である。阮甫は又、上房郡皆部の人菊地士郎(菊地氏其先は肥後、世々久世代官所典學館の教授で士郎は皆部教諭所に居た)の子、秋坪と父子の約束をした。秋坪の幼名は彌次郎、宣齋といふた。早く父を喪ひ稻垣木公に就て學んだが後江戸に上り古賀洞庵の門に入り更に洞庵の勧めにより阮甫に就て蘭學を研究したが阮甫其才を愛して子となし緒方洪庵に託して勉學せしめた。嘉永二年業成りて箕作氏を稱し、ついで天文臺譯員となつて幕府の外交文書を扱ふた。明治元年家を長子省吾に譲つて、三又學舎を興し、又森有禮・中村正直等と共に明六社を創めて人材の教養に任じた。秋坪或は文部省最初の師範學校を構理し或は教育博物館の事を總べるなど功績著る多かつた。舊藩主松平確堂、常に秋坪の言行を賞めて措かず最も信任された。次子大蔵は理學博士で後に大學總長となり文部大臣をも勤め男爵を授けられた。三子佳吉は理學博士で東大教授生物學の權威であり、四子元八は文學博士東大教授で西洋虫の權威者であつて何れも令名高し。

○川上忠晶は岡山藩士である。家は世々學職を以て池田家に仕へた。父は忠允、母は艶子、殊に此母艶子は眞に貞妻賢

母で學問も深く、忠晶・茂次、二子の教育を成就せしめたばかりでなく、自らも歌道を研め和文を藤井高尙翁に學んだ人である。忠晶、通稱は市之丞、春川と號した。幼より母の訓を身にしめて勉學怠らず、父の歿後少壯家祿を襲いだ。そして特に願ふて江戸に上り佐藤一齋の門に學び、往復の途上又大阪の大鹽中齋と經史を談じた。又軍學を修め易道を研究し天文數理にも通じ學殖深かつた。後、母艶子眼を患ひ、爲に黒住宗忠の門に誠を乞ひ信徒となつた。著書頗る多く積んで身の丈よりも高かつたといふ。文久二年六十八歳で歿した。

○黒住宗忠は御津郡今村の人で安永九年十一月二十六日に生れた。父宗繁は今村宮の福宜を勤めて居た。宗忠幼名は右源治、後、左京と改めた。天資正直で孝行の心厚く、或時天氣陰晴定まらぬ日、父の雨天説と母の日和説とに隨ふて宗忠は背く能はず一脚に下駄、他の一脚には雪駄を穿いて家を出たといふが概ね此類であつた。長兄は他家を襲ぎ、次兄は江戸に學び、宗忠獨り父を輔けて社前に奉仕した。之から神道を究明し様々先輩に就て釋れても其説多く神明の事蹟、古言の釋義をするだけで所謂神德靈現の妙、神人感應の理、幽現一致の眞を悟つて居るものは無かつた。そこで自ら大いに心を養ひ氣を練り、邪を去り、惡を絶つて修業した。偶々文化九年に父母を失つて悲しみに堪へず日夕思慕して遂に肺を病んだ。宗忠時に「神は生を好み死を忌み給ふ、此身は神の賜、此心は神の心である。今神に忤ふて心身を傷む、之父母に孝なる所以に非ず」と之から専ら日光に浴し陽氣を呼吸して心の修養によつて、病は全く癒れた。宗忠曰く「天地は同休、神も人も別けて考ふべきでなく、日月の照して萬物の育つのは之れ天地の誠である。誠の本体は神が之を受けて人に傳へ給ふたものである。故に人の言行は誠を以て終始一貫しなければならぬ」と。茲に於て七箇條の訓誡を定めて實行し三十六年間道を説き教を垂れたので其門に入るものが頗る多くて遂に一大宗教になつた。嘉永三年二月二十五日病んで歿した年七十一歳であつた。安政三年には宗忠大明神の神號を勅許され文久二年京都神樂岡に祀られ明治十二年岡山中野に宗忠神社が建立された。

○金光大陣は幼名を源七、通稱を文治郎といひ文化十一年淺口郡三和村占見に生れた。文政八年、年十二歳で同村大谷の川手桑次郎の養子となり岡太郎と改名した。人となり温厚誠實で敬虔の念が篤く家業の暇には絶えず神社佛閣に詣り又陰に善行を積んで樂しむ風があつた。嘉永三年三十七歳の時、住宅改築に當り災禍相次いで起つたが更に安政二年には又大病に罹つた、よつて勢祈禱をしたが先の建築が金神様に不禮になつて居るこの事であつたが病臥の大陣は深く心に金神様に謝した。之から信仰の念が一層加はり専ら修業の力によつて神に親しみ近づかんことを努め、遂に



安政五年七月十三日幽現感通の妙域に達し、宇宙の眞理を体得して天地の眞神を体現する事が出来た。之から日夜神傳へに従ふを以て事としたので其徳を慕ふものが多くなつて翌安政六年に金光教を問き爾來二十有五年木綿崎山の一室に靜坐して神意を傳へ今日の金光教となつた。(一神道派として獨立したのは明治三十三年である) 大陣

○釋日生は御津郡宇甘東村の産で金川の妙覺寺の開祖、日蓮宗不受不施派を再興した人である。字は樂山、宣妙院と號し、父は赤木梅太郎で文政十二年に生れた。父母は共に深く日蓮宗を信じ日生を松壽庵日惠の弟子とした後、和氣郡大樹庵の住職となるに及んで益々才能顯はれ日生によつて此寺の堂宇は改築された。日生は平素常に不受不施派の祖日奥が宗規を固守した高徳を偲んで其後を襲がんと欲し焦心苦慮東西に奔走し哀訴七十八回に及び漸く維新後願意は貫徹し同九年四月不受不施派を許され且、命ぜられて管長となり開祖の素志を達する事が出来た。茲に於て金川に妙覺寺の堂宇を創建して、今日の盛況を呈するに至つた。日生、明治四十一年享年八十歳で歿した。

備考 文祿四年九月秀吉東山妙法院に於て千僧供養の法會を營んだ時、京都妙覺寺の日奥は嘗て宗祖日蓮が救されて佐渡から歸つた時、北條氏が供養しようとするを斷然之を卻けて身延山に入つた。意によつて一宗に非ざれば國恩と雖も其供養を受けずといふ所謂不受不施の義を唱へて秀吉の供養に應じなかつたが本國寺の日重等は請待に應じて其供養を受け所謂、受不施であつたので之を極力排撃した。爾來徳川氏の世に及んでも二派互に非難を續けて相争つたが遂に身延山主日鏡が之を疾んで幕府に訴へた。そこで幕府は不受不施派の彈壓に力を用ひ寛永六年之を國禁にした。そこで二百年間受不施を宗義と解し之に反して文句を選べるものは罪に問はれた。然るを幕末釋日生が岡山に出て維新後不受不施の再興を許可された。

○藤本鏡石は上道郡宇野村(今岡山市)の片山佐吉の子である。佐吉は池田信濃守に仕へて輕吏となつた人で鏡石は其第四子で文化十三年の生れて同郡孫陽村藤本重賢に養はれて其家を襲いだ、字は鑄公(眞金)名は津之助、號を鏡石といふた。性沈毅而も大度あり容貌清癯昂然として鶴の如く學は和漢を兼れ詩歌を善くした。年十八歳、家職を繼いだが家居するを厭ひ天保十一年二十六歳の時飄然と家を出て京都に行つて長沼流の軍學者花房義制の門に入り勞々天下の志士と交つた。後諸國を漫遊して殆んど日本中を巡つた。文久三年慨世の同志と天誅組を起し自ら其頭目となつた。即ち松本謙三郎・吉村寅太郎等と中山侍從忠光を奉じて義兵を大和に擧げ五條の代官鈴木源内を斬り大いに幕

兵と戦ふて九月二十五日十津川に斃れた。此時加つて死んだものに上房郡松山の人に原田龜太郎があり岡山藩老土肥氏の臣に岡元太郎があり岡山藩士に小原重哉があつた。

○關藤藤蔭は小田郡金浦町吉濱の人、政信の四子で初め石川氏を冒し文兵衛といふたが後に本姓關藤に復した。天保十四年三十六歳で備を以て福山藩主阿部侯に仕へ累進して君側に侍して顧問となり、終に執政に任ぜられた。弘化嘉永の頃、内憂外患相次いで起つた頃、藩主伊勢守正弘老中となり其首席に備り頗る徳望があつたが藤蔭の献策した所が少くなかつた、殊に水戸侯齊昭を起して幕議に参劃せしめた如きは其大なるものである。時に志士の横議喧しく正弘罷められ間もなく病んで歿したが嗣主正教又卒し幼主正方が立つた。老臣等は凝議して藤蔭を其傳とした。明治戊辰の役に長藩東上の途に徳川氏の舊屬福山城を圍んだが藤蔭等此間に處して名義を明にして過たず廢藩の後も主家の内政を掌つて功があつた、藤蔭初め頼山陽に學び信任最も厚く、よつて日本政記の稿完成せずして師山陽死するに當つて藤蔭に託して補潤せしめた。

○牧野權六郎は幕末に於ける備前藩士である。名は成憲、字は子猷、柁軒と號した、身長六尺餘、容貌魁偉頗る古英雄の風があつた。父は薄田長兵衛、權六郎は牧野成武に養はれ藩公に仕へて祿五百石を頂いて居た。文武を兼修し戰術に長じ貝太鼓奉行となつて居た、慶應二年國事周旋方を命ぜられた。其當時尊攘論即ち討幕論の聲騒しい時であつたので權六郎は江見銳馬等と尊王の説を鼓吹し、藩主茂政(水戸齊昭第九子)に屬從して京都に上り宮城守護の任に當り、又大阪に至り將軍に謁して兵事の諮詢に答へた。既にして二條城の會議は開かれ權六郎備前藩を代表して其席に列り方今天下を安んずる道は將軍をして速かに大政を奉還せしむるの一策あるのみと述べたが滿座の者は茫然として言葉は無かつたといふことである。時に土佐藩主山内容堂等又大政を還し奉るべきを勸むるに及んで慶喜遂に奉還を奏請するに至つた。御一新前後國事を念ふこと篤く西郷隆盛當に曰く備前侯は徳川家と骨肉の間にあれど傑物牧野が居るから敢て念とするに足らぬと、明治元年三月支藩から章政が獨立するに及んで全藩正々堂々勤王討幕に加はるに至つた。權六郎同二年迄藩政を執り六月歿した。

慶應三年十月徳川慶喜大政を奉還し其年十二月九日王政復古の大號令は下り愈々御一新政治となつた。新政府成立、改元、奠都と目まぐるしい未曾有の大變革は漸次に完成された。舊幕領は固より諸大名の版籍も奉還され、ついで明治四年廢藩置縣の事に及んだが後次第に統合廢立が行はれて大休、備前は岡山縣、

備中は一時深津縣、後に小田縣、美作は北條縣となつた。それから明治八年に至つて此三縣を合併して岡山縣としたものである。維新の際我が岡山縣は雄藩の岡山は徳川家と縁戚に當り、津山は親藩、松山は譜代、足守の如きは小藩の外様に加ふるに豊臣縁故のため常に遠慮の氣味あり、庭瀬・岡田・淺尾其他は旗本より立身せるか又は特別の關係に置かるるかなぎで而も小藩ではあり率先して勤王討幕の第一線に立ち得るもの無く。可惜、薩・長・土・肥の後塵を拜するより外はなかつた。然れども我が岡山縣は山來文化の最も道んだ地方であるだけ維新以後に人傑、隨所に現はれて社會の各方面に活躍して居る。

維新前後の志士について國會開設に奔走した者に小松原英太郎・小林樟雄・西毅一・忍峽稜威兄等があり官界に身を投じて文武の機務に參制した人に花房義實・津田眞道・菊地大麓・岡玄卿・阪谷芳郎・有松英義・犬養毅・平沼騏一郎・石坂惟寛・黒瀬義門・原田一道・大藏平三・山田弘倫・石原健三・宇垣一成・藤井較一・岸本鹿太郎等があり、其他政治方面に法曹界に名を成した人に鳩山和夫・三宅碩夫・櫻井熊太郎・窪田靜太郎・小山松吉・池田長康・西村丹治郎・岡田忠彦等があり、實業界に木村清四郎・杉山岩三郎・山本唯三郎・大原孫三郎・白岩龍平・野崎廣太・馬越恭平・矢野恒太・高杉晋等があり、學者として菊池兄弟を始め久原躬弦・大西祝・綱島榮一郎・川田剛・三島毅・原田豊吉・花房直三郎・淺野應輔・片山正夫・平沼淑郎・齋藤清太郎・龜高德平・小川郷太郎・森彦三・齋藤大吉・尾上八郎・額田晋・田村剛・川村清一・近藤萬太郎・板野新夫・加藤元一等があり、其他文學藝術方面に江見水蔭・薄田泣菫・正宗白鳥・木下利玄・正富汪洋・田邊碧堂・池崎忠孝等及び兒島虎次郎・鹿子木孟郎・竹久夢二・石井金陵・滿谷國四郎・柚木久太・吉田苞・山田耕作等があり、角力道に山野邊寛一(常の花)、庭球に原田武一・牧野元、柔道に永岡秀一、發明家に磯崎眠龜、新聞事業に岸田吟香・秋山定輔・松崎天民等があり、宗教方面に佐藤範雄・山室軍平があり、慈善事業方面に石井十次・アダムス等がある。

(偉人傑士)

○小松原英太郎は嘉永五年御津郡青江に生れ、號を牛山といつた。少年の頃岡山藩に縁仕しつゝ、勉學し後東京に出て三田の慶應義塾に學んだ。明治初年早くも國會開設運動に魁し山陽新報社を明治十二年起し後大阪毎日新聞社の社長

となり又外務省・内務省の諸官に歴任し埼玉・静岡・長崎の諸知事となり貴族院議員に勅選され文部大臣・遞信大臣農商務大臣等に親任され又樞密顧問官に任ぜられたが大正八年六十八歳で歿した。

○西毅一は號を微山といひ岡山藩老池田隼人の臣霜山徳右衛門の子で天保十四年に生れた。森田節齋の門人西後村の嗣となり氏を冒した。明治十二年率先して國會開設を唱へ同十七年閑谷變を復興して人材を養ひ専ら育英に任じた、其間最初の衆議院議員に選出されたが明治三十七年俄かに歿した。

○花房義實は天保十三年の生れで岡山藩士花房端蓮の長子である。明治六年外務大書記官となり露國に吐割し、更に朝鮮公使に轉じ明治十五年の事變に際しては濟物浦條約を結んで功を立て後伏見宮・閑院宮等に別當を勤め、宮中顧問官に任じ又日本赤十字社副社長の重職をも勤めたが大正六年歿した。朝廷では生前其功を嘉せられ華族に列じ子爵を授けられた。弟直三郎法學博士は我が統計學界の權威であつた。

○津田直道は文政十二年津山藩士津田七大夫の長男として生れ幼名を喜久治、號を鏡齋といふた。博く諸學に通じて居たが殊に史學兵學に精しかつた。幕末軍事に携はり又和蘭に至り國際法を研め歸朝の後、開成所の教授となり維新後諸官に歴任して、元老院議員となり衆議院副議長となり貴族院議員に勅選され男爵を授けられた。更に三十五年法學博士となり翌年薨じた。

○菊地大麓は津山藩士箕作秋坪の子で安政二年の生れである。慶應二年幕命によつて箕作麟祥・中村敬字等と英國に留學して理化學を修め更に明治二年再び留學してケンブリッジ大學に研究を重ね時に幾何學に聲名高かつた。歸朝の後東京帝國大學に職を奉じ明治二十一年理學博士を授けられ又文部省に入つて累遷し明治三十四年遂に文部大臣となり男爵を授けられ更に京都大學總長、樞密顧問官に歴任して大正六年薨じた。弟箕作佳吉・同元八と相並んで名高い學者の家である。

○有松英義、岡山藩士有松正義の子、文久三年の生れである。諱は直英、通稱梅次郎、莖山、寸海と號した。獨逸協會學校の出身で司法官を振出しに各省參事官を経て三重縣知事となり貴族院議員、帝室林野管理局長官、宗秩寮審議官法制局長官、恩給局長等に歴任し遂に樞密顧問官に進み大正十四年歿した。我が國警察界改善の功勞者である。

○犬養毅は吉備郡庭瀬町の人、犬養源左衛門の二男として安政二年に生れた、號を木堂といふ。犬養氏其先は吉備津彦命の隨臣犬養健命である、毅幼少の頃森田月洲に學び又犬飼松窓の門にも學んだ。明治八年上京して藤田茂吉に知ら

れ慶應義塾に修學中、西南役に従軍記者として報知新聞に筆を取つて令名を馳せた、明治二十三年衆議院議員に當選してから死に至るまで代議士であつて國會開設以來議席を有するものは尾崎行雄と二人のみであつた。明治三十一年には早くも文部大臣となり又立憲國民黨を組織して領袖となり大正十一年には革新俱樂部を起して黨首となり屢々選信大臣等に親任され遂に立憲政友會に合同して後總裁に擧げられ昭和六年内閣總理大臣の印綬を帯びたが同七年五月兇變に斃れた。毅、終身政治の爲に盡瘁し世に憲政の神と稱へられた、又書道に秀でて居た。嗣子次男健は近代作家として令名あり且今代議士として政界にも名高い。

○黒瀬義門は岡山藩士黒瀬源六郎の長子で弘化三年の生れである。明治四年陸軍砲兵少尉に任じ爾來果進して陸軍中將となつた、其間陸軍砲兵射撃學校校長又は砲工學校校長、下關守備司令官、台灣守備司令官、留守第七師團長等となり日露役の功により男爵を授けられ貴族院議員となり遂に大正八年薨じた。子義一、和氣高等女學校長たりし事あり。

○岡玄卿は津山藩士で嘉永五年の生れである。明治九年東京帝國大學醫學部を卒へ獨逸に留學し歸朝の後東京帝國大學教授となり侍醫頭に進み明治三十二年醫學博士を授けられ毎に明治天皇に奉仕し同四十年勳功により華族に列し男爵を授けられたが大正十四年薨じた。

○原田一造は鴨方藩士で原田頑齋の子として天保元年に生れた。文久三年陸海兵書取調出役となり池田筑後守に従ふて佛國に行き尋いで和蘭に兵學を研究して歸朝し更に明治四年山田顯義に従ふて再び渡歐し歸國の後、大村兵部大輔を輔けて日本陸軍建設に盡した人で陸軍少將元老院議員に任じ男爵を授けられ明治四十三年に薨じた。嗣、豊吉は本邦地質學の大家で萬延元年の生れである、農商務省地質局長に任じ理學博士を授けられたが明治二十七年三十五歳で卒したのは惜しい。次男の直二郎は洋畫を善くした。

○大藏平三は幼名は岡之介又は三郎光俊といひ都窪郡茶屋町大野意俊の次男で嘉永五年の生れであるが後大藏健安の養子となつた人である。明治八年騎兵少尉となり後士官學校陸軍大學の教官に進み騎兵第一大隊長、軍務局馬政課長、軍馬補充本部長に歴任し、日清・日露の役に功を立て陸軍中將に進み男爵を授けられた。平三は實に本邦騎兵科の設立、馬匹改良の功勞者である明治四十四年歿した。實弟に工學博士淺野應輔がある、安政六年の生れで明治六年工部大學を卒業して直ちに同大學教官となり東京電信學校長に轉じ遞信省電氣試驗所長となり明治二十六年歐米へ出張を命ぜられ後東大工學部名譽教授早大工學部名譽教授となつた人で我國電氣工學界の權威者である。

○藤井岐一は岡山藩士藤井廣の長子で安政四年八月赤磐郡笹岡村に生れ父と共に藩老池田隼人に仕へた、幼にして藩學及私立遺芳館に學び明治七年上京して電信學校に入り轉じて海軍兵學校に學び同十六年海軍少尉に任じ爾來果進して大正五年十二月海軍大將に親任された、其間日清役には海軍少佐として活動し、日露役には上村將軍の率ゆる第二艦隊の參謀長として偉勳を立て其用兵の機敏を謳はれた、更に日獨戰爭の頃第一艦隊司令長官となり功績があつたが大正十二年豫備役に入り遂に大正十五年薨じた。岐一は岡山縣最初の大將で毎に孝行の心厚い人であつた。弟に裕爾があつた。

○鳩山和夫は勝山藩士鳩山博房の第四子で安政三年の生れである。明治三年藩の貢進生として大學南校に學び同八年米國に渡りコロンビア大學及エール大學に法律學を研究し歸朝の後東大講師となり更に代言人となり東京府會議員、外務省大書記官、東大法科教授、同教頭等に任じ法學博士を授けられ同二十三年辯護士となり衆議院議員に選ばれ同三十年衆望を擔ふて議長となつた後早稻田大學長となりエール大學より名譽博士に推薦され明治四十四年歿した。嗣、一郎は政友會の領袖で今文部大臣であり、次男秀夫は法學博士で代議士である。

○櫻井熊太郎は高梁の人で禿山又は不荷軒と號し櫻井喜兵衛の長子として元治元年に生れた。父祖の藥種商を繼がす上京して勉學し明治二十八年東大法科を卒へて辯護士となり傍ら二六新聞に筆を採つて口に手に國家及社會の爲に盡した事は一々擧げ難い位である。明治三十八年九月日露役の終局我が國に不利なりとて日比谷に國民大會を開き推されて其會長となり河野廣中等と共に大いに國民の意氣を示した。彼は常に文天祥に私淑して國事を以て念したが明治四十四年三月歿した。

○杉山岩三郎は岡山藩士中川龜之進の次男で出でて杉山氏を嗣ぎ明治維新の際には藩兵とし奥羽征討に加はり功があつた後岡山縣典事、島根縣權參事に歴任したが明治五年官を辭し専ら實業界に貢獻し岡山紡績、二十二銀行、中國鐵道、日本製鋼硫酸會社等を起したが其功績は一々擧げ得られぬ程である。大正二年七十八歳で歿した。健忘齋中川横太郎は岩三郎の兄である。

○馬越恭平は後月郡木之子村の人で醫師馬越元泉の次男として弘化元年に生れた。安政六年大阪の鴻池家に奉公し更に江戸に出て小旅舎を經營したが三井家の重役益田孝に知られて同家の先收會社に入り同社が三井物産合名會社と改稱された後も引續いて勤めて居た後、日本麥酒會社に入つて社業を擴め後數社を合併して大日本麥酒會社を設け自ら其

社長となつた、此間に衆議院議員となり大正十三年貴族院議員に勅選された、恭平は明治・大正の大實業家で氏が關係して居る諸會社も亦多い。昭和八年齡九十歳で歿した。嗣子徳太郎は醫學博士である。

○久原躬弦は津山藩醫久原宗市の子で安政二年の生れである。東大理工科を出て京都大學教授となり理學博士を授けられ理工科大學長となり次いで京都大學總長となつた人である。躬弦は化學の大家として知られて居る。

○大西祝、號を操山といひ岡山藩士木全正修の子として元治元年に生れた。後叔父大西定道の家を嗣いだ。同志社及東大に學び常に首席を占め卒業後東京專門學校、東京高等師範學校に教鞭を取つた後獨逸に留學し歸朝の後文學博士を授けられ京都大學に勤めた、其間六合雜誌を編輯し丁酉倫理會を起し常に國民の道德的理想を高尙ならしめるのを以て己が任とした、然るに惜むべきは操山三十六歳の壯年を以て歿した事である。名著が多い。

○網島榮一郎は上房郡有漢の人、號を榮川といひ明治六年の生れである。郷學を終へて上京し東京專門學校に學び東西の文學及哲學を研めた後早稻田文學の編輯に從ひ坪内雄藏・大西祝等と名を齊しうしたが惜しいかな明治四十年宿阿の爲に三十五歳の前途ある身で歿した。著書も相當に多い。

○川田剛、幼名を竹次郎、字は毅卿、號を蕨江といひ玉島の人で天保元年の生れである。松山藩の山田方谷の門人で經史百家に通じ秀才の譽高かつた後江戸の昌平學に學び藤森天山の門に入り修業の上歸藩して重職に備つた維新後大學博士に任ぜられ更に宮内省出仕を命ぜられ諸陵頭となり貴族院議員に勅選され、文學博士となり更に宮中顧問官に任ぜられたが明治二十九年歿した。

○三島毅、天保元年都窪郡中島に生れた。父は壽太郎といひ其先は山田鬼身城主三村實親である。山田方谷の門に學び更に津藩の齋藤拙堂に業を受け更に安政四年昌平學に學んだ、明治五年司法省判事となり同十年二松學舎を起して教を垂れたが及門の士三千人といはれる。明治二十九年東宮御用掛次いで侍講となり其間に文學博士を授けられた、後宮中顧問官に任ぜられ大正八年九十歳で歿した。

○岸田吟香は本名を銀次郎といひ久米郡大塚加村の人で天保四年の生れである。幼少の頃津山の永田幸平に學び後江戸に上つて津山藩儒川上郡日里の人昌谷精溪の門に入つて研學した、更に林圖書頭の塾に寓して水戸藩等に代講し藤田東湖等と親交があつた後米人ボンの和英辭書編纂を援け更に本間啓藏等と木版半紙摺新聞紙を發行したが之が本邦新聞紙の始である。吟香は此外各種事業を興し眼藥精銷水を賣り製氷會社を設け更に明治六年東京日々新聞を發刊し征

臺役の從軍記者として活動し、上海に樂善堂藥房を開業し日支交易に盡力して居たが明治三十八年歿した。

○磯崎眠亀、幼名を興三郎、後什三郎と改めた、天保五年茶屋町に生れた。長じて江戸に行き領主戸川伊豆守に仕へたが後致仕して歸る途中大阪で製綿糸機械を購めて小倉帯地の改良を企てたが之が什三郎の發明に手を染めるの第一歩である。後、縫目無しの蚊帳、兩面緞通、廣組縮織の花筵、蘭草煮染法、錦菫蓮の製法、莖織機の創製等什三郎の發明にかゝるものが多い。明治三十年勅定の綠綬褒章を下賜され同四十年に歿した。

○雲照律師、生れは出雲國簸川郡の人で連島町の寶島寺に來住した高僧である。律師の高き學徳は自ら僧風の改善に感化を及ぼして聲望次第に世に顯れた、後京都の勸修寺に移り又東京に轉じて田端の大龍寺に居り學校を開き更に目白に僧園を設けて十善四恩教の弘布に努め次いで高田十善成寺を創め那須野原に雲照寺を建てた律師は後眞言宗仁和寺派管長となり大僧正に進み明治四十二年壽八十三で遷化した。

○石井十次は舊高岡藩士で慶應元年の生れである。明治十五年岡山醫學校に來り學び同十七年夏偶々新島襄の同志社設立趣意書を見て感ずる所があつて郷里に歸つて教育會を組織し朝晩學校を興し又遊學給資法を講じ小圖書館を設けなごした後、腦を病んで邑久郡大宮村に轉地療養中其地の大師堂に詣でて備後産品郡藤尾の者前原つれの貧困を聞かされて感動し其伴へる兒を引受けて教養することを誓つて連れ歸つたが之が抑々岡山孤兒院の發端で、十次の所謂大慈善事業は即ち茲に始まるのである。然して伴ひし兒は前原定一である、十次は之から岡山旭東三友寺に孤兒院を設けたが事業は次第に擴張して常に數百の憫兒を收容して經營難と戦ひつゝ海内第一の孤兒院として世界無比の大事業を成就した。後、日向茶臼原に移り十次は大正三年に歿した。

○兒島虎次郎は明治十四年川上郡成羽に生れ、東京美術學校に學び更に自耳義・佛國に遊んで研究を續けた人で夙に倉敷市の大原孫三郎に知られて酒津の山莊に居住して居た。虎次郎が畫壇に聲名を博したのは明治四十年里の水車・恵の庭等の作品を發表した頃からで大正十五年に至つて初めて帝國美術院展覽會に青衣の少女・瑞典の乙女を出品し後昭和二年帝展審査員となり更に松方公より明治神宮壁畫に日露役宣戰布告御前會議の模様を謹寫すべく命ぜられたが其準備不幸昭和四年三月病歿した。(其壁畫は吉田菴が續いて謹作した)今倉敷に大原美術館があつて階下の一室に虎次郎の作品を陳列し階上其他に大原家秘藏の繪畫が掲げられて居る。

大正十五年郡制(備前の邑久・上道・和氣・赤磐・御津・兒島、備中の都窪・淺口・小田・後月・吉備・

上房・川上・阿哲、美作の久米・苫田・眞庭・英田・勝田は廢止され漸次町村は併合の傾向を生じ、市も岡山市の外に新に倉敷及津山の兩市を加へ、宇野港は開港場となり、邑久郡の長島には癩瘵養所愛生園が設けられた。又教育の方面に於ては岡山醫科大學・第六高等學校を始め男女の中等學校が縣下の各地に設けられ小學校・公民學校も次第に整備され、産業方面に於ても著しく發展の跡を示し、特に交通の上に於て更に一段の進歩を見るに足るものがある。

### 第一篇 地方誌

總社町は其昔、八田部、即ち八部郷であつて仁德天皇の皇后八田皇女（皇后、磐之媛崩後皇后）なられた天皇の異母弟、菟道稚郎子の妹の御子代部である。刑部は古の刑部郷であつて允恭天皇の皇后忍坂大媛の爲に定められた御名代部の地である。地名に淇井・井尻野・福井・井手等があるのは今の高梁川が淇井の所から東へ流れて服部村・三須村を経て足守川の流れを合して海に注いで居た事を物語るもので、十二箇郷水路は其河流の名残りである。井は堰で淇井は寶堰（財井）の意であつて其、堰尻の野堰手といふが如くである。三須は三洲の意で、加茂は河面の轉じたものである。十一箇郷（服部・眞壁・三輪・八田部・三須・服部・庄内・加茂・庭瀬・撫川・庄・妹尾の十二郷）用水路は第八十一代安徳天皇の壽永年中妹尾兼康が奉行福井次郎左衛門に命じて堰を作らせ用水溝を掘鑿させたのに始まるもので、今、淇井の井神社には岡象女命・水分神に併せて兼康を祀つてある。總社の地名は大化年間國廳所在の地に創置崇敬された總社宮の名残りである。當時祭政一致の日本精神から國司等が來任と共に先づ各社參拜の上政務を見る筈であるのであつて祈年祭等の場合は國幣を頒つて捧げ奉つて居たのである。現今の祭神は大名持命（大國主命）及須世理姫命であつて、明治五年縣社に列せられた。境内に沼田神社がある、備中式内十八

社の一つであつて、大年神が祭つてあるが兎に角此宮に因んで昔の八部が總社町となつたもので明治二十九年に總社・井手の二村が合せられ更に同四十一年に淺尾村（井尻野・門田・小寺・福井・刑部）と合併して今の總社町が生れた。井尻野には青木神社・五社神社・天満神社と社が多い。門田の地に蒔田氏一萬石の淺尾藩堀内城に頼宮四郎左衛門、戸城に樂師寺十郎が居た址がある。總社町の中八田部村は元松山藩の領地であつた。井尻野の井山城は矢尾入道の居城址で井山寺域は平安時代山上伽藍の名残りであつて今は禪刹寶福寺其他がある。秋葉山には秋葉神社があつて山上の眺望がよい。井手の清水は清水宗治の出生地である。小寺に吉備武彦・天御中主・若武吉備津彦の諸神を祭る御崎神社があり、西山の地に式内社古郡神社があるが祭神は吉備武彦命である。又寺に寶滿寺・萬福寺・極樂寺・松尾寺・南坊・報恩寺・善根寺・天仲院・觀藏寺等があり、それから福井には古墳がある。古郡は即ち賀夜郡家の地で前の賀夜國造邸である後に國府（御所）の所在地となつた。而して古郡社は宮山の地に祀つた。一体第十五代應神天皇の御代吉備氏御友別の子仲彦を以て創置された加夜の國は其子孫の人が世々國造を世襲したが大化改新以後は備中の國の下に加夜郡といふ名が残り更に此加夜郡の中で地勢上高梁川に沿ふて上方といふ意味で上房郡を分つたが此の新設に際して從來の國造は廢せられて新に郡領を置き元の國造又は名族を郡司に任ぜられた。賀陽氏も之から郡領となつた譯であり同氏で政務の才能あるものは之に任じ、そうでない者は總社の神人として諸上に居つた國造即ち國掌屋敷がそれである。又神樂丘は總社宮東南の近い所にあつて昔備中主基の歌（君が代を祈るいのりの神樂岡松も千年の名にや立らん）にも稱へられて居る。

#### 總社高女校歌

- 一、井山のもみち目もあやなれき 神樂岡の社の松の  
春秋知らぬ常緑の色  
操守りていざいそしまむ。
- 二、淡雪浮ぶ雪解の水も 濁らぬ波の高梁の川  
ゆるぎ流に立つ小波の 清き心にいざいそしまむ。

三、あしたの霧のかぎろふ庭に

匂ひ出でたる櫻の花の

春の色香を心にしめて

教のままにいざいそしまむ。

龜山石屏、名は博綱、八田部の巨族で、人となり風流書畫に巧である。弟、醜泉は吳春に學んで書を善くし、子、蘭蹄は武勇を好み、松濤は畫法に精しかつた。又池上泰川は秦村の板野氏に生れ、名は淳といひ淺尾藩池上殖寛の養嗣子となつた人で、官界を辭して詩賦を樂しみ風月を友として世を終へた、家集若干がある。堀安道は六友居士號し世々總社の祝師である、安道亦祠官として盡すこと厚く、加ふるに和漢の學に通じて名を知られて居た。安原玉樹は中原正徳の女で安原正常の繼室で婦徳高く和歌に巧みであつた堀雄三郎は杏村と號し當時新進の思想家で地方改革に盡した人である。申義小學建設に當つて神戸異人館を模して三階建洋館を造つたのは此人である。

淺尾騷動 元治元年冷門の變によつて長州征伐が始まつたが、長藩主戰派高杉晉作等は奇兵隊を組織して恭順論者に對した。此一味に柳井の奥石城に屯した奇兵隊を石城隊又は南奇兵隊と稱した、此の南奇兵隊の立石孫一郎等九十餘名は第一次長州征伐の後即ち慶應二年四月四日大島郡地方へ脱走して海路を東上し九日連島へ上陸したが十日は倉敷代官所を燒打し、それから淺尾に迫つて十三日朝淺尾藩を燒打して眞壁から高梁川に沿ふて下つて淺口郡の龜島新田に向つて去つた。頭首立石孫一郎は元敬之助といつて播州の人であつたが後、作州二の宮の立石氏に寄寓し更に倉敷の大橋平右衛門の養子となつて町役人を勤めて居た當時倉敷の米商下津井屋吉左衛門が買占暴利を貪るので之を代官大竹左馬太に訴へ更に後任代官櫻井久之助に願つたが裁決當を得なかつた。そこで敬之介は下津井屋に行つて激論の末吉左衛門父子及僕を斬つて火を放つて去つた。之から京阪に上つて藤本眞金等と結び終始幕府の新撰組に惱まされて居つた。後長州に下つて奇兵隊に加つたが時しも不仲な長州幕府の間柄ではあり即ち倉敷代官所を襲ひ淺尾陣屋を屠り松山に迫つて作州へ進む所存であつた様である。孫一郎等が井山に入ると岡山藩は山手村三軒屋方面から總社に、松山藩は日羽・野山附近へ夫々出兵したが十二日夜半から松山に向ふ途中、宍粟から引返して來て

十三日拂曉淺尾藩を襲ふて燒打にした。時に藩主廣孝は京師に在番して留守中で藩士等よく防戦したが及ばず戦死した者七人あつた。折柄岡山・松山・二藩の兵が迫らうとしたので孫一郎等は去つた。

井山寶福寺は財井及京都東福寺に因む名稱で作備臨濟禪の本山ともいふべき寺である。此寺は元、平安時代山上佛教の名残で昔は天臺宗の古刹であつたのである。創祖は日輪大阿闍梨であるが後に第八十六代後堀河天皇の貞永元年に眞壁の人鈍庵和尚(俗姓藥師寺——慧聰禪師)が新に伽藍を再建して法道に精進したが之が即ち寶福寺開山といふべき人である。時に臨濟禪は榮西によつて傳へられ數十年の後、辨圓は九條道家の請によつて東福寺を起し天下禪風を慕ふ時代であつたから、鈍庵も亦辨圓に教を聽き其高足、玉溪・無夢を延いて井山の二世及三世とした。茲に至つて天台宗の井山は禪宗の法域と化して行つた。鈍庵は高僧で四條天皇の御不豫御快癒を祈つて功があり遂に寶福護國禪寺と號して國家鎮護を祈るべき旨の宣下を賜つた程である。當寺は毎は東福寺と本末一体の關係があつて其住職は屢々出でて東福寺の管長に坐つたものである。昔は塔頭子院五十五字を有し末流三百餘寺、寺邑三千石を領し境内も東西十町南北二十町に亘り實に大禪林であつた。當山の住持には次々に碩學大徳が現はれ二十四世大機、七十二世象海七十四世大休、八十二世九峰等は何れも高僧である。今の住職は開祖より八十四世で前任雪巖の法嗣である。山城に般若院及び満足庵址がある。寺内の大殿には虚空藏菩薩(藥師次郎左衛門、力乞のもの)がある。三重塔は山内第一の古建築で天正三年の災火にも免れ得たもので龜山天皇の弘長二年北條時頼の建立にかゝり中に大日如來及四天王を安置して居るが今は特別保護建造物となつて居る。其他山門、大方丈、庫裡等があり、開山堂には鈍庵以下の三像を安置し、鎮守の宮には秋葉山神社がある。又雪舟の記念碑は大正十五年の建設に成り繪及像は雪舟、文は藤井高尙の撰、書は賴山陽で實に三逸の碑で後花園天皇の永享年中雪舟が當山で修業して居た昔を偲ぶに足る。寺内に地藏菩薩及十王像等の國寶畫軸が多い。服部村は昔の服部郷の地で應神天皇の三十七年阿知使主が命を受けて支那の吳國に使して其貢する所の兄媛・弟媛・吳織・穴織の四工女を伴ひ歸つたに始まるといふ吳服部の地であつて蚊屋の服部、加夜の衣縫

の居た所で、阿曾村黒尾は此地と共に吳（黒尾）服部であることは恰も吳妹服部（徳井田村）の地方と同じである。長良は加耶に因み、窪木・溝手は昔の流水の跡で地勢を意味し、國府は古郡即ち賀陽郡家の地で後に國廳の置かれた所で今府址があり域内に小祠御所宮が祭つてある。大化改新の時は假廳舎が三須村の御所山に在つたが、それが清水の地に遷され更に服部村國府の地に移し置かれたもので都宇・窪屋・賀陽・下道・浅口・小田・後月・哲多・英賀の九郡を管したものである。附近に賀陽山門満寺があるが古の加夜寺の後で賀陽氏の氏寺、平地佛教の名残である。村内に眞言宗の觀音寺・願満寺・桂林坊・大福寺、又禪宗の神護寺等の寺々がある。服部山の城址は長良山にあつて後醍醐天皇の延元々々大江田光信が吉野朝に屬して初めて築城したものであるが足利直義の爲に陥れられて細川氏の有に歸したが御土御門天皇の文明三年に彌屋康光（光信四世の孫）が細川氏の臣上野氏に代り此城に據つた。之から其六世の孫親光の時に至つて足守冠山の城に移つたが其後は彌屋氏の臣下が之に留守居した、後天正十年羽柴秀吉に陥れられて宇喜多氏に歸し其臣戸川秀安が在城したが後廢せられた、昭和五年に至つて秋季陸軍特別大演習の際大元帥陛下の野外統監部が此長良山頂に設けられたが今其聖跡に記念碑が建立されて居る。窪木に親光の屋敷跡、本源寺に其墓がある。又服部山乾丸の地に八幡神社があるが根矢五郎左衛門久利が應仁の亂に上京し文明十二年に勸請して祭祀したものである。

○備中國府遺址之碑。延喜式曰、備中國府在賀夜郡、距京師行程上九日、下五日、海路十二日、管九郡七十二鄉二郡郷考云、今八郡郷有國府名曰北國府南國府、按其間所謂御所地即古國廳址也、址四十餘町有總社明神、祀備中國古社三百二十四、蓋歷代國司所尊崇也、御所今屬吉備郡服部村、余就而觀之、方可三町、南沿大達、東西北三面繞以濠、濠幅三十間、地形割然合古條里制焉、夫吉備者天下之雄鎮、方大化改新與倭京東國筑紫、竝爲四大政區、然備中國府實爲其本據、天武朝有大宰石川王、文武朝有總領小野小足治焉、爾來閱歲七百、歷代國司無慮五百有餘、咸忠良恪勤敦化施德、文武盛名顯於一世、嗚呼亦隆乎哉、頃郷人胥謀欲四至勒貞眠、永顯遺跡、徵文於余、乃記其梗概云爾。

大正十五年孟秋（永山宇三郎）

生石村は生石郷の地であつて高塚に天満神社がある。祭神は吉備津彦命で一に矢喰宮といふ昔吉備津彦命が阿曾村鬼城の温羅を攻め給ふた時、温羅が怪術を以て石を投げて防戦したので命は神祕を以て双矢を番へて射放たれた所が其一矢は温羅の左眼に當り鮮血流れて血吸川となり赤濱沖に漲り他の一矢は岩に喰合ふて落ちたといふ傳説があつて今も境内に岩がある。門前に應神天皇外を祭る生石神社がある。境内に柱の如き奇石があつて其地中にある長さを知らず、依つて生石の名が起つた。生石明神は神功皇后皇子御誕生の守り神であるとして尊敬された傳へられて居る。下土田妙蓮寺畑に藥師寺彌五郎久持の墓所がある。藥師寺氏は大内氏及毛利氏に歴屬して土田の城主であつた、久持は彌屋與七郎等と共に毛利氏に従うて浦上氏の備前龍の口城を攻めて功のあつた人である。足守驛附近は高松城水攻の時、足守川よりの水の取入口であつて驛下の籓の中に堤址が残つて居る。附近の堤防には大正天皇御大典に因む櫻樹が多い。新福寺に田熊雪舟の墓がある。此外寺に報恩寺及鏡善寺がある。

高松町は西は生石郷、東は板倉郷に續く地域である。稻荷山には慶長六年僧日圓の開基にかかる日蓮宗龍王山妙教寺があつて鎮守の神として叱根尼天を祭つて居るが所謂高松の最上位稻荷大明神で京阪四國九州方面からも參詣する者があつてなかくの繁昌で中國線及稻荷山ケーブルも此爲に設けられて居る。山頂奥の院に荒多喜權現を祭つてある。原古才の蓮福寺の境内に高松地蔵があつて毎年冬の頃、地蔵市を開いて本尊の開扉を行ふ、昔の槍劔を商ふた劔市の名残りである。大龍山龍泉寺は飛瀑で知られ、妙立寺位牌堂には清水宗治の位牌があり、石井山には秀吉の陣址、蛙ヶ鼻には水攻の堤址が残つて居る。佐古田には縣下第三位といはれる前方後圓の古墳がある。又高松城跡は、今は松林になつて居るが何となく其昔を偲ぶに足る一區劃を残して域内に宗治の首塚及城址碑がある。高松の地は旗本花房氏六千石の知行所であつた所である。立田に御崎神社、和井元に八幡社があり、平山に姥塚があり、寺に星友寺・持寶院・遍照寺・法土寺・妙立寺がある。岡山縣高松農學校は昭和五年陸軍特別大演習の際、陛下臨御の上、御講評

叱根尼天

のあつた所である。

眞金村は往昔の板倉郷の地で官幣中社吉備津神社がある。三備の一の宮で大吉備津彦命外配祀八柱の神が齋き祀つてある。宮は仁徳天皇の御代に創建され、朱雀天皇の天慶三年に一品に進められ明治四年に國幣中社、大正三年に官幣中社に昇格されたもので社殿は特別保護建造物に屬して居て後小松天皇の應永八年足利義滿が勅を奉じて起工し同三十二年に竣工したものであつて全國に比類のない吉備津造と得する比翼權現造りである。境内の特別保護建造物に天文十一年建造の北隨神門、延文二年建造の南隨神門がある。廻廊は延長百九十間あつて天正七年の建造で又天下無比の構造である。其他、前殿・社務所・齋館・神饌所等がある。御釜殿は阿曾女の奉仕する鳴動竈殿で、温羅の生靈を祭る所といはれ今は病癒祈念の人が多い。後方の山は所謂鯉山であつて遠望の形が甚だ鯉に似て居る。一に國幣小社一宮吉備津彦神社との中間にあるを以て中山といふ。大吉備津彦命の御陵は此山頂にあつて馬頭陵又は茶白山陵といふて面積五千坪の瓢塚である。陵前の眺望非常によく參道の傍は細谷川の清流、其落ち口に細谷川の古跡碑がある。一宮村尾上山林中に石舟と稱する石棺があり、中山の東方兒溪に有木の別所があり、此處へ幽居して難波經遠に殺された大納言藤原成親の墓がある。又鯉山小學校内に明治四十三年陸軍大演習の砌り行在所に當てられた明治大帝の御遺跡があり、又此處に妹尾兼康の墓がある。附近に國學者藤井高尙の舊邸があるが今は中山通幽氏の居宅となつて居る。儒者眞野竹堂も此地の人である。又我が國禪宗の開祖で同時に茶祖と仰がれる榮西禪師は此地の誕生で今其舊邸を残して居る。普賢院は眞言宗の寺で會陽を以て名高く、其他鷲の森・首掛の松等の傳説の所もなかく多い。又宮内は舊幕時代、遊里としても其名が知られて居た。それから備前備中の國境近く史蹟一里塚が完全に保存されて、一方に松、一方に榎と徳川時代の遺址が残つて居る。板倉は往昔の宿驛の地で妹尾兼康の出た所でもあり又敗死した地でもある。榊形城址は兼康の臣陶山道勝の居城した所である。

庭瀬町は新瀬の言ひで海に因む地方で昔の庭妹の郷である。板倉氏二万石の舊藩地で陣屋の址は今廻らす

に濠を以てし其處に藩の遠祖重昌及重矩を祀る清山神社がある。其他川入に八幡神社、兩花尻に天神社がある。板倉氏の菩提所は禪宗松林寺で、戸川家の菩提所は日蓮宗不變院及信城寺である。川入の地は明治大正昭和の大政治家木堂大養毅の出生地である。地名に平野・川入・庭瀬・花尻等往昔の地勢を物語るものも多く今は鐵道山陽線の一驛で國道に沿ひ、隣は都窪郡撫川町に接して居る。又庭瀬藩老で丹精の技に長じた海野雙齋といふ人があつたが藩醫岡西雲林も畫に巧であつた。雲林の曾孫鯉山は明治大正の詩人である。

三須村は昔の御寶の郷で溝井からの支流城川洲の地であつたもので太古は海水の漂ふたものと見えて江崎赤濱の地名を残して居る。三須の地には淺尾藩分家旗本蒔田氏三千七百石の知行所であつた所で、作山は縣下第二位前方後圓の大古墳で、兆域三町に四町、高さ前方は十一間、後方は十二間、其三段中の二段に埴輪圓筒を列べ立て今は史蹟として指定保存されて居るが實に大和地方高貴の諸陵に譲らぬ程の規模を有して居る。其何者を葬つたかは判明せないが此古墳だけ見ても吉備民族が如何に古くから勢力があり且つ榮えて居たかが想像し得られる。尙天然記念物として數百年を経たものかと思はれる根幹の周りが二丈餘りの大松が三須の地にある。上林の山本神社は八幡社であり白井の地清水を出して名高い。緑山は妹尾兼康の古戦場で附近に三箇の塚がある、一の塚には兼康の遺骸を埋め、頂上に地藏堂を建立し三等山藪善坊といつた、後今の所に移して山本地藏といふ。赤濱に蓮根池がある、昔は人家が野中に在つたが漸次山裾に移り住んだもので、彼の小田雪舟の宅址も田圃中に在るさいはれて居る。下林に松井の清水がある。下林はれて居り、龜山城址は佐野和泉守忠綱の居た所である。奈良時代の遺跡、日照山國分寺は三須村の下林に在る、奈良朝の平地伽藍の名残りであつて昔は八宗兼學の道場であつたが今は眞言宗古義派御室仁和寺末に屬する聖武天皇の天平十三年三月二十四日の降詔によつて行基菩薩の創建した所で、當時七堂伽藍が皆備つて巍然として聳え立つて規模實に宏壯を極めたものであつた。寺名も金光明四天王護國寺と稱へたが後之を改めて日照山鎮護國土院といふた。爾來星遷り歳變つて次第に頽廢に及んだが遂に後醍醐天皇の



延元元年足利氏の爲に兵燹に罹つて全山鳥有に歸した。尊氏は義に京都に敗れて一旦九州に走り、戦備を整へて東上の途に上つたが其時直義の陸軍が備中福山城を陥れ同時に此寺も焼かれたものである。後に後村上天皇の正平年間に四國からの行脚僧増呼僧正が可憐名寺の荒廢を慨いて勅允を仰いで舊址に堂宇を再建したので輪奐宏壯の美を再び仰ぎ見るに至つた。然るに後小松天皇の應永四年又もや祝融に見舞はれて堂宇餘す所無い迄に焼けた。依つて寺は同村門庄に遷された。後土御門天皇の應仁二年又々兵火の厄に遭ひ遂に總社町清水の萬福寺境内に移され正親町天皇の天正年間には彼の高松城主として名高い清水宗治の一著提寺の如き有様であつたが茲に於て足利十三代將軍義昭から朱印百五十石を賜はつた後、東山天皇の寶永四年堂宇再興に當り領主時田相模守廣善は工を援けて本堂其他を清水の地から舊位置即ち今の所に移したもので、恰も住職増鐵の時であつた。現在寺域千五百餘坪、建築物は本堂・祖師堂・五重塔・茶寮・大門・中門・方丈・庫裡・土藏・客室・寮舎等であつて猶地方の巨刹である、五重塔の如きは往昔の七重塔の規模に比すべきではないが、それでも多少昔を偲ぶに足るものがある、塔は仁孝天皇の文政年間の建立である。寺内に行共僧正の作になる三傳へられる本尊藥師如來を安置して居り、其他聖武天皇御宸筆の經偈、弘法大師筆の五大尊像、智證大師筆の虚空藏畫像、清水宗治の願文等を秘藏して居る。現住一視義晃師は開祖七十二世の法嗣である。又法華滅罪寺即ち國分尼寺の跡は此寺の近くにあつて今其礎石を存し史蹟に指定されて居る。

(備考) 天平十三年國分寺建立の詔の一節に。朕薄徳を以て忝くも重任を受け、未だ政化を弘めず寤寐多く慚づ古の明主皆能く先業を修め國泰く人樂しみ災除き福至る何れの政化を修めて能く此道に臻るや頃者年穀豊ならず疫癘頻りに至る、慙懼交々集り唯勞して己を罪するのみ、是を以て廣の蒼生の爲に景福を求めんとす云々……宜しく天下の諸國をして各七重の塔一區を敬ひ造り並に金光明最勝王經妙法蓮華經各十部を寫さしむべし云々。

又此國分寺附近に黒媛塚と傳稱される皇塚即ち蝙蝠塚があつて中に巨大な剝拔式石棺がある。

山手村は御寶郷の一部で窪屋郡の山方(海手、川手に對して)といふ意味であらう。即ち大休福山々麓の地で、西郡の地は錦織里の轉じたもので、地頭片山は地頭職の置かれた山方の謂ひで、岡谷は往昔の海地に對して陸地といふ意であり、宿は上古の津坂驛の宿場の地である。福山は雄大な山で昔の人の居住の日印となり然も福山といふが如き名稱を撰んだものと思はれ、秦村の正木山も正にそれである。山は平安時代の山上伽藍の遺址で昔は一山十二坊の寺があつたが延元々年新田義貞の部將大江田氏經が此地で東山の足利直義の軍を防戦して全山鳥有に歸したものである。幸山城は石川氏の據つた所である。三軒屋は山陽國道に沿ふて此村の中心地をなし附近に大己貴命を祭る御崎神社があり、東南に古墳角力取山がある、方墳であつて今は地神を祭つて居る。岡谷に和靈神社があつて山家公頼を祀る。(山家公頼は伊達政宗の臣で元和元年政宗の子秀宗が宇和島に封ぜられた時公頼も從ふて伊豫に入り老職として忠誠を盡し諸政を刷新して治績大いに擧つた。時に奸臣が之を嫉んで公頼を蚊帳中に殺した、實に元和六年六月三十日の事であつた。然るに其忠魂君側を去らず倭臣は爲に斃れ或は災變を未然に告げ靈威頗る高く遂に城北に見玉明神と祀られ更に後光明天皇の承應二年に秀宗の子利宗が京都の吉田家に許されて和靈社と稱し中御門天皇の享保二年大明神號を宣下された。今本社は宇和島市八幡に在る) 三軒屋の南方三町許りの所に南から突き出た様な丘の地があるが之が昔の津坂驛のあつた所で津坂山を境として東が岡谷、西が地頭片山になつて居る。岡谷は友野石見守高盛の據つた所で天正三年其主石川久式が松山城が陥つた時阿波に走つて再舉を圖るべく石見守の許へ立寄つて不幸毛利軍に攻められて自及した宅址がある。又久式の墓は三須村の戒光寺の側にある。其他西郡に奈良時代條里制の區劃が判然と残つて居り又此地に一里塚の老松がある。

加茂村は古の加茂郷(河面郷)の地で板倉川の面の義であり、又新庄下の附近は深井郷の地方で前の都宇郡の中である。新庄の地名は造山城主新庄右衛門から起り、惣爪は海面を埋め墾田を作つた事に因み、江田は延元の頃江田民部光氏が足利直義に破られて土着した事に起るといはれ、津寺は都宇郡の寺の義で、

今津寺址の巨大な礎石を存して居る、新庄は花房氏の知行所であつた所である、此村は日蓮宗が盛んであつて中にも一乗山本隆寺は最も名高く、嘉吉の頃日隆の開基にかゝり後僧日正が中興したといはれて居る附近に末寺四院を數へる。此外蓮休寺・宗蓮寺等があるも皆法華寺である。岩崎山は一名庚申山といひ高松役に吉川元春が滯陣した所で此處に帝釋堂及梵天堂がある。大梵天王（一切衆生の父）及帝釋天（佛法守護の神）の兩像は天正の回祿にも焼けず寛文の風雨にもめけず靈驗あらたかなりと世俗の信仰が高く參詣する人が多い。神社に加茂社がある。造山は縣下第一の古墳で附近に陪墳もあり石棺もある。中須賀に岡崎の城址があつて天正の頃毛利氏の配下であつた上山、兵庫元忠・生石中務・桂民部大輔廣重等が居た、惣爪に明治天皇の大演習御統裁遊ばされた御野立所址がある。

庄村は往昔の深井郷の地で、萬壽年間に開墾された萬壽東庄に當り、松島は昔の海地を物語り、栗坂は村社の祭神栗坂留零臣に因み、二子は應神天皇が御母神功皇后と共に此處まで還り給ふて御二歳に成らせ給ふたに因み、日畑は火簇で、矢部は矢作部で、共に吉備津彦命鎮撫に關係があり、山地西尾は地勢による地名である。矢部に鯉喰神社がある、夜目山主命父子を祭つてあつて、仁徳天皇御創建、吉備津宮七十二末社の一である。吉備津彦命が中國御下向の際、此夜目山主の家に宿らせられたが夜目山主は喜ぶて居る鷗を放つて魚を求めたが鯉を喰へて浮び出たので戦勝も亦此の如しと命に獻上して御贄したが果して明日軍に捷つたといふことで戦功のあつた右父子を齋き祀つてある。日指山寶泉寺は古は滿願坊といつて日指山にあつたものである。日差山は形廂に似て仕手倉山に隣して居る。報恩大師、法流の山上佛敎の地で昔は二十二坊を數へた。頂上の岩石に毘沙門天王の像を刻んで居るが吉備津宮御崎の御本地佛といはれて居る。鷹巢城址は小早川隆景の陣營地で、河屋・日畑にも城址がある。徳川幕府の頃矢部に多田松莊、山地に犬飼松窓といふ儒者が出た。

常盤村は昔の三輪郷及眞壁郷の地方で、三輪は百射山神の大三輪に因み、眞壁は元、白髮部といふて清寧天皇の御名代部であるが後に光仁天皇の御諱白壁を避けて眞壁と改めたに始まる。溝口は用水路と關係が

あり、中原は上原・下原・富原などと共に川島川流域の地である。太古は海であつたもので三輪の船山なごが其遺跡の一つである。溝口に古城址があつて今稻荷神社を祭つて居るが之が眞壁藥師寺次郎左衛門公義の城址である。公義は足利尊氏・直義兄弟が争ひ戦ふた時に尊氏方に屬して觀應二年小清水合戦等に軍功を立てた人である。井山寶福寺の開祖鈍庵は此藥師寺氏から出たのである。又我が總社高等女學校の前身である春鷲女學校及び其又前身の春鷲學舎を創めた横田養一氏は中原の人である。式内百射山神社は備中十八社の一つで今は三輪の宮山に在る、祭神は大山祇命に大國主命を合祀したもので昔は福山の西麓にあつたのである。地方は比較的製藥の業も盛んである。

清音村は昔の輕部郷の地で允恭天皇の皇太子木梨輕皇子の御名代部である。清音は福山の西麓で高梁川の水聲を併せ山水有清音に因むものと思はれる。中島は輕部の枝村で川中島の惑があり、柿木は一株の柿樹があつて附けた名稱といはれて居る。又三因は三輪の分郷地であり、古地及黒田は或は文字の儘であるか輕部の圓立坊に大覺大僧止の筆蹟南無妙法蓮華經七字の題目石がある。側書を見るに曆應五年法華宗莊實なる者が先考の十七回忌に際しお願して大僧正から名號及旨趣を書いて賜はつたものらしく、和氣郡の益原、御津郡の辛川と共に三題目石といはれて世俗の尊信が厚く參詣者も多い。黒田に小野小町の墓がある百人一首にある出羽郡司小野良實の娘とは同名異人で備中守小野常澄の娘らしい、小町は和漢の學に通じ殊に阿智郡湯川寺の玄賓（所謂備中七名人とは箭田の眞備、連島の聖實、上水田の玄賓、黒田の小町、赤濱の雪舟、占見の道滿、小田の徹書記）に就て和歌を學んで其名高く後、采女となつて都に上り、昌泰三年九十二歳で死んだ人である。墓は元、黒田から輕部へ通する山上に在つたのを寛保三年に其五輪の一石を下したもので今も山上に小野屋敷、小町の井といふのがある。三因に高祖堂があり日蓮上人の木像を安置してあつて大覺大僧正巡錫の靈場である。柿の木に藤原爲定の墓があり碑面に曆應三年九月八日と記されて居る。爲定は鎌足二十一世の孫正二位大納言二條爲定とて有名な歌人であるが此人の子が或は輕部の地に住んで之を立てたものか今詳でない。古地に猪俣彈正左衛門義冬の居た古城址がある。輕部に國常立

命天照大神外三柱を祭る輕部神社があつて境内に垂乳根の櫻とて名木がある。又矢幡の地に應神天皇比咩神功皇后の三神を祭る八幡神社がある。昔宇佐八幡(宇佐八幡は欽明天皇の頃創祀され、男山の地石清水八幡は清和天皇の頃奉祀され、鶴ヶ岡八幡は後冷泉天皇の御代源賴義が男山八幡を勧請して祀つたもの)へ奉幣の勅使が奉遷した所である。高梁川の河川工事は大正五年から全十四年まで十箇年間を費し總工費七百九十萬圓を投じ内務省直營として竣工させたもので下流の地で二分して海に注いで居たものを堤防を修築し用水路を設けて東高梁川を廢川にしたものである。

神在村は今の秦村及常盤村の中原なごと共に昔の秦原郷であつて、上古の川島縣の地域である。八代は社の義で式内神社神社がある爲に名附けられた地名で、神在村も之に因むもので、此村は昔は御諸村といひ大和國御諸山三輪大神を勧請して附したものである。今も小字に神樂田・宮の脇・宮砂等の地名がある。神社には大物主命・應神天皇・天照大神・春日神・大山咋命外七柱の神を齋き祀つてあつて木村山の中腹にある上原・下原・富原の地は高梁川の原の義である。上原に萬壽山興禪寺がある、寶福寺末であつて境内に觀音像がある。下原夕部山は伊與部山とも記し山麓斷崖の岩に彫刻した地藏佛がある、約七百年前に勝山城といはれ此山は古來名勝の地と謳はれて居る。岡田藩士徳田知貴の子で花房義實の父である端連は此地の産で、出でて岡山藩士花房義連の末期養子となつたものである。端連は幕末岡山藩政の功勞者であり維新後工部省に入つて鐵道局に勤めて功績があり又岡山市長にも擧げられ或は二十二國立銀行・岡山紡績を興す等社會公衆の爲に盡す所が多かつたが明治三十二年に歿したものである。それから江戸時代の儒者明石夕山も此地の人である。

川邊村は古の川島縣で應神天皇が下道氏の祖稻速別を封ぜられた地域であつて天平中は白壁郷に屬し後川邊郷を起した昔の宿驛渡津の地で古來旅人の詩歌が多い。岡田藩の伊東氏は徳井田村に入部し更に川邊に遷り據つたが屢々水災を蒙る爲め岡田に陣屋を構へたもので今泰平山源福寺に其累世の墓がある。寺には

此外に藏鏡寺があつたが明治二十六年の水害に破損して今は小學校の敷地になつて居る。村社長御崎神社は須佐之男命・大國主命・建御名方命・少名彦名命外五柱を祭り領主伊東氏の尊信厚かつたものである。猶外に村社稻荷神社がある、仁徳天皇の頃笠原の祖守は勇悍で川島河の大蛇を斬つた事傳へて居るが之が縣守淵である。南山城は川邊臣百依の築いた所で天文の頃は石川氏が之を領し加藤右京亮政光等が預り天正の頃は毛利氏に屬し鹽尻縫殿が城代として居た。此地に一里塚がある。加藤待庵は伊東氏に仕へ藩政を釐革した人で川邊の産で詩文にも長じて居た。

二萬村は昔の邇磨郷で齊明天皇が皇太子中大兄皇子と共に百濟を援けて新羅を征伐されるため西九州へ下らせられる途中此地で軍士を徵發された所が忽ち二萬人を得られたといふので郷名となつた事傳へられて居る。或は採鑛の邇磨部の地かも知れない。村内に上二万・下二万の字がある。延喜十四年三善清行の上つた意見封事にも二萬郷の戸口の減じた事を記して居る。村社上二萬神社は應神天皇及玉依姫命を祀り元八幡神社と稱したのを明治二年今の社名に改めた。寺に眞言宗の金峯寺がある。二萬塚は前方後圓の大塚で矢形の古墳と共に地方での名墳である。殊に矢形の地に古墳が多く天狗山及小丸等には車塚があり、東谷には俗經塚といふシスト式の古墳がある。影守は景勝の地である。寶覺禪師(僧湛照、號東山)は此地の出身で東福寺第二世となり又萬壽寺の開山であり伏見上皇の尊信を蒙つた當時の高僧で正應四年寂した人である。それから敏耕子と號して文雅の名があつた木谷子光も此地の生れである。

岡田村は古の苑縣で應神天皇の朝に浦瀧別が封ぜられた地域で下道郡會能郷に屬し岡田と辻田と併せて今の岡田村としたが地名は何れも地勢上から附けたものである。此地は正保年中藩主伊東長教が川邊の地から此處に還り來つてより明治の初まで岡田藩一萬三百四十餘石の陣屋があつたものである。今の小學校の所に其居館があつた、現在の校舎中教務室玄關等は往時の儘であつて丸に折入の紋所及藩祖長實が大陣陣に用ひた燼形なごも存して何だか昔が偲れる。辻田の石手森に大國主命及少彦名命を祭る國司神社があつて昔から景勝の地とされて居る。又村社東蘭神社は猿田彦命・天照大神・倉稻魂命・穴戸武姫命・仲哀天

皇・水分神を祀り毛利輝元陣中守護として建立した所と傳へられ伊東氏又氏神として崇敬厚かつた。寺に森泉寺・千光寺等があり景勝の地に櫻井渡笠原野があり、大池は禁獵地として知られて居る。佐野元龍は岡田藩の儒官で佐野家は世々儒を以て伊東氏に仕へた。浦池九淵は岡田藩の近習より執政に進んだ好學の士である。此外工芸に勝れた荒木曲肱、俳人の片岡香雨、繪畫の狩山幽壑、易道の木村訥敏、儒學の荒木高養等がある。

蘭村は昔の曾能郷の本場で上古苑臣の祖浦瀧別の封地である。今市場及有井の二大字があるが市場は昔嵯峨野村といはれた地であり、有井には昔和田の井といふ名泉があつて今の地名となつたものである。田中の西蘭神社は品陀別命を祭る八幡社で岡田藩邸の地主神として伊東氏が尊崇した所である。其他村内に神社が甚だ多い。寺には八幡山寶生院を始め眞言宗の寺院が多く大日庵・安樂院・正蓮寺等があり、禪宗に報恩寺及瑞松院等がある。龍王山・天神山附近には古墳が多く嵯峨野に安倍清明の塚がある。傳へられ小松原小蒲川、堅石等の名所舊蹟がある。馬入道山城は市場にあつて三村家親の女を娶つた上野肥前守隆徳の居城址で隆徳が兒島の常山城に遷つた後は臣下の三宅左馬允・白神右京等が守つたが天正二年毛利勢に陥れられた。瑞松院の地は古城址で吉野朝の初備後の忠臣櫻山氏の分流櫻喜右衛門武定の據つた所である。此外喜村山にも古城址があつて元暦の頃土肥實平の據つた地と傳へられて居る仙石平左衛門定盛は藩祖伊東丹後守の重臣で嵯峨野に住して居た。又三宅所助は經濟の道に明るく、河田雲岫は繪畫を善くし、醫林玄白も名高く、安田確齋は經史に通じ岡田藩に仕へた人である。

箭田村は昔の八田郷で仁徳天皇の三十八年皇后とされた八田皇女の御子代部と思はれる。奈良時代の學者で稀代な出世をされた吉備眞備は此地の誕生であつて今も天神山に眞備の墳墓があり其所に仁孝天皇の弘化四年に領主伊東長寛の建立にかかる碑石がある、選文は藩主の子伊藤貫齋の手に成つたものである。阿知境は阿知使主に因み、土師谷は土師部の名残りであり、宿は古墳守戸の義である。直戸の白石神社は大己貴命天穗日命及少彦名命を祭り、八幡の八幡神社は仲哀・應神の二天皇及神功皇后を祭つて居る。矢

砂の大塚は大きな横穴石室があつて奥行が二丈八尺もある兩袖式の大古墳で石の巨大なるこゝ地方稀に見る所で吉備公に縁故あるものかといはれて居る、中に組合式の石棺三個を藏して居る。其發掘品は今吉備寺に保存されて居る。仲須賀の吉備寺は元眞藏寺と稱したのを元祿年中今の名に改めたもので奈良時代平地伽藍の名残である、今も其當時の礎石古瓦がある、山號を鏡林山といひ眞言宗の寺である。此他に法華寺・藥師寺・妙傳寺・滋源寺等がある。吉備公誕生の地は土師谷にあつて井細川は吉備公の初水である。又小田郡三谷村藤棚の地に下道氏の館址があり、東三成に眞備の父に因む神遊山國勝寺がある。松山藩主水谷氏の命を受けて玉島赤崎に壘田を拓いた大森元直及び勅兵衛様の御普請を以て名高く岡田藩に仕へて土木事業に功績のあつた守屋勘兵衛喜寛並に愛國の奇傑瀬尾是輔は何れも此地の人である。

吳妹村は昔の吳妹郷で應神天皇の頃阿知使主の伴ひ歸つた吳織に因む吳服部の地で今吳妹村に吳、穂井田村に服部がある。尾崎は吳尾崎の意味で此處に熊野神社があつて一に黒宮(吳の宮)といひ元、吳及服部の氏神であつたが今は尾崎のみの産土神となつた。明治四十五年、宮田社外十八社を合祀し現今伊弉諾命伊弉丹命・天照大神・春日大神・八幡大神外諸神を祭つて居る。妹の郷社穴戸山神社は日本武尊の妃であつた穴戸武甕命を祀つてある下道郡五社の一で、社傳に戰國時代諏訪山城主の崇敬厚かつたが出雲懸合城主が西鷲峯山に陣した時社殿を火き爾來荒廢に歸したが後岡田藩主伊東長寛が社殿を再興して今日に及んで居るに記してあるが今は村内の無格社を合祀して祭神を加へて居る。寺に眞言宗の蓮華寺及照寂院があり、日蓮宗に本華寺がある、鷲峯山の椿澤寺は眞言宗の名刹で聖德太子の創建弘法大師が修練した道場である。尾崎には石田氏の鳥ヶ嶽城址がある、承平天慶の亂に純友の軍が備前釜島から進み來つて備中守義直が戦死した地と傳へられ、妹の猿掛山は永祿年間莊爲資の居城であつたが毛利氏に奪はれ穂井田元清が之に居り其子秀元に至つて防長に移り廢城となつたものである。又尾崎には前方後圓の黒宮の大塚を始め古墳が多い。妹の地からは銅鐸が發掘された妹山・關ヶ鼻・蒼ヶ淵・長田山・琴彈岩・音高山、市場及宿跡一里塚と名所舊蹟が多い。石田の城主爲久は弓馬の達人であり、尾崎の荒木團藏及其門の俠士荒木文十

等は武術に勝れて居たので知られて居る。又文人荒木猿山も此地の人である。

穂井田村は昔の穂北の郷であつて小田川の岸險、保木田に因むもので今、陶・服部の二大字がある。陶は陶部、服部は吳妹の地と共に吳織の居た所である。村内に雄大な彌高山があつて猿掛に続き、眞谷川は小田川に注いで居る。陶は奈良時代の高僧行基菩薩が行基焼を民に教へた地と傳へられ、此處に陶神社がある。祭神は稻田媛命・素戔鳴命外敷神である。又服部に八幡神社があつて應神天皇・仲哀天皇・神功皇后市杵島姫命を祀つて居る。陶に陶山城があり、又太平記に記す陶山藤三は此地の産と傳へられて居る。彌高山は名勝の地として昔から人に知られ詩歌に謳はれて居る。岡田藩祖伊東長實は元和元年備中に所領を賜はり最初此穂井田の地に入部した。

秦村は昔の秦原の郷の地で上古の下道氏祖稻速別の封ぜられた川島縣の一部分である。字寺籠の地に川島山興禪寺があり其境内に奈良時代平地佛教の名残りである秦原寺の礎石古瓦等がある、以て舊城を偲ぶことが出来る。應神天皇の即位十四年に秦の始皇帝十二世の孫融通王（我が國で弓月の君といふ）が百二十七縣の民を連れて歸化し其子の普洞王は秦姓を賜はつて拓地殖民養蠶織に從事したが、此歸化民が吉備三國に分置され、それが此高梁川流域の所謂秦原の地で農耕に従事して神代以來加ふるに吉備津彦命西征後皇化の及んだ此地方に文化の最も進んだ秦氏が活動して兩々相俟つて吉備開發に力を盡したものである。八幡神社は仲哀天皇・應神天皇・神功皇后を祭祀するが、相殿の秦原神社は舊號を總堂宮といひ秦原一郷の諸神を祭り、又天津神社は元妙見宮といつて天御中主命を祭つてある。麻佐岐神社は雄大な麻佐岐山嶺にあつて靈石を靈代として大國主神を祭り延喜式内備中十八社の一で最古の宮である。又同じく式内社石疊神社は經津主命を祀り高梁川に臨む懸崖に鎮座し麻佐岐神社との關係最も妙に奉齋してある。後方の山地は所謂茶臼嶽の勝地である。又菅公を祀る天神社があり、福谷の地には比賣語曾神を祭る姫神社がある。荒平山城は天正の頃川西三郎左衛門之秀の居城であつた所、之秀は三村元親の親戚であつたので天正三年正月毛利勢は山田鬼身城へ押寄せると共に當城に迫つたが結局和解が成り立つて之秀は讚岐に向つた

秦の大塚は前方後圓式の古墳である。春雷學舎に教を垂れた儒者板野常太郎氏は此地の人である。

久代村は昔の釧代の郷であつて秦原に對して新本・山田・久代の新本川流域は山地部で、山田上は新本、山田下は山田と久代とになつたもので此地は櫛部・釧路即ち越蝦夷の來り土着したものである。又久代は九城とも記したが正木山麓には舊城址が多く、西に高丸、中に久代福田、東に神應、前に箕越又は狸山、勝負、砂山等が互列して古城址を偲ばしめる。藤原の地は允恭天皇の妃衣通姫の御名代部であり、土師谷は土師部の名残りである。横田神社は天穗日命を祀る備中十八社の一であつて人皇第四十代天武天皇の創祀された所と傳へられて居る。又月崎には攝社八幡宮がある。天福寺は天台宗で元相當な構をした寺であつたが天正の頃山本大行が僧兵を率ゐて毛利氏に抗したので兵燹の災禍を蒙つて今は昔の佛はない。其他松熊に神王山眞光寺、別所に鐵林山勝福寺等の寺院がある。浦越、八幡山の地には古墳が多く、長砂には美しい掘抜の石棺を出して居る。福田城は福田對馬守武倫の據守した所で又山口に高丸の城跡があり、箕越にも古城址がある。此地に醫を業とし傍ら詩文を修めて名のあつた大月靖庵及其子素白があり又大淺有隣・大槻圃叟等の人もあつた。維新後松山藩の老臣等即ち大石・熊田・鎌田・田淵の諸氏は相携へて此地に住み郷民の教化に當つたが、中にも鎌田玄溪は書に巧に漢籍に精しく、田淵松石は經史に通じて世に知られて居た。

山田村は昔の釧路郷の地で今の久代と共に新本川流域山地部に屬した地方である。山田神社は天正の頃穴戸安藝守が山城の加茂神社を勧請したもので祭神は瓊々杵命・木花開邪媛・神日本磐余彦命・五十鈴媛・別雷命である、明治四十三年他の諸社を合祀して一村一社とした。松木の地には塚が多く、寺に曹洞宗の華光寺及善福寺がある。華光寺は鬼身城主上田孫次郎實親の菩提所であり、善福寺に鎌倉時代の彫刻毘舍門天の立像がある。鬼身城は上古吉備冠者溫羅の分城として附けた名前で天正の頃之に據つた上田實親は松山城主三村元親の弟であつたので毛利氏の爲に攻め陥された、城は此後毛利輝元が臣穴戸安藝守隆家に賜ふて城代佐々部美作守が守つたが隆家の孫備前守元繼に至つて八萬石の領主として此城に居つたが關ヶ

原戦後廢城となつた。今も本丸跡及井其他が存して居る。實親の裔孫は都窪郡中島に居り明治の儒官中洲三島毅は其子孫である。此地に最近築造した著名な大正池がある。

新本村は昔の田上郷の地で新本川の南を田上の本庄、北を田上新庄と稱したが明治二十年に合併して新本村と改めた。殿砂・市場・觀世等の史的地名が多く殊に殿砂山の附近には圓丘塚が多い。土師谷は土師部命を祭り大永の頃鎮祭したものである。新庄の氏神は浪月の八幡神社で祭神は應神天皇外諸神を祭祀してあること免田の八幡神社と略々同じであつて創祀は永祿二年である。寺院に唐僧鑑眞和尚の創建にかかる眞言宗丸尾寺があり其他西明寺外三ヶ寺がある。市場の古城は長井越前守一虎の據つた所であり、馬頸城は荒木兵庫介の居た城址である。江戸時代の地理學者古川古松軒は此地の産であり、又幕吏となり治績のあつた小原東作は本庄の人であり、有名な義民四人衆がある。義民は徳川吉宗の頃岡田藩吏が村人の命を頼む村山刈取を嚴禁し遂に私慾の爲に動いて村民五十一名を召捕へたので村人達は八幡社に集合して其善處方法を議したが中に一身を抛つて此苦難を救はうと川村仁右衛門・森脇喜惣次・松森六藏・荒木甚右衛門等四人が江戸に在る伊東播磨守に直訴して斷罪されたものであるが然し村山の刈取は此人達の犠牲で許されることになつた。今も村民は毎年六月七日此人達の爲に義民祭及義民踊を催して居る。

池田村は昔の日羽郷の地で領主池田政孝の名に因んで池田村と名附けた。奈良時代の穴栗里狹野里の地で穴栗は鹿猪會ふの義で狩獵地の意であつて川入部の居住した所であり、狹野里は見延・横谷地方に當り、見延は歸化種三野部に因み、横谷は所謂横の谷で八重栗なぎの地名がある。池田神社は横谷の市井谷に鎮座し神功皇后・玉依姬命・吉備武彦命・紀州熊野神・大物主命を祭り大正三年に合祀され一村一社となつたものである。華表の近くに鸚鵡石があつて前中約言持豊の「言問はば此處より問へよ足曳の山彦ならぬ答をぞせん」の句が刻してある。豪溪は深造岩の花崗岩が横谷川の流に洗はれて出來たもので奇巖懸崖が續いて天に聳え、下に碧溪が岩根を掠めて山水共に麗はしく實に天下の勝景である。其中著名の奇峰に圭

峯・天柱峯・含子岩・雲梯峯等がある。天柱山は阿闍梨増信の開基にかかり今此地に兒島五流の分院がある。室町時代雪舟は井山に居て屢々此地を寫生し自ら號を備溪齋といふた。又文政年間備前の儒者武元登々峯は崖壁に天柱の二大文字を刻した。秋季此地に文人墨客が來て紅葉を賞するものが多い。穴栗に別處山正満寺があつて禪宗寶福寺末で檀徒が多い。赤木城は穴栗にあつて一に白毛城ともいひ赤木左衛門尉の據つた所である。見延の地は元見延燒の産地である。横谷に鎮西八郎爲朝の起したといふ鍋坂城があるが之は一に龍山城ともいひ、山は世に豪溪富士と稱せられる所である。又高馬にも古城址がある。龍頭瀧は飛瀑の見事なので知られて居る。致元は穴栗の人で平田房近の子であつたが僧となつて圓山曹源寺に入つて研修して遂に同寺の住職となつた。池田侯に愛せられて居たが後京都の妙心寺に移り茲に寂した高僧である。

大和村は昔の日羽郷の一部で通稱野山郷といふたが明治二十二年に北・組谷・西・宮地の各村を合併して大和村と稱した。北・西は位置の上から、組谷は地勢から、宮地は大和神社の所在地で夫々命名されたものである。大和神社は舊名を八幡神社といひ建久年間の創祀である、祭神は應神天皇外二十座を齋祀し明治四十二年村社三、無格社三十一を合祀して大和神社と改稱した。妙本寺は具足山と稱し世に西身延といはれて居る、第九十代後宇多天皇の弘安四年の開基で其開山は實に日像菩薩で大檀那伊達朝義の建立したものである。今本堂に安置する高祖大菩薩の像は大覺大僧正が日朗上人から譲り受けて鎌倉の松葉ヶ谷から脊負ふて來たものである、後日行上人以來百五十餘年間無住で諸堂は零落したが妙顯寺の具足上人が當山に入つてから再建して又隆昌に及んだ。日具は安藝嚴島の人で法華宗番神を創めた高僧である。堂塔殆んど草葺で宏壯然も古色蒼然たるものがある。境内の鎮守堂は桃山時代の建築様式で今特別保護建造物になつて居る。文永の頃入部した伊達彈正朝義の古城址は此妙本寺の前に在り、又戰國時代になつて伊達氏の裔である野山宮内少輔が據守した野山城址は同寺の西北方に在つて附近に大和田山・小和田山の古城址もある。又朝義の墓は字北にある。

日美村は昔の日羽郷の地で日羽及美袋の二大字から出来て居る。日羽は郷名に因み、美袋は美囊の譌で美奇義と讀み明治二十二年此二村を併せて其二村の兩頭文字を取つて日美村とした。日羽の片山に八幡神社がある祭神は應神天皇・仲哀天皇・神功皇后の御三方である。上古は吉備津彦命の神荒魂即ち御崎神社を奉祀して居たが人皇第二十一代雄略天皇の御代に八幡大神を勧請して相殿に奉祀して遂に今の祭神となつた。又美袋の馬場に八幡神社があつて應神天皇・仲哀天皇・神功皇后を奉祀し相殿に大吉備津彦命が祀つてある。美袋の大渡城は三村民部丞忠秀の據守した所であるが天正三年正月毛利勢の爲に陥れられた。又日羽の片山の地にも古城址がある。普門寺は眞言宗で日羽にあり、貞和中貝原縫殿亮安宗の中興した安樂寺がある、又眞言宗榮福寺は美袋にある。地藏瀧・獅子岩等は景勝の地として知られて居る。

下倉村は昔の水内郷の地であつて高梁川に接して山地が多く其八割五分を占めて居る。高梁藩の下の倉庫所在地で之毛倉と稱し今、志多倉村といふ。小學校は山村の下倉から倉山小學といふ。村内に草田・梶・槻下村・寺畑・高月・鹽田・木戸・松尾等の地名があつて大概其地勢を察し得られる。下村の八幡神社は仲哀天皇・神功皇后・應神天皇及猿田彦命を祭り、草田の八幡神社は文祿二年男山八幡宮を勧請したもので應神天皇及御兩親の神御三方を祭つてある。又槻には能勢神社がある。寺に眞言宗の林松寺外高岸寺、禪宗の歡喜寺等がある。此地の古城址は筒井順齋の據守した所であつて、草田の大師堂は僧空海巡歴の蹟と傳へられ其他常山・銚子嶽・大塚等の史蹟名勝の地がある。

水内村は昔の所謂水内郷の地であつて高梁川に因む村名である。或は仁徳天皇の朝笠臣の祖縣守の斬つた虬に依つて附けた村名といふが少し上流過ぎる感がある。村内に山の蔭さいふ意味の影があり、其中間に中尾があり、又原の地があり、何れも地勢に因む字名である。影に長御崎神社があつて猿田彦命及譽田別命を祀つて居る。又原の八幡神社は所謂仲哀天皇・應神天皇・神功皇后の三神を祭つてある。華藏院は延元元年華藏院宮が水内郷へ御下向あつたに因み、稻寶寺は臨濟宗の寺であり、寶珠寺は眞言宗の寺である。山本の古城は三村元親の臣山本左馬介兼一の在城した地で、又要害山にも古城址がある。

富山村は昔の日羽郷に屬し今、宇山・種井・延原・橋・高間の字がある。宇山に六社權現即ち大山祇神外五柱を祭る橘神社がある。種井に紀伊の熊野權現へ熊野三社は素戔鳴尊を祀る熊野坐神社「本宮」速玉之男命を祭る熊野速玉神社「新宮」素戔鳴尊速玉命及夫須美命を祭る熊野夫須美神社「那智宮」のことであるを勧請した熊野神社があり、又應神天皇を祭る八幡神社があり、猿田彦命を祭る大宰神社もある。延原には吉備武彦命を祭る御前神社があり、橋には大山祇命を祭る大山祇神社がある。又宇山に常福寺がある。高間に雞足山があつて傳説の地である。

阿曾村は昔の阿宗郷の地で阿蘇部は吉備津神又は應神天皇の遊幸の地ともいはれ之に東阿曾及西阿曾があり、奥坂は地勢に因み、黒尾は吳服部の地であり、久米は久米部の民である。奥坂の八幡神社は今阿宗神社といひ應神天皇・神功皇后・玉依姫命を祭り、久米の御崎神社は吉備武彦命を祭り、黒尾の地に鎮座の黒尾神社は大物主命及大山咋命を祭神とし、又宮原に金刀比羅神社があり、黒尾に水巻神社があつて嚴島姫命を祭つてある。寺に瑞光寺跡・能満寺・金福院・正眼寺・延壽院・持泉寺等がある。能満寺は今黒尾にあるが山號を仁井山と稱して新山にあつたものである。新山は平安時代山上伽藍の地で元二十有餘の精舎があつた所で今も總門址寺跡なきが窺はれ、此地に在る鬼の釜は當時使用した巨鍋の一である。鬼城は吉備冠者温羅の居城であるが此温羅は韓土から歸化した彼の地の王族と傳へられ岩屋山の地に籠つて萬民を苦しめたので大吉備津彦命に討滅された賊魁である。血吸川は温羅に關する傳説の名であり、岩屋の地にも隨分言傳へが残り居る。岩屋寺は元此地にあつた五ヶ寺の一で孝徳天皇の頃善通大師の開山といふ事である。金福院・延壽院も矢張り岩屋にあつたものである。奥坂の穴觀音は古墳の石室である。經山城は中島大炊介元行の據つた所であつて今其裔孫は總社町の小寺にある。城山は一に鳥越山といひ鳥越氏の居城址であつて古墳がある。阿曾の地は上古から鑛物の業に秀でて阿曾釜の名は古くから天下に知られて居る。天井川は上流地の土砂を堆積して現勢に及んだもので昔は此川を挾んで双方から民家を望み得られたといふことである。今も天井川の西に窪川といふ地名が残つて居るが往昔の形勢を知るに足るものがある。

る。

足守町は昔の葉田莊足守郷の地で應神天皇が行幸された葉田葦森宮は上足守の深茂に在つて今は地名も足守と記し昔の葉田は上土田・下土田の字名にして残り上古秦氏農耕の地である事を物語つて居る。此處は木下氏二万五千石の陣屋の在つた所で今其舊邸の一部に公民學校があり、庭園は近水公園となつて居る。下足守宮山の八幡神社は應神天皇・吉備兄媛外諸神を合祀してある。應神天皇は其二十二年に小豆島から船で皇妃兄媛の郷里である此地に行幸されて行宮に驛を駐めさせ給ふこと數月に及んだ、其時兄媛の兄御友別は一族子弟と共に厚く天皇を饗した、後天皇が都で崩ぜられた時御友別の子仲津彦が其聖徳を追慕して其行宮跡に御靈を奉齋したのが即ち葉田葦森宮であつて神宮には仲津彦の裔である賀陽氏が奉仕して足利氏の末年にまで及んだ、後木下氏茲に治して尊敬厚く今日に至つたものであるが今の境内は上古のものと位置を異にして居る。猶御友別は稚武吉備津彦命の裔孫であるが吉備氏の本宗は此時代中山の地から此地に遷り來つて居たもので御友別の館は深茂大神溪の地にあつた。足守の地に寺院多く、山上伽藍の龍王山東漸寺・法燭山守福寺を始め木下家菩提所法雲山大光寺、其他東光寺・三仙寺・乘典寺・田上寺・彌勒院・慈尊院・法源寺・正覺寺・日光院等がある。龍王山は景勝の地で秋月を以て名高く葵丘八景の一である。篝山は豊太閣陣地の遺址であり、鼓山城は賀陽良藤の居城址、清水山城は岡剛介の居城址、上土田藤澤城は山縣三郎兵衛の城址である。又天正の頃羽柴秀吉に抗して破られた乃美少輔元信の宮路山城、林三郎左衛門重真の冠山城等の跡もある。洋醫學研究者緒方洪庵は此地の人であり、連島寶島寺に住した名僧寂嚴、畫家の岩田北岳、勤王家の津田馬之介、何れも足守の人である。又弓術に秀でた吉田自樂軒、學識該博殊に史傳に明るく吉備國史を編んだ小早川秀雄も此地の人である。(秀雄の本姓は吉田氏、出でて土肥氏を繼ぎ更に小早川秀秋の後を冒して自らの名とした)又僧環中は津山の本源寺に住した高僧で彼も亦足守の産である、環中は篤學の人で一切經の如きも數回讀破したといふことである。それから藩の儒者に松浦默があり、砲術家に萩野傳之進があつた。又木下藩主にも文武の道に秀でた人が多く殊に豊太閣縁故

の家であるから秀吉の辭世の句を始め、政所使用琴又は風呂等珍重な家寶を多く傳へて居る。

大井村は昔の大井郷の地で鍛冶山下葉田の大堰から起つた地名であつて、粟井は間堰の意である。郷社大井神社は百田大兄命・應神天皇其他諸神を合祀してある。百田大兄命の女は吉備津彦命の妃、百田弓矢大井媛命であつて今も地名に百田及び弓矢等がある、永祿九年領主金川城主松田元隆は法華宗に歸依して佛教凝りであつた爲め一時巖尾滿願寺の法主をして八幡大菩薩の佛体を鎮座せしめて之が法務を見させたので當時の神官は之を慨いて自及した位であるが領主の威光で遂に神体を佛体とした之が滿願寺にある舊八幡社の起因である。後又舊に復して今の大井神社となつた。清泰院・四恩寺は平安時代の創建の古刹で中に大觀音を安置して居り如意寺法昌寺は粟井にある法華宗寺院で此外に東林寺・眞如寺・多聞寺等の寺がある。粟井の堅石城は土師氏の據守した所で、大井の鍛冶山城は一時福武對馬守が之を預つたが後、備前宇喜多氏の臣延原土佐守喜光が之に居たもので足守の東光寺は此喜光の菩提所である。浮田栢尾には共に硫黄泉を湧出して居る、冷泉ではあるが近時浴客が多い。大塚には岡丘の古墳がある。

日近村は昔の大井郷の地で日近とは土師部の轉じたものである。東境御津郡と接する彌高山には妙見社を祭つてあつて兒島灣・岡山市を一時に蒐め眺望がよい。杉谷に岩山神社があつて建日方別命及大山祇命を齋き祭つて居る。此村人は大部分が鼓神社及大井神社の氏子である。寺院に報恩大師草創の古道場で山上伽藍の名残りである天台宗の醫王山藥師院上願寺及末寺安養寺があり、又和田には日蓮宗の佛生山善修寺がある。上願寺の地には元十二坊もあつたもので往時隨分盛んであつた。救世山安養寺は榮西禪師が十一才の頃、靜心和尙に師事して佛門に入つた所であつて、今も村人は榮西祭り榮西踊をして偉人の昔を偲んで居る。吉は自ら一區劃を成し、田狹は吉備田狹に因む地で二女塚がある。又日近の古城址は日近修理進の據つた所である。

岩田村も亦昔の大井郷の地で山上・石妻・上高田の字名があつて何れも地勢に因む地名である。縣社二宮鼓神社は上高田に在つて仁壽元年の創祀である。元日本武尊の御子で穴戸武媛命所生の武鼓王を祭つた様



であるが、中世から高田媛命・吉備津彦命・樂々森彦命・吉備武彦命・遺靈彦命を奉齋して二宮五社大明神といつた二宮は吉備津一宮に對するもので遺靈彦命は大古備津彦命の後神で其右軍の將として吉備冠者なきを討つて大功のあつた武神で、樂々森彦命は高田村附近の縣主で其女高田媛は吉備津彦命の妃である故に今も鼓神社と大井神社とは秋祭の時に弓矢礮に會して情愴を温むる神事が残つて居る。石妻に宇賀之御魂猿田彦を祀る稻荷神社があり、山上に菅公を祀る天神社がある。上高田の忍城は伊賀氏の居城址であり、十二本木に昔權現宮を祭つた跡がある。三寶院は眞言宗の寺である。此村は明治四十二年模範村として内務省から選賞され昭和五年大演習の際は長くも勅使差遣の光榮に浴した。

福谷村は昔の大井郷の中で苔山・庄田・眞星・掛畑・河原・東山内・間倉・西山内・等の字名がある。西山内高尾に天穗日命外諸神を祭る天神社があり、東山内に武神武甕槌命・經津主命外諸神を祭る懸幡神社がある。懸幡神社は延長年間の創祀で神武天皇御東征の砌り二武神に下し給はつた御幡に因むと傳へられて居る眞星の星神社は白鳳年中の創建で祭神は稜威之雄走命・伊弉諾命・素戔鳴命である。昔隕石の墜ち來つた事に因むもので、地名に眞星があり、神社に星神様がある譯である。間倉は昔から牛蒡の産地で知られ、河原の黒谷池は昭和時の大貯水池で名高い。又鷹尾山は昔から景勝の地として謳はれて居る。寺に天台宗の松井寺・法明寺・日蓮宗の妙國寺・妙本寺・本乘寺、眞言宗の養東院がある。本陣山は毛利伊豫守が忍城主の浮田信濃守を攻めるに當つて據つた所である。龜石城は土師刑部少輔の居城址で今、大殿屋敷及馬術練習場なさが残つて居る。苔山の地から明治の頃司法官として活躍した荒木精一郎が出た。元吉備郡菅谷村は昔の多氣郷の地で今は御津郡都賀村に併せられた。

### 第三篇 國史科と郷土

#### 郷土の史蹟及び史實

#### 高等女學校 教授要目

神代  
皇基の遼遠

伊弉諾尊・伊弉丹尊の國土修理固成の條

吉備の兒島を生む(神代記、古事記)

次生吉備子洲(由是始起大八洲之號焉(日本書紀))

(古事記には兒島を大八洲に數へず)

諸冊二神大八洲を生み給ひ還坐の時吉備兒島(又名建日方別)を生み次に小豆島(又名大野手比賣命)を生み給ふ(舊事記)

吉備の諸民族

一、石器時代の民族。二、大山祇派の民族。三、出雲派の民族四、高千穂派の民族。五、歸化系民族。石上神社

赤磐郡布都美村に在り。素盞鳴命斷蛇之劍今在吉備神部許也(日本書紀)

吉備の高島

廣島縣沼隈郡神島村、小田郡神島外村高島、上道郡高島村、兒島郡甲浦村等で諸説がある。

(往昔の吉備の地は所謂吉備穴海の地方で淺海多島の地域であつたらしく然も神武天皇數年間假居し給ふた事とて高島の行宮何れが眞で何れが偽なりとも言ふを得ざるに共にも又何處も多少の因縁はあつたものか)

乙卯春三月甲寅朔己未徒入吉備國起行宮以居之是曰高島宮積三年間(日本書紀)

崇神天皇

垂仁天皇

於吉備之高嶋宮八年坐(古事記)  
(第一、高千穂宮——第二、高嶋宮——第三、概原宮)  
山陽道の開修

綏靖天皇三十三年五月山陽道を開修し給ふた蓋し道路開修の最も古きもので山陽道が上代如何に重要な位置にありしかを知るこゝが出来る。(交通史)

吉備臣の祖

孝靈天皇妃倭國香媛生彦五十狹芹彦命(大吉備津彦命)——亦妃緬某弟生彦狹島命、稚武彦命、弟稚武彦命の是吉備臣之始祖也(孝靈紀)

伊勢の宮

(崇神天皇は敬神崇祖の念厚き天皇で御鏡劔を等縫邑に遷し皇女豊鍬入姫命をして奉仕せしめ給ひ又神地神戸を定めさせられ特に祭祀に御意を注がせ給ふた)

岡山市小畑町にあり。「同帝(崇神)の五十四年丁丑に吉備の國に遷り給ひこゝに四年御鎮座(倭姫世紀)」とあり。「外宮出石郷にあり(土肥經平)」。「伊勢内外宮と同神(吉備温故)」等の記録あれば伊勢神宮が伊勢に鎮座します。前に岡山に一時まませしか、備中風土記に「賀夜郡伊勢御社東有河名宮瀨川河西者吉備建日子命之宮造」とあり。

四道將軍

大吉備津彦命は御弟稚武彦命と共に山陽道を經略し給ふた。

崇神天皇十年秋七月丙戌朔己酉詔群卿曰。導民之本、在於教化——吉備津彦造西道、(日本書紀)  
(大吉備津日子命與若建吉備津日子命二柱相副而於針間氷河之前居忌益、而針間爲道口者言)向和吉備國也故大吉備津彦命者吉備上道臣之祖也次若日子建吉備津日子命者吉備下道臣等臣祖(古事記)

大彦命(北陸)——武渟川別命(東海)

孝靈天皇

孝元天皇

開化天皇

崇神天皇——垂仁天皇

吉備津彦命(西道)

彦坐王——道主命(丹波)

官幣中社吉備津神社(吉備津造り)

(吉備の人は此宮を大氏神と崇めまつる)

國幣小社吉備津彦神社

(吉備中山御陵)

温羅は吉備冠者と稱して阿曾村鬼城に居を構へて命に抗したが誅せられた(御釜殿の鳴動) (新山鬼の釜は山上伽藍仁井山時代のものか)

縣社二宮鼓神社、郷社大井神社、矢喰宮、鯉喰神社、鶴成神社。

弓弭調、手末調

男子の弓を以て取った鹿猪なきの肉又は皮を調とし、女子の手の先で作った麻布なきを朝廷へ奉るこゝで崇神天皇の頃定められた。

シトリ(倭文)麻楮等にて衣服を作る久米郡倭文西村及び倭文東村はその残か。

古墳

垂仁天皇御陵(大和菅原伏見東陵)

加茂造山、三須作山、高松佐古田等の古墳は前方後圓式の巨大なるもので大和地方の大古墳に譲らぬものがある。(三須の作山は稚武彦陵と傳へられて居る)其他古墳は縣下各地に散在す。

「三十二年秋七月——天皇(垂仁)詔群卿——野見宿彌進曰——則使者喚——上出雲國之土部壹佰人——自領——土部等取埴以造——作人馬各種々物形——獻——天皇——曰——自今以後——以此土物——更——易生人(書紀)」  
矢田大塚、三須編蝠塚(牟佐大塚)

吉備氏の外戚

稚武彦命の女播磨稻日太郎媛は景行天皇の妃となりて大碓命・小碓命を生まれ給ふたが小碓命は即ち日本武尊である。それから稚武彦命の曾孫女穴戸武媛は日本武尊の妃となりて外戚となりて更には大吉備津彦命の子孫が皇室に姻戚關係を加へ後武内氏が宿禰から信任を蒙り裔孫は大いに榮えた。

吉備武彦

吉備氏の族日本武命の西征に従ひ歸途穴ノ渡の賊を平定した。「從海路還倭到吉備以渡穴ノ海其處有惡神則殺之(日本書紀)」又吉備武彦は尊の東征にも大伴武日と共に従ふ。

御名代部

武部

日本武命の御名を永遠に記念せんが爲めに建部を定め給ふた。「因欲録功名即定武部」也是護天皇踐祚四十三年焉(日本書紀)

(御津郡、建部村上建部村、都賀村竹部「元吉備郡菅谷村」上房郡竹莊、眞庭郡美甘村)

八田部

仁德天皇の皇后八田若郎女の御名代部である。「爲八田若郎女之御名代定八田部也(古事記)」

(吉備郡總社町は舊名八田部、箭田村久代村矢田部)

葛城部

仁德天皇の皇后磐之媛の御名代部であつて皇后は葛城眞津彦の女である。

(赤磐郡葛城村)

刑部

允恭天皇の皇后忍坂大中媛の御名代部である。

三韓任那及三國  
神功皇后  
文物の傳來

鴨別命  
弟彦王

御友別の弟で神功皇后の命で其御征韓の時熊襲征伐の任に當つた。

(吉備郡總社町刑部、阿哲郡刑部町)

輕部

允恭天皇の皇子木梨輕太子の御名代部である。「定賜天下之八十友緒氏姓、也又爲木利之輕太子御名代定輕部爲太后御名代定刑部爲太后之弟田井比賣御名代定河部也(古事記)」

(都窪郡輕部、淺口郡六條院村輕部)

眞加部

眞加部は白髮部の事で清寧天皇即ち白髮皇子の御子代部であるが後、光仁天皇の御諱白壁王を避けて眞壁と改めた。

(都窪郡常盤村眞壁、勝田郡勝田村眞壁)

岡山神社(岡山市) 穴戸山神社(吉備郡)

國造縣主

仲哀天皇の御代制定せられたものに

國造 太泊(邑久郡) 上ツ道(上道郡) 三野(御津郡) 加夜(吉備郡) 下道(吉備郡)

此の外國造本紀には尙あるも省く。

應神天皇の御代制定せられたものに

縣主 川島(淺口郡) 上道(上道郡) 苑(吉備郡) 織部(吉備郡)

その後石无縣(赤磐和氣)も制定せられた。その他省略。

後月郡には縣主村あり。

垂仁天皇の皇子鐸石別命から出て其三世の孫である。實に和氣清麻呂十二世の祖であつて神功皇后の征韓に従ふて功があり又其凱旋に當つて應神天皇の異母兄忍熊皇子の叛を平けて之を播磨備前の境である和氣關に誅した弟彦王は功を以て藤野縣を賜はつて土着した(天孫降臨族の吉備の地に繁衍した第一は大吉備津彦命の一族の土着であつて第二は此弟彦王の土着による和氣氏の繁衍である)

弟彦王以從軍功、封藤野縣、因家焉今分爲美作備前兩國也(後紀)  
又、弟彦王太平後錄、從駕之勳、酬以封地、仍被賜吉備磐梨縣、始家之焉、寶龜五年改賜和氣朝臣姓(姓氏錄)

和氣關

三石村大字三石宿の西に關川と云ふ細流あり古の和氣の關と云ふは此のあたりにや(備前國誌)「車駕還都于時忍熊別王於針間吉備界造關防之所謂和氣關是也(姓氏錄)」

二子

都窪郡庄村二子は神功皇后凱旋皇子御二歳に成らせ給ふに因むと傳ふ。

馬飼

笠岡の山一つ東にあり皇后降服せるものを殺すは不祥なりとてつれかへり馬飼部とす。「三月壬申朔皇后選吉日一人齋宮」然後遣吉備臣祖鴨別令擊熊襲國「冬十月己亥朔辛丑從和珥津發一人自降服殺之不詳乃解其縛爲飼部(日本書紀)」「國王(新羅)畏惶奏言自今以後隨天皇命而爲御馬甘。」(古事記)

舟木山洞松寺

三谷村にあり神功皇后の征韓に當り此の山の木で軍船を作り給ふた云ふ又安德天皇屋島におはしました時軍船を作り給ふたとも云ふ。春の湊

上道郡平井村湊 神功皇后征西の歸途寄泊し給ふた處であるといふ後池田氏湊と略稱せしめた。

阿知使主

淺口郡西阿知に其墓と稱するものがある。

(倉敷市阿知町、邑久郡大宮村上阿知下阿知)

吳織

應神天皇は阿直使主及其子都加使主を吳に遣して縫工女を求めしめられた。又雄略天皇支那より吳織をめし給ふた。吉備郡吳妹村と穂井田村服部とはもと一ヶ村(倉敷市佐藤氏藏瓦版参照)なりしを兩分して吳妹村と服部にした。又阿曾村黒尾は服部村と共に吳織の地である。

(邑久郡行幸村服部)

「遣阿知使主都加使主於吳令求縫工女——吳王於此與工女兒媛弟媛吳織穴織四婦女——阿知使主等自吳至築紫——是女人等之後吳衣縫蚊屋衣縫是也(日本書紀)」

錦織部

秦氏即ち融通王弓月君の率ゐた一族が此吉備三國に分置された名残であつて之等歸化した秦漢人が土着して養蠶絹織の業に従事した所。

(都窪郡山手村西郡、久米郡三保村錦織、上道郡蟠多村、又、吉備郡秦村、葉田莊「足守今上土田、下土田」)

歸化氏族

韓土と交通し出してから支那人韓人の我國へ歸化するものが多かつたが之等の氏族を神別や皇別に對して善別といつた。そして此歸化民は文化の最も進んだ所謂賢人達であつて或は朝廷に仕へて文筆の事を司り、或は地方に於て拓殖民の業に携つた。秦始皇帝の血を受けた孝武王の後裔功滿王が仲哀天皇の八年に歸化した其子の弓月君が應神天皇の

十四年に百二十七縣の民を率ゐて歸化した之が秦氏で養蠶織物をなしたのである。弓月君の子普洞王は秦姓を加賜されたが更に雄略天皇の時秦酒公は太秦の姓を賜はつた（京都には太秦の地名及蠶の社がある）惟宗・朝原・河勝・原・宗は此後裔である。漢高祖劉邦の孫鬱王の後裔である王狗の孫王仁が來朝して學問を傳へたが之は應神天皇の十六年である。子孫西文氏として河内に住んで朝廷の記録を司つて居た淨野・武生・櫻野・栗柄・古志の族は此後である。

東漢靈帝の子延王の孫である阿知使主子都加使主は共に應神天皇の二十年に七姓十七縣の人を連れて歸化して文筆を司つて東文氏といふた、漢直の姓であつて裔孫に坂上・大藏・内藏・調・山口・檜原・檜前・櫻井・平田・池邊・長尾・林・井上・忍坂等の諸氏がある。韓人には百濟の卓素（鍛冶屋）西素（吳服職工）須々許理仁香（酒造家）吳服部、漢服部があつて服部氏は此裔である。

足守宮及吉備氏の裔

應神天皇の頃は既に吉備中山の地から其宗家は足守大神溪の地に移つて居た。吉備郡足守町「二十二年夏四月兄媛自大津發船。秋九月辛巳朔丙戌天皇狩淡路島自淡路轉以幸吉備遊于小豆島庚寅又移居於葉田葦守宮（日本書紀）」乃自其嶋轉而幸行吉備國「於是爲袁大御羹」（古事記）移居於葉田葦守宮時御友別參赴之則以其兄弟子孫爲膳夫而奉饗焉天皇於是看御友別謹惶侍奉之狀而有悅情因以割吉備國封其子等也則分川島縣封長子稻連別是下道臣之始祖也次以上道縣封中子仲彦是上道臣香屋臣之始祖也次以三野縣封弟彦是三野臣之始祖也復以波區藝縣封御友別弟鴨別是笠田之始也即以苑縣封兄浦凝別是苑丘之始祖也即以織部縣賜兄媛是以其子孫於今在子吉備國是其緣也（書紀應神紀）（足守八幡宮）

笠神社 應神山 笠岡

「笠朝臣孝靈天皇皇子稚武彥命之後也應神天皇巡幸吉備國登加佐米山之時令獵其山所得甚多天皇大悅賜名賀佐（姓氏錄）」

笠神社、笠岡等の名は笠ノ臣に因み應神山の名亦應神天皇の巡幸に因んだもの笠目山は笠ノ臣山の轉化したるものであらう。

吉備郡園村（苑縣） 川邊村（川島縣） 服部村（織部縣） 上道郡（上道縣） 御津郡（三野縣） 淺口郡鴨（方鴨別波區藝縣）



仁德天皇

難波津の歌

吉備行幸

難波津に咲く木の花冬こもり今を春邊に咲くや木の花（王仁）

仁德天皇妃吉備海部直之女黒日賣の里方を訪ねて、「聞看吉備海部直之女黒日賣其容姿端正喚上而使也——欲見淡路島而幸行之時坐淡路島遙望歌日——幸行吉備國爾黒日賣令大坐其國之山方地而獻大御飯云々。（古事記）」

（都窪郡中庄村黒崎に生れ山手村地頭片山に歿す。 都窪郡三須村黒媛塚）

笠臣祖縣守虬を斬る

吉備の人縣守勇敢で川島河に虬を斬つて縣守淵の名を残す又地名水内の郷あり。都窪郡中島、吉備郡水内か。

官幣中社吉備津神社は此御代創建(社傳)

御名代部、御子代部

上代に天皇皇后皇子に御子の在でぬ時、又は皇子の御功業を記念する時なきに後世に其名を遺すために或一部落に名を負はせて某部といつて皇室直轄の民とした。(例前出)

吉備田狭及樟媛

雄略天皇の時任那の國司となつた吉備武彦の裔で妻の稚媛宮中入の問題もあつて任那の地で叛いた。そうして新羅と連絡を取つたが朝廷では新羅が朝貢せぬので田狭の子弟君及吉備海部赤尾に詔して新羅を征伐させた。然るに田狭は密使を弟君に遣はして百濟及九州に據つて叛かせ様としたが弟君の妻樟媛は夫を殺して赤尾等と歸つた。

(吉備郡日近村田狭)

下道臣前津屋

日本紀に吉備氏總領下道前津屋不臣を念ふ事を載す。

(兎に角、吉備氏之より衰へた)

欽明天皇十六年吉備五郡に白猪屯倉を置かれた。(美作大庭郡外四郡の地か)

同十七年兒島の屯倉を置かれた。(甲浦村大字郡の地か)

(蘇我稻目馬子父子が兩屯倉へ来たものである)

(屯倉とは上代皇室の御料地の一である屯田のある土地へ置いた御倉又は官舎)

特記すべき事項無し。

大陸との交通  
朝鮮半島の變遷

佛教の傳來

蘇我・物部二氏の争

聖德太子支那へ使節派遣

特記すべき事項なし。

大避神社(縣社)

播磨國赤穂郡坂越村にあつて秦河勝が皇極天皇三年九月入鹿の亂を避けて生島に來た其靈を祀つたと傳へられて居る(河勝は歸化人で山城國に住し聖德太子に仕へ守屋との戰に太子の御者となつた人又推古天皇の頃峰岡寺を建てた人)

部 民

部は伴又は品部ともいふ(品部また部曲といつて上古王事に務めるものの總稱で多くの部屬がある。各部に長があつて部下を統率して朝廷に仕へた。朝廷は之に姓氏を下賜された。姓は今日のものに異つて爵の如く株根を意味し家格の尊卑を分つ義で、氏は内の義で同一の祖先から出た事を意味し、例へば中臣、藤原は氏であつて臣、連、宿禰、は姓を示すものである。臣、連は帝京に在つて朝政を執るもの、伴造は在京のものに郡國に居るものにあつて何れも部曲の民を率ゐて其部長が朝廷に仕へる、此職官を總稱して八十伴緒といふ。伴緒は其名に負ふ職業に従事した品部の長である、八十は多くを意味し百官といふが如きもので其種類及び職掌は頗る多い。起原は既に神代に在つて初は特殊の職業に従事した團體を指す名稱で、例へば物部、忌部、鏡部、玉造部の様であつたが後には、あらゆる職業に亘つて特殊の人の爲に勞働する部、特殊の人の御名を傳へる爲に設けた部、特殊な人種を以て組織したる部等實に三百種に垂んさする多種類を生じた。而して中古初期の人民は多く部名を以て氏として居るから國民全部が遂に部民となつたといふてよい位である。

一、職業的(例 矢作部、鍛冶部、土師部、久米部、弓削部、犬養部等)

二、御名代御子代(例 武部、刑部、矢田部、輕部、白髮部等)

佛教の興隆  
美術工藝の進歩

蘇我氏の無道

大化の改新

三、豪族の氏名（例 蘇我部、大伴部、平群部、中臣部等）  
 四、異人種（例 百濟部、漢部、佐伯部、吳部等）  
 （吉備郡）阿曾村久米、庄村矢部、穗井田村陶、池田村実粟、箭田村土師谷、二万村。  
 （備前焼は一に伊部焼といひ忌部焼で元、齋瓮を焼いて地名となったもので日本最古の陶器である）  
 國 府  
 備前（上道郡高島村國府市場） 備中（吉備郡服部村金井戸國府） 美作（吉田郡西吉田村總社）  
 備前十二郡（御野、津高、赤坂、邑久、上道、兒島、久米、大庭、眞島、吉田、勝田、英田）  
 備中九郡（都宇、窪屋、淺口、小田、後月、下道、加夜、阿賀、哲多）  
 賀夜郡家  
 吉備郡服部村及總社町  
 （部曲、田莊は止められて公地公民となる）  
 宿 驛  
 阪長（三石） 和氣の渡（吉井川） 珂磤（可眞） 高月（西高月） 裳佐の渡（旭川） 津高（一宮） 津峴（山手） 川邊の渡（高梁川） 小田（矢掛） 後月（西江原）  
 （其多くは馬屋、驛家の地名を存す）  
 都窪郡山手村津峴、吉備郡川邊村  
 （津峴驛馬二十疋加茂山手服部總社、川邊驛馬二十疋神在岡田藪箭田）  
 軍 團  
 三野連團、加夜軍團、苦東軍團。  
 條里制  
 條里とは經緯、一里は方六町、其三十六分の一は一坪、一坪の十分の一は一段、一段は三百六十歩である

蝦夷の服屬  
朝鮮半島の變遷

奈良奠都  
華人及西南諸島  
の服屬

（班田收授の法行はれて條里制が布かれた）  
 足守、總社、西郡、神在、岡田、藪、箭田、吳妹の地方（横行平行式）  
 二上山兩山寺古城址  
 久米郡大坪加村に在り齊明天皇の頃朝鮮半島亂れ新羅は唐の力を借つて百濟を壓迫したので我が國は百濟を援けて利あらず白村江に敗れた次朝天智天皇の頃何さなく唐に備へる所があつて此城も築かれた。  
 兩山寺の西峯は屋島と遙に相對し晴朗の日には之を望み見ることが出来る。  
 築倭國高安城讀吉國屋島城對馬國金田城（書紀、天智天皇六年之條）  
 二萬郷  
 吉備郡二萬村「皇極（齊明）天皇六年大唐將軍蘇定方率新羅軍伐百濟一天皇一將出救兵一天皇下詔試徵此郷軍士一即得勝兵二萬人一曰二萬郷一（本朝文粹風土記補遺）」  
 然れども當時の制度より二萬人の壯丁を出せしか否かは信じ難い。  
 吉備三國  
 天武天皇の朝吉備を分つて備前備中備後の三ヶ國となし元明天皇の六年「夏四月一割備前國六郡一始置美作國（續日本書紀）」「和銅六年甲寅四月依備前守百濟南曲介堅身等解割備前六郡一始置美作國一（風土記）」  
 吉備眞備  
 吉備津彦命の裔孫で九世の祖が御友別で其子稻速別が吉備川島縣を賜はり子孫が此地方に繁衍した。天武天皇の頃下道朝臣の姓を賜はり眞備に至つて天平十三年吉備朝臣の姓を戴いた譯で父は下道國勝である。眞備は唐に留學して歸朝の後右大臣に昇つた人である。  
 小田郡三谷村下道氏館址及園勝寺。 吉備郡箭田村墳墓及誕生地。  
 國分寺

聖武天皇奈良

時代の佛教文物

都窪郡三須村上林、赤磐郡西高月村馬屋、勝田郡河邊村國分寺。

諸大寺領

大安寺領——御津郡大野村

興福寺領——岡山市鹿田

東大寺領——赤磐郡大田村

(大田村萬富驛附近は東大寺瓦窯址で俊乗坊重源が源頼朝の命を受けて東大寺大佛殿再興を勸進するに當つて建久四年五月備前國を造東大寺領に寄せ、それに使用する瓦の大部は此處に於て焼いて送つた)

平地伽藍

都窪郡 加茂の都宇寺、庄の矢部寺、三須の國分寺及尼寺

吉備郡 岡田の金剛寺、吳妹の八高寺及吳妹寺、箭田の吉備寺、秦の秦原寺、高松の櫛見寺、服部の門

満寺。

報恩大師

御津郡馬屋下村芳賀から出た高僧で山上佛教を提唱した人。

(大和の子鳥寺、備前四十八ヶ寺、上道郡西大寺、御津郡金山寺、都窪郡日差寺等)

和氣清麻呂及

廣虫

垂仁天皇の御子鐸石別命から出たもので其曾孫弟彦王磐梨縣を賜はり其十一世の孫清麻呂は舊姓を磐梨別公、後に藤野直人に改めた入で備前藤野に生れた。孝謙天皇に仕へて妖僧道鏡を排斥し我が尊き國体を擁護した。更に桓武天皇に事へて平安奠都を奏上し實に其功績著大なるものがあつた。姉廣虫も孝謙天皇に信愛せられ法均尼といふて貞順慈悲の心深い人であつた。

別格官弊社護王神社(京都市)  
縣社和氣神社(和氣郡藤野村)

(眞備と清麻呂は奈良時代郷土から出た二大賢臣である)

「太宰主神習宣阿曾磨希旨方媚事道鏡因矯八幡神教言令道鏡即皇位天下太平。道鏡聞之深喜自負、天皇召清麻呂於床下勅日昨夜夢八幡神使來云大神爲令奏、事諸尼法均、宜汝清麻呂相代而往聽彼神命(續日本紀三〇)」墓は赤磐郡豊田村松本にあり傍に小塔があつて法均尼の墓であるといふ。

吉備山利姫

稱徳天皇に仕へて尙藏從三位に上つた眞備の女か、正三位尙侍藤原百能に次いで官位高く從四位下法均の上に居た。

平安奠都

桓武天皇は延暦三年藤原種繼の議により乙訓郡長岡の地に造宮遷都の豫定であつたが撓らず即ち和氣清麻呂が之を憂ひて密かに奏したので葛野の地を都城に奠められ大いに工を起して新京を營み延暦十三年七月遷都あらせられた。

特記すべきこと無し。

山上伽藍

報恩大師の提唱

天台宗(最澄)比叡山延暦寺

眞言宗(空海)高野山金剛峯寺

(和氣郡熊山の戒壇)

吉備郡(阿曾の南山、大和の野山、高田の醫王山、足守の龍王山、福谷の烏帽子山)

都窪郡(庄の目指山、山手の福山)

平安奠都  
蝦夷の鎮定  
朝鮮島の變遷  
渤海の入貢  
佛教の新宗派



鹿田莊(藤原氏關白渡領)

藤原冬嗣弘仁四年南園堂を建て、佛事を行ひ備前國鹿田莊を其料に充てた、後之が關白殿下波領となつた。

(概して平安時代は藤原氏一門の繁榮期で長くも皇族の方々も雖も志を得難い時代であるので地方の人々の如き都に名を成すべきよしも無い)

藤原保則

清和天皇の貞觀八年備中權介に任じ前守朝野貞吉の苛政を改め寛政よく民を撫恤し政績大いに舉がり人民も亦悦服した、中にも阿賀、哲多地方は其仁政に浴して戸口榮え賦税は増して倍入するといふ有様で良吏の譽高く功を以て同十三年從五位上備中守に進み同十六年備前守に轉じ政道益々正しく教化大いに行はれ吏民等父母の如く仰いだ(元慶二年出羽權守仁和三年大宰大貳寛平三年左大辨尋で參議兼民部卿となり同七年歿したが何れの地に於ても治績見るべきものがあつて實に模範的牧民官であつた)大化改新より鎌倉時代初めまで備作の國司一千三百餘名中には良官明府もなか／＼あつた著名の人二三を擧げて見るこ、

淡海三船、坂上河田麻呂、文室綿麻呂、小野篁、良岑安世、百濟川成、和氣廣世、源難、藤原冬嗣、石川名足、源高明、菅原是善、在原行平、藤原保則、三善清行、藤原行成、藤原公任、藤原齊信、藤原佐理、藤原實資、藤原隆家、源隆國、大江匡房、藤原俊成。

天神社(文筆の神として全國到る所に奉祀す)

太宰府神社(祭神 菅原道眞)醍醐天皇の延喜五年創始

北野神社(祭神 菅原道眞)村上天皇の天徳三年奉祀

(右兩者は何れも官幣中社で天滿大自在天神と稱し朝野の崇敬が厚い——臣下にして官幣社に列するもの類例がない)

「弓矢の神として應神天皇を奉齋し文道の神として菅公を祀る誠に故なきにあらずと思はる」

(第二篇清音村八幡社参照)

美作菅家七流

元弘の亂に後醍醐天皇に屬して勤王の兵を起した有元、廣戸、福光、植月、原田、鷹取、江見の諸氏は所謂菅家一統で道眞の子高視から出たものである。

延喜式内社——(備中十八社)

(延喜式は書名で五十卷あつて朝廷年中の儀式、百官臨時の作法、其他各國の定例等を記したもので醍醐天皇の頃藤原時平が編輯し其薨後弟忠平が完成したもので、延喜は年號、式は諸官の事務章程を記したもの、又式内社とは延喜式神名帳に登録された神社で、式外社は國史には載せられても何等かの理由で式に洩れたもの、例へば石清水八幡、祇園社の如きもの)

窪屋郡(百射山神社、足高神社、菅生神社)

賀夜郡(古郡神社、野俣神社、鼓神社、吉備津神社、「名神大」)

下道郡(石覺神社、神社社、麻佐岐神社、横田神社、穴門山神社)

小田郡(在田神社、神島神社、鷓江神社)

後月郡(足次山神社)

英賀郡(比賣坂鐘乳穴神社、井戸鐘乳穴神社)

備前(吉備津彦神社)今國幣小社

一宮(備中(吉備津神社)今官幣中社)

美作(中山神社)今國幣中社

(縣下に今一つ國幣中社阿仁神社あり)

總社(備中分——國司の朔幣巡拜の便を圖り國內三百二十四社を合祀せしもの、今は中央正殿に大己貴

地方の情況  
承平天慶の亂

命須勢理媛命を祭り左右に神祇官八柱を配祀す

三善清行の封事  
延喜十四年文章博士の清行が意見封事十二箇條を奏上して時弊を痛論したが其中に備中國二萬郷の戸口が減じた事を記して居る。

釜島

兒島郡下津井町に在り藤原純友が伊豫日振島に據つて反し紀淑人に破られて此島に来て城砦を築いた。

鳥嶽

吉備郡吳妹村に在り石田の城である純友の軍押寄せ、備中守義直戦死す。

(平忠盛瀬戸内海を平定す)

巨勢金岡

皇別武内宿禰の裔孫で中納言巨勢野足の子である。畫家巨勢派の開祖で宇多天皇の命で清涼殿の東西の障子及紫宸殿の聖賢障子に畫いた金岡筆の御室仁和寺壁畫の馬は附近の田稻を嚙んだと傳へられて居る(上道郡金岡村に巨勢金岡の墓がある)

芦屋道満

安倍晴明の弟子眞備七世の孫。其の塚ミ稱せらるゝもの淺口郡金光町にあり(古の占見の郷)

阿倍晴明は右大臣阿倍御主人の後裔で父を益材といつた。有名な陰陽推算天文の大家である。大鏡に晴明が花山天皇の遜位を天文觀測で知つた事が面白く記してある。(吉備郡菟村嵯峨野に晴明の塚があると傳へられて居る)

(晴明、道満を備中七名人に數へて居るのもある)——(第二篇清音村参照)

安養寺の國寶(都窪郡菅生村淺原)

毘舍門天立像(木造)

平安時代の文物

吉祥天立像(木造)  
惠心僧都作阿彌陀如來  
上道郡平井村佛心寺にあり。  
聖觀音像  
吉備郡山田村善福寺に在り。  
特記すべき事項なし。

刀伊入寇

前九年の役  
後三年の役

後三條天皇

僧兵

主基田

後三條天皇治曆四年御即位式の主基田淺口郡富田村にあり(堰=河水=入=苗代水=)

悠紀主基は一に齊忌次基も書き天皇御即位式の時、御一代一度の大嘗祭に神饌とする稻を奉る、齊田の國は奈良時代方位に拘らず二國を選んで悠紀國主基國とせられたが平安時代には京の東を悠紀、西を主基の地方と定められ、更に後には其主基の地を丹波備中と交番にせられた。そして其度毎に主基地方風俗歌を奉る習しである。

○後一條天皇長和五年大嘗祭風俗歌

近江國甲賀郡、備中國下道郡、御屏風藤原行成書

川邊川 千年經て一たびすめる河邊川 君がいでますしるしなりけり

善滋爲政

吉備中山 動きなき君の御代かな眞金吹く 吉備の中山常盤かきわに

全

秋坂山 紅葉する秋葉の山は千代を我 まつに習ひてときもあらなん

全

(藤戸、深井、稻井、櫻井、石手森、長良、鼓山、板倉橋、いはや山、玉村の歌省略)

妹尾兼康

源平二氏の隆替  
平氏の滅亡

板倉の人で妹尾莊を食み壽永中平維盛に従ふて木曾義仲と安宅渡で戦つて捕虜となり義仲の命で倉光成氏に事へた、然るに成氏を備前三石に誘つて醉臥中に子宗康と之を殺した、義仲は大いに怒つて今井兼平に討たせた、兼康敗れて父子共に殺された。

(眞金村の墓、十二箇郷用水、井神社)  
(津高郡に平清盛に仕へて武名のあつた難波俊定、經遠、經房の三人があつて兼康と共に吉備の平家方である)

藤原成親の墓(吉備郡眞金村)

平家の専横を憎み討滅策を京都鹿ヶ谷に議したが事顯れて捕へられ難波經遠に押送されて攝津の大物浦から兒島郡下津井に着いて田之浦の民家に入つたが間もなく吉備郡眞金村の有木の別所に遷されて後遂に殺された。(成親は後白河法王の寵臣で權大納言であつた。子に成經がある)

關白屋敷

上道郡高島村湯迫にあり關白藤原基房が清盛の爲に配流せられた所である。基房は世に松殿といひ忠通の子で兄基實が薨じて代つて攝政氏長者となり尋いで太政大臣關白となつたが後白河法皇と謀つて平重盛の薨後遺封を收め、清盛の女婚で基實の子である基通の中納言を請ふたのを妨げなされたので治承三年大宰權帥に左遷されて備前に流されたが居るこゝ一年で赦されて歸京した。

水島の戦(壽永二年)

義仲平家の軍を追ふて水島に却つて大敗した。(現今の玉島町柏島の附近)

辛川の戦

御津郡一宮村にあつて水島戦に敗れた木曾義仲の軍を追撃して此處に戦ふた。

藤戸の渡

一谷戦の後、左馬頭平行盛兵二千を以て兒島の粒江城に居た源範頼の副將土肥實平は佐々木盛綱を率ゐる

源頼朝  
鎌倉幕府

て今の倉敷の東南笹無山附近に陣を取つたが盛綱は或夜浦人の案内で海峡の深淺をはかつて翌朝潮の引くのを待つて馬を躍らせて三町許りの海峡を押渡つて大勝した。(今は藤戸附近は陸続きである)

奈須餘市(那須與一宗高)の小菅城

宗高、屋島戦の軍功により備中荏原庄を賜はり西江原才見山に築いて小菅城といふた。末裔土着して那須氏を稱す。(那須宗隆字與一——備中繪原莊地頭職云々)(野史)

白雲皇帝の墓

久米郡鶴田にあつて一説に安徳天皇であるといふ。

守護地頭

諸國置守護莊園置地頭(大日本史)

守 護

備前(難波經遠、全經房) 備中(妹尾兼康) 美作(江見守信、豊田權頭)

地 頭(國領莊園の別なく設置された)

淺口郡鴨方町大字地頭は鴨方社の社領に地頭を置いた名残りか、

都窪郡山手村に地頭片山がある。

承久の亂

冷泉宮頼仁親王及覺仁法親王(共に後鳥羽天皇の皇子)

(兒島郡郷内村に配流され給ふた)

浄土宗—誕生地—源空

浄土宗の開祖源空がその弟子蓮生坊に命じ己が誕生地久米郡稻岡村に創建したもので自作の像を安置して居る。

禪宗臨濟派—榮西

鎌倉時代の文物

吉備郡真金村の人で支那より臨濟派を傳へた今其居宅址がある。又弟に良祐があつた。安養寺

都窪郡菅生村淺原にあり空海の開祖源頼朝が再興した藤原成親も受戒出家したといふ。市場

各地に市場の地名が存して居るが其起原は詳でない。其著名のものに岡山市二日市、上道郡に一日市、後月郡に七日市等があつて商業史上大切な所である。最明寺址

上道郡國府市場は最明寺入道行脚の途次滯留した所と傳へられて居る。吉備郡井山寶福寺三重塔婆は時頼の創建した所で今特別保護建造物になつて居る。

僧湛照(寶覺禪師) 吉備郡二萬村に生れ東山と號し東福寺第二世となつた人で伏見上皇の尊信を蒙つたが正應四年寂した。毘舍門天立像(木造)

吉備郡山田村善福寺にある。地像菩薩像及十王像(絹本着色)——國寶

吉備郡總社町井山寶福寺 鍛冶

古刀鍛冶として知られて居るのは赤磐郡太田村字鍛冶屋、全吉岡村(吉岡一文字) 邑久郡長船(長船流) 全行幸村(福岡一文字) 都窪郡菅生村(青江流)

(御番鍛冶——上番工) 瀬戸内海々賊衆

元寇役に河野通有殊勳を立てたが河野氏は饒速日命の後裔で越智玉澄の後であるが三島の巨族で言換へれば三島海賊衆の宗家であつて其下に十八家があつた。牛窓、日比、連島、神島、因島等に居を構へて

元高蒙 寇麗古 ミ

北條氏亡ぶ

建武中興 足利尊氏の反 楠正成、新田 義貞の勤王等

居たが中にも笠岡の古城山主は村上氏で共十八家の一である。高越山城

後月郡荏原村に在つて後宇多天皇の弘安中宇都宮貞綱之に據つて元寇の際中國の策源地であつた。(後花園天皇の頃伊勢氏の居城となり貞藤此處に居て長氏を生む、戰國争亂の世弱肉強食の範を示した伊勢新九郎長氏は此地に成長したのである。長氏は伊勢平氏で地名に因んで關氏を稱し又伊勢氏を稱へ

後伊豆相模に移つて北條氏を稱し入道して早雲といふた) 西身延妙本寺

吉備郡大和村に在つて弘安四年の創建である。北條高時の暗愚失政、北條氏亡ぶ。

天皇笠置行幸の時、攻め寄せし軍に陶山及小見山ある事を太平記に載して居るが之は甚だ遺憾であるが備中勢である。元弘三年村上義弘因島の青影城に據つて長門探題北條時直の東上を輛浦附近に遮斷した

菅家一統 元弘三年名和長年が義兵をあけるミ作州に於ける菅家一統が之に加はつた。(太平記卷七伯州船上合戦の事参照)

(美作菅家一族七流「有元氏外」前出)の有元佐光元弘三年大山に詣で後醍醐天皇伯耆還幸と承り急ぎ歸つて兄佐弘に告げ一族を率ゐて船上山に馳せ參じ優詔を拜した。四月進んで京都に至り賊將武田氏顯の軍に當り四條猪熊に奮戦して陣歿した。實に一門擧族二十餘人國難に殉じたものである——七忠臣、

有元佐弘、佐光、佐吉、福光佐長、植月重佐、原田佐秀、鷹取種佐) 院庄 作樂神社

津山市に在つて後醍醐天皇隱岐遷幸の時兒島高德が十字の詩を記し寂慮を慰め奉つた處で今縣社作樂神社があつて天皇及高德を奉祀す。

杉坂峠

英田郡江見村田原 兒島高德が後醍醐天皇の西に巡狩し給ふた時駕を迎へ奉らうとして舟坂山によつたが成らず更にこの峠に来て又及ばず恨を呑んで夜陰院ノ庄に至り櫻樹に題した、建武三年江田兵部大輔行義新田義貞の旨を奉じ美作の賊を討たうとした時この峠より向つた(太平記参照)  
兒島高德の苗字の地は兒島郡で元平家方であつたので佐々木高綱が兒島に入部して對岸の邑久郡豊原に遷つた(太平記)

熊山 (高德の本姓は三宅氏で備後三郎と稱し範長の子である)

和氣郡香登村に在り、延元の昔高德一族此地に據る、足利氏の軍來攻するも落ちなかつたが其後賊軍増援あるに及んで高德東に逃れ、新田氏の殿軍として播州阿彌陀寺に全滅した——山は山上佛教戒壇の在つた所。

陶山城

陶山義高、小見山次郎等北條高時に屬したが備後の勤王軍櫻山慈俊來り攻むるに及んで有田の籠山に敗死した。

福山城

延元々々五月新田氏の部將大江田氏經、足利直義の東上軍を防いで利あらず東に走り辛川方面に戦ふた(式部大輔氏經は超後大井田郷の人で經隆の子である、父經高は高時討伐の功あつた人である)  
飽浦信胤(佐々木信胤)

信胤は備前の人で右衛門尉美作守に歴任し延元四年兒島を以て吉野朝に歸順し備前及讃岐の間に活動して功を立て後村上天皇から其王事に盡したこゝに就て優詔を賜はつた。

僧 寂室(圓應大師)

眞庭郡の人、三十一歳の時支那に渡り歸つて衆生濟度に盡し貞治六年近江の永源寺に寂した。  
眞壁城

吉野朝廷

常盤村溝口に在り、藥師寺公義之に居り足利尊氏、直義不和の際一時參戰した。

多田頼貞墓

御津郡福濱村松壽寺に在り、吉野朝の爲に盡した人である。

安國寺

尊氏、夢想國師の法話を聞き悔悟の氣持が嵯峨の天龍寺となり更に全國六十六州に一寺を建立し敵味方の魂魄を弔ひ且つ國土安穩を祈るこゝになつたが之が安國寺である。

(備中安國寺は高梁町の頼久寺で開基は寂室和尚、後、上野頼久が永正年中再興した)  
大覺寺屋敷跡

御津郡伊島村津島にある、日蓮宗の大覺僧正中國布教の途次一時滞在した所で吉備に於ける日蓮宗起源の地である。

(岡山蓮昌寺の大曼荼羅——日像)

(和氣郡益原、御津郡辛川、都窪郡清背村の三題目石——妙實)

赤松氏山名氏

赤松氏は則村の功によつて播備作に勢力を有し、山名氏は時氏の勢力によつて因伯二丹美作に強く常に封疆上の争多く、やがて室町幕府末葉戰亂の因を醸すに至つた。

特記すべき事項無し。

赤松家

應仁の亂因に細川勝元が赤松家再興を企て、山名持豊と義父子の關係にありながら不和となつて遂に未曾有の大亂となつた(嘉吉の亂に赤松氏衰へ反對に山名氏が戰功を賞せられて榮えた)

備前の地は赤松氏及其重臣浦上氏を通じて概要細川系の勢力が優勢であり又山名方は伯耆備後方面に勢力あつて美作備中は兩勢力の地であつた。

小川御所の墓

關東管領  
應仁の亂

室町時代の佛  
教文物

赤磐郡小野田村澤原に在る、小川御所ミは足利義政の室日野富子の事である。富子は義尚の母で元京都一條の南小川に居所があつて義政の東山に退隱の後も此に居たが後戰亂を避けて澤原の地に來つて小川自性院に隠れたものであるミ傳へられて居る。

永樂錢

明の成祖永樂九年の鑄造錢で足利時代本邦に輸入され其質善良なる爲め永く使用された。

佛教

禪宗に京都五山領が此の地方にもあり井山寶福寺は開祖鈍庵が鎌倉時代の人であつたが其後室町時代に至つても碩徳が續いて現れ矢張り中國の大禪林たるを失はず、曹洞禪も舟木山洞松寺（小田郡横谷）が性讚によつて創められて盛んであり、日蓮宗も妙實、日具等が出て益々盛んになつた。

雪舟

小田雪舟は畫聖ミ稱へられた人で都窪郡三須村赤濱に生れ井山の寶福寺に僧となり好んで繪を描き後、京に上り支那に渡り聲名内外に高かつた人である。  
（井山寶福寺境内に雪舟の碑あり）

謠曲

室町時代に生れた當代を代表すべき文學の一種であつて猿樂能の詞曲である。大和春日神社に屬した猿樂の大夫觀阿彌（結崎清次）が義滿に認められて以來猿樂の能の發達に伴つて謠曲も發達した、謠曲に觀世、實生、金春、喜多、金剛の諸流派がある。

「謠曲『藤戸』は兒島郡藤戸の渡をうたつたもの」

連歌

三十一文字の歌を上下に分けて二人で唱歌するもので此時代特に盛んであつた。  
（花の下、僧宗祇の休石が笠岡に在る）

群雄割據

徹書記

備中七名人の一人小田郡神戸城主康清の子信清の出家して東福寺の書記ミなつたもので正徹ミいつた、詩文に巧であつた。

吉神津神社の社殿及隨神門等（國寶）

吉川八幡社（上房郡）——特別保護建造物

宮本武藏

英田郡讚甘村宮本の人、劍道の達人で二刀流を創めた。

戰國時代の備作

群雄の名を残したものに山名氏、赤松氏、浦上氏、尼子氏、松田氏等があつたが大體に於て東備は宇喜多氏によつて統一され、備中は三村氏によつて纏められ、やがて三村、宇喜多の二氏が相争ひ其結果宇喜多氏は三村氏の背後に居る藝備の勢力である毛利氏ミ合流して三村氏を滅ほし愈々毛利、宇喜多の二氏が境を接する様になつたが後に織田、毛利兩氏の間面白からぬ關係が重つて來るミ宇喜多氏は漸く織田氏ミ結ぶの形勢を示し遂に其勢力の衝突が高松城の水攻ミなつた譯である。

山名氏（清和源氏）——上野國新田郡山名郷——因幡鳥取城

赤松氏（村上源氏）——播磨國佐用郡赤松郷——播磨白旗城

浦上氏（蝦夷族）——播磨國揖保郡浦上郷——備前天神山城

宇喜多氏（本姓源氏カ）——備前國邑久郡豊村——備前乙子城

尼子氏（佐々木京極）——近江國犬上郡尼子郷——出雲富田城

三村氏（出自不詳）——信濃國狭江——備前松山城

毛利氏（桓武平氏）——相模國愛甲郡毛利庄——安藝吉田城

松田氏（藤原氏）——相模國足柄郡松田庄——備前金川城

明禪寺合戦

永祿七年三村家親久米郡興禪寺に宇喜多氏の刺客に斃れ、家親の子元親が永祿九年上道郡澤田の明禪寺城に宇喜多氏配下を攻めて之を占領した所が沼城に居た直家が大學して來り攻め大いに三村勢を破つた（備前軍記、作陽誌）

猿掛城

天文中莊爲資が居城して居たが、ついで上房郡齋田城主植木秀長の援を得て松山城主上野伊豆守を攻めて之を陥れ移つたので猿掛城には城代莊實近を置いた。之より爲資備中守と稱して威大いに振ふた。成羽城主三村家親は遂に莊爲資及其子高資と争ひ三村氏は毛利氏の後援を得、莊氏は尼子氏に屬して居た此時毛利氏中に立つて家親の長子元祐を爲資の養子として猿掛城に居らしめた、號して莊元祐又は穂井田元祐といふ、之より尼子氏の勢力備中に弱く毛利元就は之に反して斷然勢を得た後、松山城は三村氏の手に移り莊元祐は明善寺合戦に討死し、天正の頃三村元親は毛利氏に叛して滅され此城に毛利元就の子元清が居つて穂井田氏を稱し子秀元に至つて關ヶ原戦後西に移つた。

山田船ヶ迫城に莊實近の族三好權左衛門が居て矢掛小林神子山の城主武野宗圓を攻めた。

出雲尼子氏の臣、墓は川上郡落合村に在る。

八濱七本槍

宇喜多基家穂井田元清と戦ふた時の七勇士。

幸山城主石川源左衛門尉久式

山田鬼身城主上田近江守實近

經山城主中島大炊介元行（備中兵亂）

高松城主清水長左衛門宗治

黒田孝高

官兵衛と稱し如水と號す邑久那福岡の人、秀吉の播州征伐に従つて功があつて大名となつた黒田家の祖で九州博多を福岡といふは孝高が藩主となつたからである。

倭寇——海賊衆（連島——海賊大將軍三宅和泉守國秀 日比——四宮隱岐守、全主計頭）

種ヶ島（鐵砲）

戦術、築城法一變す。

明との交通  
高麗と朝鮮  
航羅巴人の來  
織田信長

高松城水攻（天正十年）

豊臣秀吉の奇計、清水宗治の死。

森蘭丸

津山城主森氏は其後裔（第一編参照）

大阪築城

豊太閤大阪築城に北木島の石材其他を運ぶ（萬成山の石材）

朝鮮征伐

宇喜多秀家——（舊臣花房職之）

小早川秀秋——（岡山市瑞雲寺の墓）（第一編参照）

秀吉辞世の句（木下家所藏の短冊）露とおち露と消えぬる我身かな なのはのことは夢の又ゆめ

高臺院夫人（北政所）使用の琴及風呂桶

足守藩主木下家所藏のもの（木下家には此外豊太閤に關係あるものを秘藏して居る）

（第一編木下家参照）

豊臣秀吉  
朝鮮征伐

桃山時代建築物其他

日蓮宗妙本寺鎮守堂、番神堂（特別保護建造物）吉備郡大和村  
 天台宗金山寺本堂（特別保護建造物）御津郡牧石村に在る、寺は天平勝寶年間報恩大師の創立、天正年間宇喜多直家の再建のもの。  
 美作總社宮本殿（特別保護建造物）津山市に在る。  
 妙覺寺

御津郡金川町日蓮宗不受不施派の本山、抑々日蓮宗は不受不施を通規とする。文祿三年秋九月秀吉が千僧供養をするに當つて日重の徒は之に應じた。日興は宗規を奉じて應ぜなかつた。此に於て不受不施の二派に分れた、不受不施派は寛文年間國禁となつたが後、御津郡宇甘村の人僧日正が不受を奉じて遂にその禁を解かれて妙覺寺がその本山となつた。

伊部燒——天正年間より茶器を作り秀吉の征韓役以來勃興を見た製陶業に一段の異彩を放つた（名工に三日月六兵衛あり）

一里塚

吉備郡眞金村にある、植樹は榎に松を兩側に配して居る。

（行程の判り易い爲に定めた通路の表識で織田信長は領内へ塚塚を築いて三十六町を一里とした、次いで豊臣秀吉も全國を檢地させて一里毎に塚塚を築いて、徳川家康は慶長九年に江戸日本橋を基点と定めて七道に塚塚を築かした。）

諸大名其他の配置

配置年	廢止年	治所	始祖	備	考
-----	-----	----	----	---	---

慶長以後大名の配置

慶長五年	全	岡山	小早川秀秋	備前・美作 三二萬五千石	
全	岡山	池田忠繼	二萬五		
全	延寶七年	戸川達安	二、五		
元祿二年	慶長五年	板倉重高	二、五		
慶長五年	關ヶ原戰後	木下利房	三、〇（或四、〇）		
全	慶長二〇年	山崎片盛	一、〇		
元和三年	寛永一八年	小堀政一	六、五		
寛永一八年	元祿六年	池田長幸	四、八		
元祿六年	正徳元年	水谷勝隆	六、五		
正徳二年	延享元年	安藤重博	六、〇		
延享元年	全	板倉澄慶	六、〇		
大阪陣後	全	伊東長昌	一、三		
寛永一八年	維新	池田長信	池田氏ノ祀ヲ立ツ 〇、一		
全	慶長二年	池田輝言	（維新當時宗家ヲツグ 二、五）		
寛永一二年	慶長二年	池田輝録	一、五		
元祿一〇年	慶長二年	關田長繼	一、八		
全	文久三年	森長治	關氏ハ津山ノ森氏ノ後ナレバ長治長繼 ソノ後ヲツグ		
文久三年	維新	森孝繼	一、〇		
慶長五年	元祿九年	森廣政	一八、六五		
元祿二年	慶長二年	松平長政	一〇、〇		
慶應二年	慶長二年	松平武聰	一、〇		
明和元年	慶長二年	三浦明次	二、三		



縣外諸侯の領地

領主	治所	備考	領主	治所	備考
青木一重	小田郡川面村	攝州淺田領主	丹羽 蒸	勝田郡勝間田村黒土	越後高柳
阿部正邦	上房郡中津井村	備後福山	大久保忠方	久米郡西川村奥山手	相模小田原
石川總慶	淺口郡玉島町	伊勢龜山	上屋篤直	英田郡大原村下町	常陸土浦
松平信峯	英田郡倉敷	丹波龜山	脇坂安興	眞庭郡天津村中村	播州龍野
徳川綱豊	久米郡大井西村坪井下	甲 府	仙石政辰	久米郡弓削村下弓削	但馬出石
内藤政森	英田郡巨勢村海内	上野安中	堀田正順	勝田郡勝間田	下總佐倉
土岐頼稔	阿智郡皆部村	駿河田中	久世廣明	勝田郡大崎村西吉田	下總關宿
太田實晴	勝田郡勝間田	上野館林	土居利里	久米郡鶴田村	下總古河
松平乗保	久米郡折穴村上折穴	美濃岩村	松平齊厚	英田郡大原村下町	石見濱田
松平信行		羽前上山	松平齊宣		播州明石
氏名	治所		氏名	治所	
花房左京	吉備郡高松村		水谷信濃守	阿智郡刑部村	
花房伊織	都窪郡加茂村新止下		池田筑後守	後月郡西江原町	
戸川支番	全 撫川		長谷川周防守	都窪郡庄村日吉庄	
戸川内藏助	全 早島		高山安左衛門	後月郡木ノ子村	
戸川備前守	全 妹尾		榊原左衛門	都窪郡加茂村津寺	
戸川五左衛門	全 庄村宮崎		小堀久太郎	後月郡東江原村	
水谷主水	川上郡富家村布賀		一橋家賄料	全 西江原町	

諸侯以外の領地

水谷小左衛門 阿智郡刑部村

天 領

都窪郡倉敷 小田郡笠岡 英田郡倉敷 全 大原村 久米郡大井西 御津郡鹿田 吉田郡高田  
 英田郡土居 眞庭郡久世  
 備考 時代によりて増減變更あれども羅列して参考とす。

一國一城の制(岡山城、津山城、松山城)  
 鑛 山

徳川氏は鑛山に對して意を注ぎ代官を遣すにも有爲の材を用ひた。吹屋鑛山——平安朝初期大同年間の開坑だといふ川上郡吹屋町。帶江鑛山——明治十年の開坑都窪郡中庄村(今は休鑛)。彌高鑛山——櫻町天皇元文年間の開坑小田郡三谷村。吉岡鑛山——近來鐵鑛を産するを以つて名高い久米郡吉岡村。其他縣下には大小百六十有餘もある。又三石の蠟石は慶長年間八木淨慶の發見にかゝるもので和氣郡三石村にある(備前國志)近來耐火煉瓦クレーの製造が盛んな。

鑄 錢(錢屋敷)  
 岡山市二日市にある。寛永十五年池田氏に鑄錢の事を許したが後又禁じた。今錢屋敷の名のみが残つて居る。

參觀交代  
 宿驛(備前——三石、片上、一日市、藤井、岡山)

(備中——板倉、川邊、矢掛、七日市)  
 (本陣は大名の宿泊する家、脇本陣は其豫備)  
 (板倉は恰も江戸、鹿兒島の中間距離)

江戸幕府 徳川家光

蒔田廣定

寛永十三年長子定正に七千石を與へ、次子長廣に三千石を分つて三須に居らしたので之より蒔田氏旗本交代寄合となる。

(旗本は徳川將軍の直參の諸士で一万石以下即ち大名の下で家人の上に位するもので交代寄合、寄合衆小普請組の三等がある。交代寄合は祿高萬石未満であるけれども其身は在所に居住して隔年江戸に參觀交代すること等總べての格式が准大名で在府の場合によつて寄合衆と組合つて諸門の警備或は駿府加番を勤めることがある。寄合衆は三千石以上萬石未満の旗本で非役の者をいふ。高百石について小判二兩の役金を納めさせられることは小普請に似て居る。小普請組は祿高三千石以下で別に職務はないが幕府の造營ある場合人足を出して工事を授ける、又人足を出す代りに百石について二人づつの割合に小判三兩の小普請金を納める掟であつた)

板倉重昌(京都所司代)

京都所司代勝重の子で島原の亂に幕軍を督して戦死した。此板倉氏の裔孫が松山及庭瀬藩である。

縣社八重瀧神社(祭神板倉勝重)上房郡高梁町

村社清山神社(祭神板倉重昌)吉備郡庭瀬町

宗門帳

島原亂後、宗門改を行ひ寺院が戸口調査をして居た。

井戸平左衛門正明(芋代官)

笠岡町威徳寺に墓がある。

岡山後樂園

貞享四年池田綱政が津田永忠に命じて造る所で元祿三年擴張した。

水谷勝隆——勝宗

海外諸國との交通

天主教の禁

島原の亂

徳川綱吉

徳川吉宗

江戸時代の佛  
教文物西洋學  
術の傳來

松山の藩主で高治年中大森元直をして淺口郡の海岸地方を開拓せしめ高瀬通しを作り權を植ゑ殖産興業に力を注いだ。

室鳩巢、僧寂嚴等が出た。

大石良雄

岡山の生れで赤穂の老職となつた人で高梁の水谷氏の城受取を勤めた。

黒住教——黒住宗忠(岡山市)

金光教——金光大陣(淺口郡金光町)

日蓮宗不受不施派——日生(御津郡金川町)

芭蕉の鏡石

笠岡古城山に在る、宗祇の休石(山松の影や浮き見る夏の海)に對して翁は(世の中はさらに宗祇のやどりかな)といふた。

宇田川玄隨、箕作阮甫等も名高い人(後記)

江戸時代善者の人々

森 忠政(津山藩主で鶴山城を築いて水利民福に留意した名侯)

小堀政一(松山城在蕃の人で遠江守と稱し遠州流挿花茶儀造園の祖)

水谷勝隆(松山藩主で民政に意を留め殊に玉島附近の開拓を成就した)

池田光政(岡山藩主で新太郎少將と呼ばれ當時海内に知られたる名侯であつた)

木下利當(足守藩主で木下流槍術の祖である)

石川成一(岡山藩士で光政に仕へ見島郡の池溝を穿ち民政に留意した人)

熊澤蕃山(備前侯に仕へた陽明學者中江藤樹の門人であつて藩主光政の善政に參劃して功績が多かつた)

津田永忠(岡山藩士であつて蕃山に次いで或は獎學に或は勸農に留意して藩主を輔けた)

池田綱政（岡山藩主で新太郎少將光政の子であつて後樂園は此人の頃出來た）  
木下公定（足守藩主で學問を奨めた好學の領主である）

長尾勝明（津山藩主森氏の老臣であつて祖父一勝は福島正則の臣であつた。勝明は勤王の志が深く院庄に

碑石を建てたが光圀楠公碑を建てた五年前である。元祿十年森氏國を除かれたが勝明主家の祀を立てる事を幕府に願ふて許された忠良の名臣である）

井戸平左衛門（小田郡笠岡代官所に居た名代官で凶年に備へる爲に甘藷を植えしめたので芋代官といはれて居る）

室 鳩巢（上房郡の人で幕府の儒官となり吉宗の命で六論衍義を著した）  
僧 寂嚴（字諦乗俗姓は岩田氏世々足守侯に仕へた。年十二で普賢院の超染律師に學び更に京都の五智山

の曇寂阿闍梨に師事し寛保元年淺口郡連島の寶島寺に住し碩德を稱へられ後、倉敷の玉泉寺に退隱して世を終つた。著書多く又書にも巧であつた）

池田政香（鴨方藩主で新太郎少將光政の徳業を慕つて民政に意を注いだ人）  
伊東長詮（岡田藩主で幼少より領民を愛して仁慈の政を布いた名侯である）

松平康哉（津山藩主で最も民政に留意した名侯である）  
湯淺常山（岡山藩に仕へた人で名は元頑、字は子祥といふ。業を服部南郭に受けた。俠氣直言の爲め致仕

して著述に従つたが常山紀談外名著がある、天明元年歿した）  
西山拙齋（淺口郡の人、醫家に生れ詩文に長じた學者である）

古川古松軒（吉備郡に生れた地理學者で日本中を歴遊して地誌を書いた）  
岸本武太夫（苫田郡の人、關東六万石の代官となり治民に意を用ひた名代官）

宇田川玄隨（津山藩醫で蘭學を攻究し西説内科選要等著譯がある）  
早川八郎右衛門（幕吏で作州久世の代官となつて民政に意を注いで功績の多かつた人）

小寺清先（神島天神の祠官で清續の子である、幼より穎悟後、神道を究め和歌國學を修めたが四十歳の頃

眼疾を病み詞職は子清之に譲り早川代官の敬業館の教師となり功多く文政十年八十で歿した）  
藤井高尙（吉備津の祠官で名高い國學者である。本居宣長の高弟で松の屋といふ）

浦池九淵（岡田藩士で名は潜、字は鱗長、左五郎といふ。近習、用人より身を起して寛政六年執政に進み

民政に意を用ひた名臣であり且學者であつた）

表具屋幸吉（岡山の人で鳩の研究から紙翼を作つて航空研究をした人）

宇田川玄眞（伊勢の人、本姓安岡氏、玄隨の嗣となり蘭醫として名高く津山侯に仕へた）

戸川安清（都窪郡中庄知行所の旗本、幕府に仕へて功があり又詩文を嗜んだ人）

丸川松隱（淺口郡の人で新見藩關侯の儒臣となつた人で通稱は一郎、字は千秋といふ。門人に方谷がある  
天保二年歿した）

黒住宗忠（御津郡今村の人で至誠以て神道を究め神人感應の理を休得した人で黒住教の教祖である）

箕作阮甫（津山藩士、蘭學者として知られ宇田川玄眞の門人で嘉永の頃幕府の役人となつて活動した）

關藤々蔭（小田郡の人で福山侯阿部氏に仕へて功があつた人）

緒方洪庵（足守藩士で大阪に出て醫を業とし幕府の侍醫となつた蘭學者である）

平賀元義（岡山藩老池田勘解由の臣平尾長治の子で寛政十二年の生れである。獨學國書を涉獵し又和歌を

善くした、寡居して四國山陰及播備の地に徘徊し晩年は赤磐郡稻蔭に居た、著書も多い）

川上忠晶（學職を以て備前池田家に仕へた人、母艶子亦賢婦人である）

牧野權六郎（備前藩士であつて幕末の頃勤王の志厚き人）

松平齊民（津山藩主濟世治民に留意した名侯である）

山田方谷（上房郡の人で松山藩儒となり幕末の藩主勝靜を輔けて功多く治績見るべきものがあつた）

坂倉勝靜（松山藩最後の殿様で又最後の老中として活動した人である）

坂谷朗廬（川上郡の産れで興讓館中學校の源を立てた名高い學者）

藤本鏡石（上道郡の人で幕末の勤王志士、大和十津川に義兵を擧げた人）

上田及淵（名は忠矣、肥前天草の人、平井恭輔の六子で天保九年酒津に來寓して後京師に遊學し元治元年岡山藩の醫員となり傍ら藩費に出仕し和氣清磨、兒島高德の事蹟及藩内神社の調査をした人である）

池田長發（井原知行所の旗本、幕末使者として遠く歐洲に行つて鎖國交渉に當つた人）

熊田 治（幕末松山藩の執政で藩主勝靜は老中であつたので恭順の赤誠を披瀝すべく藩士一同に代つて玉島に自刃した）

蒔田廣孝（淺尾藩主で幕末一萬石の封額を得て大名の列に加はり又總社町長を勤めたことのある人）

野崎武左衛門（兒島郡の人、名は弼、姓は昆陽野氏、多田屋と稱す。多田滿仲の裔で武左衛門の頃家運衰へ妻と共に足袋を製造し更に塩田を築造して成功し地方殖産興業に盡した人で慶應元年歿した）

金光大陣（淺口郡古見の人で敬虔の念の厚い人で金光教の教祖である）

釋 日生（金川妙覺寺の開祖で日蓮宗不受不施派再興の人）

箕作秋坪（上房郡菅野地土郎の子であつて師阮甫の子となつた、子孫名士多く明治の學者菊地大麓兄弟は此人の子である）

箕作麟祥（秋坪の子で法學博士、法律に精しく行政裁判所評定官に進み華族に列し界爵を授けられた）

安藤鐵馬（英田郡に生れた尊王攘夷の志士で膽勇にして仁侠の人であつた。長藩の元治の變に加はり眞木和泉久坂元瑞に屬して鷹司邸に據り奮戦して斃れた）

江見銳馬（陽之進と稱し備前藩臣である、尊攘論は俗論なりと之を斥け専ら勤王の志氣のみを鼓舞した國事周地方として在京八年大いに公卿諸侯の間に奔走した、明治維新後權大參事に任ぜられたが明治四年歿した）

伊木忠澄（長門守と稱し三猿齋と號した、岡山藩の國老で慶應三年大政奉還當時京師にあつて勇戦隊義戦隊震雷隊を組織して萬一に備へ有栖川宮より賞詞及乘馬を賜はつた。維新後岡山藩大參事となり明治十七年歿した）

諸藩の治

津田馬之助（木下侯の世臣である。性快活、博學にして才識があり辯論巧に一座を壓する位であつた。槍術を以て藩費に師範役となり廣く天下の正義の士と交はり勤王の志を養ひ藩の軍改革等を企てたが反對者の爲に肆に志士を隠した罪等を數へられ屠腹を命ぜられた）

櫻井頼直（苫田郡大野村の人其先は武田信玄で世々名族の里正であつた頼直常に在京右大臣岩倉具視の下に出入し更に戊辰の役には具定公の御旗奉行として功を立てたが明治二年江戸で暗殺された）

井汲唯一（津山藩士政智の子である、江戸に上り劍客齋藤彌五郎の門に入り塾頭桂小五郎から武人と雖も學なかるべからずと勧められ爾來文武共に精勵し小五郎に代つて塾頭となり廣く勤王の志を伸べ歸藩の後は一藩其風に向ふた。後異圖あるを恐れ獄に投ぜられたが一古釘で自刃した）

新田開墾

瀬戸内海沿岸地方は鎌倉時代から既に新田開墾の事があつたが最も盛んになつたのは徳川時代である。殊に其初期に於て池田、水谷、水野の諸侯の墾田施行は見るべきものがある。

賢 侯

池田光政——（熊澤蕃山、津田永忠等）

岡山藩學、閑谷學校、諸制度治民、百間川、半田山植林、新墾田、池溝を開く。

松平康民——（儒士大村庄助外名臣多し）

修道館、諸制度改革給養法及育兒法を設く、孝子節婦表彰。

板倉勝靜——（山田方谷等）

有終館、文武道振作、濟世治民、老中となり最後の幕政に參劃す。

木下公定

追琢館、仙洞御造營奉仕、桑華蒙求其他の著、治民好文の主。

伊東長詮

敬學館、少年の頃より豊凶に留意、治民救恤に努め領民父母の如く其徳を仰ぐ。  
水野氏の治水

元備後に流入せし小田川を備中に引いて福山を救ふた。  
(其他諸藩費)

鶴田—道學館 眞島—明善館 庭瀬—誠意館 新見—思誠館 成羽—勤學所

久世—典學館(名代官早川正紀及眞野民次、菊地好直)

笠岡—敬業館(代官早川正紀及小寺清先)

倉敷—明倫館(代官古橋新左衛門及龜山右門)

一ツ橋領—興讓館(阪谷朗虛)

岡山藩費(現今岡山縣女子師範學校内—講堂)

閑谷學校(現今岡山縣閑谷中學校)

興讓館(現今岡山縣興讓館中學校)

平田篤胤

出羽秋田城下下谷地町に生れ元大角元琢といふ、松山藩士平田篤稔の養子となりて平田姓を名乗り篤胤  
と改めた實に國學の四大人である。

藤井高尚

吉備津の祠官、本居宣長の門人である。

西山拙齋

淺口郡鴨方町の人、醫を業とし詩文に通じて居た。

小寺清先

神島天神の祠官、後に敬業館に勤めた人である、小寺氏は世々國學を研究す。

國史古典の研究

木下幸文

淺口郡長尾の人、香川景樹の門人で國學及歌道を修め盡も巧なり。

小原東作

吉備郡新本村の人、幕吏となり功績あり國學に造詣深かつた、墓は三河國にある。

土肥經平

岡山藩土肥貞平の三男で寶永四年に生れた典膳といふ、寶曆十四年直侃を以て罪を得、宇治郷の別業付  
裡館に居て優遊餘年を送る、史書の著多く寸箴之塵、備前軍記外無慮千餘卷あつて何れも手書したもの  
である。

武元立平

號を高林といひ和氣郡英保村の人、登々庵(名は正實通稱周平)の弟である。農民の爲に勸農策を著し最  
も國史に通じ史鑑二十冊は國体を明にし名分を正す。山陽の政記は此史鑑に負ふ所が多い。後、閑谷費  
の教授となり文政三年赤穂に歿した。

堀 安道

文政十二年總社町に生れ國學の造詣深く總社宮の縣社に列せられしは此人の功、總社記及備中誌(吉備  
國史補の改題)は安道の著、今の總社宮境内の香屋神社は此人を祀つたものである。

湯淺新兵衛(常山)は岡山市天瀬に生れ服部南廓の門人で古學を研究し關藤藤蔭は福山藩に仕へて皇道を忘  
れず功績が多い。

古川古松軒

吉備郡新本村の人、獨學經史百家に通じ地理學に精しかつた。

藤本眞金

中山忠光を奉じ天誅組を率る原田龜太郎等と大和五條に兵を挙げた(文久三年)

露人の來航、  
海防論、蝦夷  
地の開拓  
米使節の來朝  
開港權の論  
和親條約

安政の大獄  
幕府の衰頹

長州征伐

其他、安藤鐵馬、江見銳馬、津田馬之介、櫻井頼直、井汲唯一等。  
箕作阮甫 和親條約に参加す。  
天災地變の強訴。  
池田筑後守長發 歐洲に使う。  
淺尾騒動

慶應二年四月倉敷代官(櫻井久之助)留守宅を襲撃した奇兵隊立石孫一郎等は蒔田相模守廣孝の淺尾藩陣屋を焼打にした。  
松平武聰

大政奉還

鶴田藩主で水戸齊明の子慶應二年其陣屋濱田を毛利軍に逆撃されて城を焼いて一旦出雲の杵築に逃れた牧野權六郎  
江見銳馬、伊東佐兵衛、成田元美、山田貞順等も尊王の説をなす。藩主茂政を水戸より迎へ二條の會議に参加して大政奉還を論じた。  
池田茂政の入京。  
伊木忠澄

鳥羽伏見の戦

大政奉還當時京師を警備して功あつた備前藩の國老である。  
諸藩の鎮撫

明治戊辰の役

明治元年正月伏見鳥羽役があつてから親藩、譜代、旗本は皆朝敵となつた。然るに備前藩主茂政は兵を四方に派して去就を問はしめ歸順を勧告した。  
備中 木下備中守(足守) 板倉攝津守(庭瀬) 蒔田相模守(淺尾) 戸川主馬(撫川) 關備前守(新見)  
伊東播磨守(岡田) 山崎主税之助(成羽)  
播磨 森美作守(赤穂) 森對馬守(三日月) 本多肥後守(山崎) 建部三十郎(林田) 小笠原幸松丸(安志)

現代一般

台湾征伐

小田縣民(小田縣廳は笠岡に在つた)台湾に漂着し生蕃に掠奪された(明治六年三月)  
(淺口郡玉島町柏島の船頭佐藤利八及水夫佐藤兵吉、同權吉、同次助等四人)  
國會開設運動  
小松原英太郎等——請願建白(明治十二年)  
犬養毅は大隈重信等と共に大いに輿論を高めた。

一柳對馬守(小野) 丹波長門守(三草)  
美作 松平三河守(津山) 三浦肥後守(勝山)  
右諸藩及此外舊幕吏等は請書又は戰兵を出して勤王の誠意を表した。  
松山征伐

松山藩主板倉伊賀守は老中として將軍慶喜を奉じて逆謀を助くる罪を以て池田備前守は藩老伊木若狹をして兵を率ゐ賜はりし錦旗を押立てて松山に向はしめた。然るに伊賀守の留守居、一族板倉千代太郎及老臣金子外記等一意恭順を表して事無きを得た。

(熊田治——藩主伊賀守を大阪に分れ藩兵を率ゐて玉島に上陸——自及す)  
(廣島藩主淺野長勳亦備中諸藩鎮撫に任じた)  
蒔田廣孝

關備前守長克と共に備中國監撫の命を受けて都より歸國した。  
東征從軍  
鴨方藩兵は大總督宮熾仁親王の警衛に當り備前藩は其先鋒となつた。

明治維新、東京奠都  
版籍奉還、廢藩置縣(第一編参照)

第一回帝國議會に西毅一は祝辭演説をなし其起源本質を述べた。

朝鮮事變

公使花房義賢交渉に當る。

日清役

大藏平三等の功績及垂死の喇叭卒木口小平。

北清役

太沽砲臺攻撃の時海軍大尉白石霞江(後少佐)先登第一——血染の軍旗。

菊地大麓

教育勅語を英國の倫敦大學に講ず——世界を舉げて此の如く尊き完き聖訓は他に無しと評せられた。

(明治三十五年)

日露役

旅順閉塞隊に佐倉丸指揮の少佐白石霞江(霞江は作州業田村の産である)及杉正人等がある。

明治天皇の行幸

明治十八年三幡港御上陸縣下御巡幸、明治四十三年大演習御統裁の爲御來駕。

岡山師團設置

明治三十九年岡山第十七師設置(現今廢止)

大正、昭和の重臣

平沼騷一郎、犬養毅、宇垣一成、藤井較一等。

岡山醫科大學

大正十一年醫學專門學校昇格。

長島愛生園

國立癩病患者收容所を邑久郡長島に設置し愛生園と稱す。

今上陛下御來駕

昭和五年大演習御統裁のため行幸。

國立公園

瀬戸内海國立公園に兒島郡下津井海岸編入。

滿洲事變

獨逸隊長池上秀夫中尉、長城一番乗をなし戦死した。

津田真道(津山藩士津田文行の子、司法官、衆議院副議長等になつた人で男爵を授けられた)

川田剛(號を瓊江といひ玉島の人で山田方谷の門に入つて研修し文學博士を授けられ宮内官になつた)

三島毅(號を中洲といひ都窪郡中洲の人、明治の鴻儒で大正天皇の侍講であつた)

岸田吟香(久米郡の人で江戸に出て勉學し諸種の事業を興したが特に記すべきは吟香木版半紙摺新聞紙を

發刊した事で本邦新聞事業の祖である)

磯崎眠龜(天保五年茶屋町に生れ花筵製織機等を發明して明治三十年勅定の綠綬褒章を下賜されたが同四

十年歿した)

石坂惟寛(岡山藩士赤松秀の二男で天保十一年の生れで石坂堅壯の養子となり陸軍々醫總監に進んだ人)

花房義賢(岡山藩士で明治初年外交官となり後日本赤十字社事業に盡した人で男爵を授けられた)

岸本芳秀(御津郡巖井の人で世々令人として池田侯に仕へた、芳秀京都に上り安信雅樂頭に教を請ひ自ら

吉備曲十二、吉備遊三百餘を作つた。明治十一年皇太后の宮に召されて之を奏した。實に我が吉

備樂の祖である)

雲照律師(出雲簸川郡の人、連島寶島寺に來住した高僧で學徳一世に高く後御室仁和寺派の管長となり大

僧正に進み明治四十二年に遷化した。

- 西 毅一 (號を微山といひ閑谷學校を再興し又國會開設運動に奔走した)
- 馬越恭平 (後月郡木之子村の人で大實業家である大日本麥酒會社其他に關係して居たが昭和八年歿した)
- 黒潮義門 (岡山藩士黒潮源六郎の長子で弘化三年に生れた人で陸軍中將に進んだ)
- 岡 直廬 (弘化四年岡山石關町に生れた國學者である)
- 小松原英太郎 (御津郡の人で山陽新報を起し文部大臣、樞密顧問官に任ぜられた人)
- 岡 玄郷 (津山藩の人で明治天皇に奉仕し侍醫頭として功があつた人)
- 大藏平三 (都窪郡茶屋町の人陸軍中將に進んだ騎兵科の創設者)
- 久原躬弦 (津山藩士で理學博士となり京都大學の理工科學長、同大學總長となつた人)
- 淺野應輔 (大藏平三の弟で理學博士、電氣工學の權威者)
- 菊地大麓 (津山藩士で大學總長、文部大臣等となつた人)
- 犬養 毅 (吉備郡庭瀬町から出た明治大正昭和の大政治家である)
- 鳩山和夫 (勝山藩士で東京代官會長、東大教授、衆議院議長になつた人。嗣一郎は文部大臣である)
- 藤井較一 (岡山藩士で日清、日露、日獨諸役に偉勳を立てて大正五年海軍大將となつた人で岡山縣最初の  
大將である)
- 杉山岩三郎 (岡山藩士で廢藩の後、岡山縣及島根縣權參事となり明治五年辭官の後、實業界に身を投じた  
が功績が多かつた。人々爲り剛毅世に呼んで備前西郷といふた)
- 香川眞一 (岡山藩士で岡家に天保六年生れ香川氏に養嗣子となつた人で維新後地方官を勤め明治十二年官  
界を辭し専ら公益自治に盡した或は諸會社の重役となり或は縣會議員となり其の功績顯著であつ  
たが大正九年歿した)
- 兒島惣次郎 (上道郡八幡の人、長野六三郎の三男で明治二年の生れである。後、岡山の兒島滋胤の養子と

なり身を軍籍に投じ陸軍中將となつた人で軍政通である)

- 有松英義 (岡山藩士で諸官に歴任し樞密顧問官になつた人で我警察改善の功勞者である)
- 原田一道 (鴨方藩士で我が陸軍の建設者で陸軍中將に進んだ人。男豊吉は理學博士で本邦地質學界の權威  
である)
- 櫻井熊太郎 (上房郡高梁の産で國土的典型の人、日露役終局の時日比谷に國民大會を開いて大いに其の意  
氣を示した)
- 大西 祝 (岡山藩士大西定直の養嗣子で號を操山といひ文學博士となり國民の道德的理想を高からしめる  
に努めた人)
- 石原健三 (邑久郡笠加村の人、元治元年生れ庫平の三男で地方長官に歴任して功あり後、宮内次官となり  
現に樞密顧問官である)
- 宇垣一成 (赤磐郡湯瀬の人、宇垣十七八の弟で明治元年の生れである。同二十四年陸軍少尉に任じ爾來各  
部隊長、獨逸駐在武官、師團長等となり更に大正十三年陸軍大臣となり軍事參議官陸軍大將に進  
み後屢々陸相に親任され現に朝鮮總督の要職に居る)
- 石井十次 (岡山孤兒院の創設者で日向茶白山の地で歿した)
- 兒島獻吉郎 (邑久郡福田の人、慶應二年の生れで兒島東雄の次男で文學博士京城帝大教授、漢文學の泰斗  
である)
- 坂田快太郎 (阿哲郡の人で慶應元年の生れである元岡山醫專の教授で醫學博士であるが號を九峰と稱し詩  
文に長じ外科坂田病院を經營した人である)
- 西村丹次郎 (吉備郡奈村板野友太郎の弟で慶應二年に生れ高梁町の西村鶴太郎の養子となつた或は新聞記  
者に或は官吏に職を奉じて居たが後衆議院議員となり農林次官となつた現に民政黨の相談役)
- 窪田清太郎 (岡山藩士窪田善之の長兄で慶應元年の生れである官界に入り累遷行政裁判所長官となり法學



博士を授けられ現に編密顧問官である)

木口小平 (川上郡の人で日清役の時垂死の喇叭卒として名高い)

秋山定輔 (倉敷市の人で政界に名あり又東京二六新聞を経営した人)

高杉 晋 (都窪郡三須村の人で高杉幸之助の二男である明治元年の生れであつて大日本麥酒會社其他の重役である)

木村清四郎 (小田郡三谷村木村勘吉の長男で文久元年の生れであつて元日本銀行の副總裁であつたが現に貴族院議員で財界に重きをなして居る)

山田弘倫 (津山藩士で明治二年の生れ寺田眞一の次男である山田弘謨の養子となり明治三十年東大醫學科を出て軍籍に入り醫學博士となり大正六年軍醫總監に進んだ人である)

山室軍平 (阿哲郡本郷の人明治五年山室佐八の三男として生れた苦學力行、福音學校、同志社に學び明治二十三年以來傳導に従ひ今救世軍日本司令官中將である)

平沼驥一郎 (津山藩士平沼晉の次男で司法官として身を起し檢事總長、大審院長、司法大臣となり現に男爵を授けられ編密院副議長の要職に居る。兄淑郎は早稻田大學の重鎮で嘗て學長を勤めた)

江見水蔭 (明治二年岡山に生れた杉浦重剛の稱好塗に入り英京英語學校に學び現友社員となり新聞及雜誌記者となつた初め小説を書き近時大衆文藝に筆を染め又俳句をよくし考古學的蒐集に興味を有し著書も多い)

阪谷芳朗 (後月郡江原の鴻儒朗慮の四男で大藏大臣、東京市長となつた。現に政界、財界の重鎮である。男爵を授けられて居る)

森 彦三 (御津郡北方の人で森庄藏の次男として慶應三年に生れた工學博士で鐵道工學に精しく鐵道院、滿鐵に勤め後名古屋高工校長となつた。兄岩太郎は數學者である)

野崎廣太 (吉備郡庭瀬町の人で鐘淵紡績會社の重役である)

綱島榮一郎 (上房郡有漢村の人で少壯の頃上京し東西の文學及哲學を研究して早稻田文學の編輯に従事した人)

矢野恒太 (上道郡角山村矢野三益の長男で慶應元年の生れである明治二十二年第三高等學校醫學部を卒へて日本生命保險會社の醫員となり爾來保險事業に没頭し現に第一生命相互會社を創設して其社長である)

龜高德平 (兒島郡福田村龜高新一郎の長男で明治五年の生れである東大理科化學科修了した理學博士で東京高師の教授を経て現に三共製藥會社顧問である)

小川郷太郎 (淺口郡の村山菊藏の長男として明治九年に生れ小川知彰の養子となつた東大法科に學び京都大學教授となり法學博士を授けられ大正六年より代議士に轉じ民政黨顧問として名高い財政通の政治家である)

犬丸錢太郎 (岡山藩士犬丸石雄の長男として生れ農商務省海外留學生としてハアヴァフオード大學に學び夙に輸出貿易の研究に苦心し現に中華煙草會社其他の社長である)

岸本鹿太郎 (苫田郡高野の人で岸本彌四郎の長男として明治二年に生れた同二十七年少尉に任ぜられ同三十四年陸軍大學を卒へ果進して昭和四年陸軍大將に任じ豫備役に入つた人である)

滿谷國四郎 (明治七年總社町に生れた上京の後小山正太郎の不同舎等に學び明治三十一年明治美術會創立十年展に「林大尉の死」を出品して明治大帝御買上の榮に浴した今帝國美術院會員、太平洋畫會員である)

齋藤大吉 (都窪郡福田難波幾太郎の三男で明治五年の生れであつて齋藤秀親の養子となつた工學博士京大教授で探鑛冶金の權威)

佐藤範雄 (淺口郡金光町、金光教本部の長老で同教會擴張に功勞多い人)

尾上八郎 (津山藩士北郷極一の弟で明治九年の生れであつて尾上勤の養嗣子となつた早稻田大學、東京女

高師の教授で大正十二年假名文字研究で博士になった)

杉 榮三郎 (杉良太郎の二男で明治六年の生れである法學博士で宮内省圖書頭兼諸陵頭等を勤めた)

片山正夫 (明治十年都窪郡茶屋町に生れ明治三十三年東大化學科を卒へた理學博士で現に東大教授兼理化學研究所主任である)

池田長康 (千坂高雅の六男で明治十六年の生れである岡山藩考池田長準男の嗣となり京大政治科を出て現に貴族院議員で研究会の重鎮である)

竹久夢二 (明治十七年邑久郡本庄村に生れた本名は茂二郎、畫は獨創夢二式、新聞雜誌に挿畫を描いて名高い)

鹿子木孟郎 (明治七年岡山東田町に生れた人で不倒山人の號がある初め松原三五郎の天彩學舎に學び後上京して小山正太郎に導かれた明治三十三年研究の爲歐米に行き同三十七年に歸朝關西美術院を創立した洋畫界の重鎮である)

薄田泣菫 (明治十年淺口郡連島町に生る本名を淳介といふ獨學の文藝家、明治三十五年頃大阪に文藝雜誌『小天地』を主宰發行した後大阪毎日新聞社に入り後病の爲同社の囑託をなつた、著書に隨筆集詩集等多し)

近松秋江 (本名は徳田浩司和氣郡の人、早稻田文科を出て小説家評論家として名高い。著に『別れたる妻都會と田舎』等がある)

岡田忠彦 (岡山藩士岡田隼平の長男で明治十一年の生れである埼玉、長野、熊本の知事となり現に政友會の顧問である)

兒島虎次郎 (明治十四年成羽に生れた、上京して藤島武二の門に入り後美術學校を終へ更に渡歐して白佛に斯道を研究し令名高かつた人である)

正宗白鳥 (本名忠夫、明治十二年和氣郡伊里村に生れ早稻田專門學校を出て讀賣新聞に勤めた有名な小説

家)

正富汪洋 (文藝家で本名を山太郎といひ明治十四年邑久郡本庄村に生れた東洋大學國漢科を卒へ尾上柴舟

前田夕暮、三木露風、若山牧水等と車前草社を結んだ頃より名を知られた今汪洋の詩は最も世に謳はれて居る)

田中寛一 (尾崎若松の四男として上道郡西大寺に生る明治十三年田中儀一の養嗣子となつた人で現に文學博士東京文理大教授で實驗心理學の權威で人間工學等の著がある)

川村清一 (津山市の人、川村良次郎の長男で明治十四年に生れた千葉高等園藝學校の教授で植物學の權威者で理學博士である)

近藤萬太郎 (邑久郡豊村の人、東大農科を出た農學博士で種子の研究大家である現に萬國學術研究會員であり大原農業研究所長である。弟喜一も亦醫學博士として令名がある)

古武彌四郎 (邑久郡本庄村の生れで古武彌津治の二男で大阪帝大醫學部教授で醫學博士で醫化學の權威者である)

額田 晉 (邑久郡美和村額田篤太の次男で明治十九年生れである醫理學博士で現に帝國女子醫專校長である。兄豊は醫學博士で日本大學部長で内科刀圭界の權威である)

板野新夫 (吉備郡桑村板野稔の長男で米國に渡つて研究を卒へ歸朝の後農學博士を授けられ現に大原農業研究所に居り特に土壤堆肥學の權威者である)

加藤元一 (阿哲郡新見の人で加藤虎雄の次男として明治二十三年生れである慶應大學教授で醫學博士で生理學に精しく不滅衰傳統説を以て恩師石川博士と多年論陣を張つて居る)

額田六福 (劇作家、勝田郡の人で明治二十三年の生れである早稻田大學英文科を卒へ大正六年の處女作『出陣』以來或は劇作に或は評論に令名高く著書亦多く雜誌舞台を發行して居る)

田村 剛 (次田壽次郎の次男で明治二十三年の生れである大正四年東大林學科を出た博士で千葉高等園藝

學校及東大農科の教授で現に國立公園委員會委員である)

池崎忠孝(上房郡高梁町の人で今大阪朝日新聞社に居る評論家、海軍方面の研究者である)

吉田 苞(明治十六年上道郡宇野村に生れた東京美校出で昭和三年帝展推薦となり兒島虎次郎の後を受け  
て明治神宮壁畫『日露宣戰布告御前會議』を描いた)

常の花寛一(岡山市に生れ常陸山の弟子となり横綱となり角力道に謳はれた、本名は山野邊寛一である)

大原孫三郎(縣下第一流の素封家で孫三郎六世の祖與兵衛に端を發し三世の祖は壯平、確堂と號し分家原  
氏より入つたが實に巨萬の富を致したは此人の頃からである。嗣孝四郎は明治二十二年倉敷紡績  
同二十四年に倉敷銀行を興した、孫三郎は父祖の志業を繼いで益々之を擴張した人で倉敷市の今  
日あるは氏に負ふ所が多い。青年の頃早稲田に學び後實業界に入り傍ら教育及社會事業に貢獻し

獎農會の設立、日曜講演の開催、社會問題研究所(大阪)の設立、倉敷紡績、同中央病院、中國銀  
行の經營、獎學會、學資金貸與、美術館の設立等共功績事業は擧げて數ふべくもない。

入澤听江(岡山市花畑に生れ本名は賢治、書道に秀で又南畫に巧で日本書道振作會文人畫展等に出品して  
再三特選となつた)

柚木久太(明治十八年玉島町に生れた洋畫家である父玉邨は東大農科出身の日本畫家である。久太は滿谷  
國四郎、中村不折に師事し佛國に研究を卒へ大正四年歸朝、目下帝展審査員である)

(終)

昭和八年十一月五日印刷  
昭和八年十一月十日發行

發行兼編輯人 岡山縣吉備郡大井村大字大井二二七五 福 武 辰 衛

印刷人 岡山縣吉備郡總社町大字總社三六〇 柳 本 弘 士 智

印刷所 岡山縣吉備郡總社町大字總社三六〇 柳 本 印刷所

發行所 岡山縣總社高等女學校々友會

終

